

Another WW II !

永遠のZero

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガルパン×はいふり×SWによる架空戦記ですが、学園艦やストライカーユニット等は一切存在しません。

日清戦争、日露戦争を勝ち抜き先進国の仲間入りを果たした日本であったが、平和はそう長くは続かず、1914年には第一次世界大戦が勃発、多大な死傷者を出した。

その経験から今後は目立った戦争は起こらない様に見えたが1937年7月に日中開戦、1939年9月には第二次世界大戦の序盤戦が開始された。

しかし、第二次世界大戦開戦前にドイツやイタリア、中国で不測の事態が発生した事により日米開戦は回避する事に成功したがイデオロギーの似ている中国共産党軍と同

盟を結んだソ連軍が日ソ不可侵条約を破り満州へと進軍し始めていた。

その際に日本は民主化を急ぎ、日本と戦争状態にあった中国国民党軍と和睦、ドイツやイタリアも臨時政権を発足し独伊米英仏と同盟を結び中国共産党、ソ連を相手に本格的に開戦、民主主義国家VS共産主義国家による世界大戦が幕を開けた。

そんな中で20年以上前から完全能力主義となった世界各国で多数の女性士官が誕生、日本にもその激動の時代をき抜いた3人の女性士官がいた。

そしてこの3人と彼女達を支えた多くの者達の活躍により極東の小国は再び大きな開花の時を迎えたのである。

※本作は架空戦記ですのでここはおかしいだろうと思われる場所が多々あると思いますが、その時は架空戦記だからで済ませて頂けると幸いです。

目次

プロローグ	1	もつとこそそ作戦です！	62
各種設定集1（主人公）	4	御前会議でピンチ！ 前編	70
1937年～1939年		御前会議でピンチ！ 後編	81
陸、海、空、それぞれの始まり		ソ連侵攻 黒溝台会戦です！	89
8		黒溝台防衛戦です！	97
遼陽の戦いです！	21	絶対に退けない戦いです！	106
全軍突撃開始です！	27	1940年～1942年	
撤退も大切です！	34	各種設定集1（主人公）改	118
ソ連に挑発されてピンチ！	43	ゼロ初陣す！	122
平原から市街地へ こそこそ作戦開始		大空の若鷲達！	130
です！	53	奉天会戦です！	139
		奉天の虎！、推参です！	148
		油断大敵です！	155

総出撃でピンチ！

162

暗闇の水雷戦でピンチ！

169

スパイ大作戦です！

177

ハバロフスク攻略戦です！

184

ハバロフスク・キロフスキーの悲劇で

す！

193

プロローグ

日清戦争、日露戦争を勝ち抜き先進国の仲間入りを果たした日本。

しかし平和はそう長くは続かず、1914年には第一世界大戦が勃発、多大な死傷者を出した。

その経験から今後は目立った戦争は起こらない様に見えたが2037年7月に日中開戦、1939年9月にはポーランドを主戦場とした第二次世界大戦の序盤戦が開始された。

しかし、第二次世界大戦開戦前にナチスドイツ総統であるアドルフ・ヒトラーは既に暗殺され、それと同時にイタリアのムッソリーニ政権が打倒されてしまい国家が混乱に陥った。

ソ連は帝政ロシア時代から悲願であった世界制覇を目論み1939年9月にドイツ、ポーランド、イタリアへと進撃を開始した。

更に同年10月にはイデオロギーの似ている中国共産党軍と同盟を結び日ソ不可侵条約を破り満州へと進軍を開始した。

日本は大陸より中国、ソ連からの脅威を受け、更にアメリカとも一触即発の状態に

なっていたがソ連、中国共産党両軍が中国にあるアメリカ軍、イギリス軍、フランス軍、ドイツ軍、イタリア軍などの駐屯地を手当たり次第に攻撃した事により日米開戦は回避された。

日本はナチス、ファシストの崩壊を受け民主化を急いだ。

ドイツやイタリアも臨時政権を発足、更に1937年半ばに日本と戦争状態にあつた中国国民党軍が日本と和睦、独伊米英仏と同盟を結び中国共産党、ソ連を相手に本格的に開戦、民主主義国家VS共産主義国家による世界大戦が幕を開けた。

そんな中で20年以上前から完全能力主義となつた世界各国で多数の女性士官が誕生、日本にもその激動の時代をき抜いた3人の女性士官がいた。

日本陸軍機械化装甲軍団を率い非常に困難とされていた雪原行軍を成し遂げ、遼陽にて僅な期間で戦車が自由に動き回れる程の強大な要塞を築き、世界最強の機甲軍と言われている名將ジェーコフ元帥率いるソ連陸軍機械化装甲軍団総勢100万以上の大軍勢を相手に自身の手勢10万で撃ち破つた智謀の名將、軍神、西住みほ。

日本海軍連合艦隊を率いアメリカ海軍、イギリス海軍、ドイツ海軍を恐怖させたソ連本国にて更なる強大な力を得て復活、最新鋭のソビエツキ・ソユーズ級戦艦4隻を要するバルチック艦隊を英仏海峡海戦にて再び撃滅、日本海軍連合艦隊を名実共に世界最強

の座を揺るがない物にした大海の英雄、岬明乃。

日本空軍最強と言われた海洋航空総軍第一航空戦隊を率い、オホーツク海海戦にて海域に居座る敵艦隊および目障りな湾岸航空基地、港湾施設などを撃破、東部西部戦線でほぼ同時に行われた航空戦力総到作戦にて幾度に渡り大軍を撃ち破り、一度の出撃で個人撃墜5機以上という天空のトップエース、宮藤芳佳。

そしてこの3人を支えた多くの者達の活躍により極東の小国は再び大きな開花の時を迎えたのである。

各種設定集1 (主人公)

主人公 (1937年～1939年)

西住みほ

年齢・23歳～25歳

身長・162cm

出身・熊本県(肥後の国)

所属・満州方面軍

階級・少佐～大佐

搭乗戦車・四式中戦車～四式中戦車改

役職・戦車1個大隊長～戦車1個連隊長

人物

戦闘その物はあまり好きでは無いが頭脳戦、特に知略、謀略に優れた軍師的存在。

士官学校時代の成績は常にトップで指揮官としてはとても有能だが、昔から引っ込み
思案などところがある。

実戦時にはほとんど先頭に立って戦う事は無かったが、大きな部隊の隊長になった時から、指揮官が逃げていてはダメだと自分に強く言い聞かせ先頭にて指揮を執る様になった事で兵の士気が上がり、更に己の知略や謀略が加わり初戦で戦果を挙げるほどである。

しかし引つ込み思案な性格が幸いし、大きな会議の場ではあまり発言出来ないでいる。

岬明乃

年齢・23歳〜25歳

身長・158cm

出身・長野県(信濃の国)

所属・日本海軍連合艦隊

階級・少佐〜大佐

所属艦艇・長門

役職・長門航海長〜長門艦長

人物

並外れた行動力と戦闘において驚異的勝負強さ、天性の直感力、更には幸運を併せ

持った絵に書いた様な指揮官。

幼い頃に海難事故で両親を亡くした過去があり、戦闘や防衛は勿論、人命救助が目的で再び海に舞い戻った。

士官学校での成績は良くも悪くも普通であるが行動力や勝負強さを買われ、本来志望していた部署とは全く違う主力部隊にすぐさま配属され、その才能は直ぐに開花した。ただし、時には周りを悩ませる無茶な行動を起こす事がある。

宮藤芳佳

年齢・18歳〜20歳

身長・159 cm

出身・神奈川県（相模の国）

所属・日本空軍海洋航空総軍

階級・少尉〜大尉

搭乗機体〜零戦21型

役職・戦闘機パイロット（1個飛行小隊長〜1個飛行中隊長）

人物

明乃と同様に並外れた行動力を持ち、こちらはパイロットとして天性の才能を持つ日

本空軍期待の若手エース。

父は科学者、母は医者と言うあまり軍には関係無い家に生まれたが、昔から正義感が強く父に言われた言葉から軍人となる事を決意、戦闘機パイロットを志願し士官学校での成績はみほと同様にトップで戦闘機パイロットとしては勿論、その家柄から応急医としても才能を秘めている。

とても優秀ではあるが感情的になり易い一面があるため、無茶な行動を起こす事がある。

※民主化が進んだとはいえ、直ぐにはリアルでも進行しないため、軍内部では未だに陸軍と海軍の対立は続いておりそこに巻き込まれるみほと明乃、そこにリアルでは存在しなかった空軍を設置し事で空軍がどの様に陸軍と海軍の対立に関与するかも考えていきたいです。

1937年～1939年

陸、海、空、それぞれの始まり

1937年初頭、ナチス総統が暗殺されナチス政権が崩壊した。

同年春、イタリアのファシスト政権が崩壊した。

同年秋、ソ連が世界征服の準備を始め、アメリカは日本との開戦を望んでいる。

また、日本も満州事変などが原因で中国との開戦は避けられず、アメリカとも一触即発状態である。

このような不穏な噂の数々が日本中を飛び交い、1937年の7月には日本が中国と開戦、日中戦争が始まった。

1. 陸

同年初夏、茨城県は水戸、日本陸軍第51師団司令部がある。

この場所にはこれらの噂から二度目の世界大戦を覚悟しなくてはならないと日々訓練に励んでいる兵士達がいた。

そんな中で基地の一角に一際大きなエンジン音と砲声が鳴り響く区画があった。

第51師団所属の一個大隊には試作の新型戦車の走行、射撃訓練をせよとの命令があり、今正にその真つ只中である。

しかし、戦車部隊はまだ結成されてまだ日が浅く、ようやく戦車部隊と呼べる様な戦車部隊が投入されたのは同年の初春である。

そして日本初の戦車大隊を指揮するのはまだ20代の若き女性士官、西住みほ少佐であった。

現在、日本陸軍の女性士官は10%ほどであるが陸軍上層部はもしソ連などの本格的な機甲軍と渡り合えるとなれば、例え日本広しと言えどもこの西住みほを置いて他にはいないと言われていた。

みほ「四式中戦車、以前の軽戦車紛いの奴よりはマシだけど・・・、秋山さんはどう思いますか？」

訓練の様子を見ているみほは不安げな表情で副隊長の秋山優花里大尉に問いかける。

優花里「ソ連の主力はT-26やBTといったところですが、現在開発、もう実践配備されている可能性すらあるT-34がとても厄介です！、こちらが得たデータではT-34はドイツ軍のティーガーなどに匹敵すると言われるくらいでありますから！」

T-26軽戦車やBTが相手であれば四式で十分対抗できるがそれでも優花里は自軍が不利である事を述べる。

みほ「T—34か・・・」

優花里「仮にT—26のみだとしても敵は数百〜数千の大軍、こちらはまだ我らの一個大隊、およそ60輜のみ、物量で勝てません！」

もしアメリカヤソ連と戦争になるならば陸軍の主力は戦車であるという意見が多く発せられ、軍上層部はすぐさま新型戦車の研究開発を開始した。

そしてその中で最も重要なのは高性能な中戦車でかつ量産できる事にあるという意見が最も多く、西住みほもその一人である。

優花里「隊長、武部沙織、五十鈴華、冷泉麻子、各中隊長から通信です。」

沙織「こちら武部大尉、部隊行動訓練を開始します！」

華「こちら五十鈴大尉、射撃訓練を開始します！」

麻子「こちら冷泉大尉、走行訓練を開始します！」

みほ「了解！」

この日も訓練は日が落ちるまで続けられた。

そして翌日もまた厳しい訓練である。

みほ「パンツァーフォー！」

みほの一言で60輜の戦車が隊列を組み一斉に走り出す。

一見すればそれは一昔前の武田騎馬隊の様に統率の取れた部隊行動の様に見えた。

みほ「戦車戦は部隊のコンビネーションが最重要です！、列を乱さない様に！」

この日は一個中隊15輛が縦に並びながら走行し、流鏑馬の様に走行しながら連続攻撃を浴びせるといふ物である。

記録員「秋山中隊命中60%、武部中隊命中55%、五十鈴中隊命中75%、冷泉中隊命中65%です。」

みほ「私達戦車部隊は結成されてからまだ日が浅いというのにいきなり隊全体の命中を80%以上にしろとは・・・、先が思いやられます・・・」

みほはその日の訓練結果を見て中々命中率が上がらない事に頭を抱えていた。

師団長「西住、ちよつと良いか？」

みほ「師団長、はい、大丈夫です。」

冬の寒さの中、より一層激しさを増した訓練で疲れ果てていたみほを第51師団の師団長を務める男性が呼び止める。

師団長「実はな、あなたの母上、西住しほ大将閣下よりの便りで、日本は間もなく中国と開戦する事となった。」

みほ「何ですって！、日本はついこの間、中国と和睦したばかりではありませんか！」

一度は中国と開戦した日本であったがソ連の動きを不穏に感じた中国は同年の冬には互いの領土に踏み込まないという条件で和睦していたのである。

師団長「和睦した相手は中国は中国でも国民党軍、仕掛けて来たのは共産党軍だ。」
みほは師団長の言葉を聞いて納得した。

師団長「ソ連と中国共産党は根本的なイデオロギーが似ておるからな、ソ連との同盟計画もあるとの情報を得たそうだ。」

みほ「では・・・」

師団長「ソ連との開戦も、やもう得んとの事で、西住、お前は直ちに部隊を率い旅順経由で満州に向かつて貰いたい。」

みほ「わかりました。」

年明け前の1937年12月上旬、みほは自身の戦車一個大隊60輛、兵員は戦車兵、歩兵（臨時の戦車兵）、工兵、衛生兵など合計500名ほどであった。

そして旅順港から上陸、味方と合流しつつ満州へと進軍を開始した。

2. 海

同年冬、神奈川県は横須賀、日本海軍の一大拠点の1つである横須賀鎮守府がある。

中国共産党軍との戦争が新たに開戦し、ソ連参戦の動きもあるため海軍は主力の1つ、戦艦長門を旗艦とする第一艦隊を中央の拠点である呉から横須賀で補給を受け、北の拠点である大湊へと同年冬までに移動を開始した。

もしソ連とも戦争になった場合、海軍はオホーツク海、ベーリング海を抑える事が最も重要でありその先駆けとしてソ連海軍の東の拠点であるウラジオストクの攻略が優先される。

そしてこれから起こるであろう戦に参加するため長門に乗り込んだ若き女性士官の一人、長門航海長の岬明乃少佐は瀬戸内海より太平洋側に抜け大湊を目指す航路を取るための舵を切った。

明乃「艦長、航海は至って順調、後半日もあれば大湊に到着するでしょう。」
明乃の言葉に長門艦長の宗谷真冬大佐がケラケラと笑いながら答える。

真冬「そっか、このまま何も無く着いちまうのかー。」

右舷見張り員「右舷120。に敵戦艦！、砲をこちらに向けています！」
しかし突然静寂は破られた。

見張り員のこの一言で艦内が一気に緊張に包まれた。

真冬「ほう、最大船速！、取り舵20！」

明乃「最大船速！、取り舵20！」

真冬は冷静に指示を出し明乃が左に舵を切る。

右舷見張り員「着弾今！、本艦後方に着弾！」

真冬「戻せ！、今度はこっちから行くぞ！」

明乃「了解！、戻せ！」

長門は敵艦の砲撃を回避したと同時にコースを戻す。

真冬「右舷後方砲撃戦！」

続いて真冬は長門砲雷長であり宗谷真冬の妹、宗谷ましろ少佐に攻撃命令を出す。

ましろ「了解！、右舷後方！、方位135°、距離12000m、主砲斉射！、撃

てー！ー！」

ましろの命令と共に戦艦長門の誇る41cm連装砲4基8門が一斉に火を噴いた。

後方見張り員「着弾までおよそ30秒！、ああ！、敵艦発砲！」

真冬「衝撃に備えろ！」

ましろ「次弾用意！」

後方見張り員「命中今！」

真冬「どうだ！」

後方見張り員「命中弾1！」

右舷見張り員「右舷後方に敵弾1発命中！、砲手を始め人員10名負傷！」

これは訓練である。

当然ながら敵艦など存在しないし負傷者などいるはずがない。

長門の放った砲弾は海上にある紙の的を貫いただけであった。

右舷見張り員「敵艦引き上げて行きます！」

真冬「そうか！、戦闘用具納め！、各部署集計急げ！」

真冬がこの一言を放つてから立て続けに艦橋へと報告が入りそれを船務長の知名もえか少佐がまとめた。

もえか「現時刻19:30、訓練終了、なお副砲員1名負傷、主砲を撃つた時の衝撃で頭を撃つたとの事です。」

真冬「おいおい誰だその根性無しは！」

もえか「予想外の負傷ですね、艦長、訓練その物は5分の遅れです。」

真冬「5分か、まあいい、1月前の10分遅れに比べたらまだ。」

ましろ「はい。」

真冬「訓練終了！、大湊に進路修正！」

明乃「了解！」

真冬「しっかし退屈だな。」

訓練を終え一息ついた真冬はケラケラ笑いながらそう言い、ましろは呆れながら答える。

ましろ「艦長、平和なのが一番です。」

もえか「この艦にはまだ今年兵学校を卒業したばかりの新人たちが多いですから、今

敵と遭遇戦にでもなつたらこちらが不利です。」

真冬「ほう、うちの砲雷長と船務長は随分と冷静なこつて。」

余談ではあるが現世界では海軍が最も早く女性士官を取り入れた。

理由は科学技術が進むにつれ最も自動化しやすく、また直接戦闘に関わる可能性が一番低いからであつた。

それゆえ海軍の女性士官は既に30%を超えているため、優秀な者は本部や主力艦隊の要職などに就く者が増えた。

知名もえか、宗谷ましろはその中でも生粋のエリートであつたがこの岬明乃の成績はごく平凡でエリートとは程遠い物であつた。

しかし実践能力、特に戦闘指揮や人命救助、更には教官としての才を見込まれこの場に立っている。

その日の夜、当直となつた明乃と真冬は二人、艦橋にて少しばかり話し込んでいた。

真冬「聞いたか岬、もう陸じゃあドンパチが始まつてるらしいぜ。」

明乃「はい、私も聞きました。」

真冬「中国との戦争が集結して一段落着くのかと思つたら今度は共産党軍の方から攻め込んで来るとは、おまけにソ連参戦の疑いありと来た。」

明乃「中国国民軍はシナ、日本陸軍は満州でそれぞれ中国共産党軍と戦っています。」

真冬「岬、ウラジオストクの意味を知ってるか？」

明乃「はい、『東を征服せよ』、です。」

真冬「さつきは気軽にあんなこと言つてシロに怒られたがな、今回ばかりはアタシだつて本気だ！、ソ連が参戦して来たらウラジオストクは真つ先に落としてやる！、奴らに日本国の土は踏ませねえ！」

明乃「はい！」

それから夜が明ける頃には先頭に行く旗艦長門を始め第一艦隊の艦艇の殆どが青森県は陸奥湾、大湊鎮守府に到着、後からやつて来る予定の空母部隊を待ちながら新人育成のための訓練を連日行つていた。

3. 空

同年夏、広島県は呉市、ここにこれから戦争で最も重要な戦力の1つとなる航空母艦、通称空母が2隻ほど停泊していた。

天城型空母、一番艦の天城と二番艦の赤城である。

そしてその上空では空母への発着訓練を行う日本空軍、宮藤芳佳少尉と芳佳が率いる飛行小隊3機が旋回飛行をしていた。

そしてそれを終えた芳佳の小隊は所属艦である天城への着艦態勢には移る。

整備班長「宮藤さんの小隊が帰って来たぞ！、準備しろ！」

班長の一言で整備士達が直ちに配置に着き、その数秒後には小隊の3番機が着艦体制に入り、そして着艦した。

3番機パイロット「ぐあつ！」

しかし彼の機体は着艦し、機体を止めようとしたが速度が落ち切っておらず機体尾部のフックにストッパーのワイヤーが引っかかった瞬間、機体が一度前かがみになりそして勢い良く甲板に叩き付けられた。

3番機パイロット「ケツが！、痛ってー！ー！」

整備士「あははは！」

続いて2番機が着艦して来たがこちらも同様に速度が落ち切っておらず、勢いよくお尻を打つ羽目になった。

2番機パイロット「畜生！、痛ってえなー！ー！」

整備士「空母への着艦は陸地への着陸とは一味も二味も違うぞ！」

2番機パイロット「ああ、違いねえ！」

後方見張り員「宮藤機、着艦態勢に入ります！」

3番機、2番機と着艦を終え最後に隊長である芳佳の機体が着艦態勢に入る。

芳佳「角度よし・・・、速度低下・・・、高度下げ・・・、足下し・・・」

すると芳佳の機体はまるで艦に引き込まれるかの様に何事も無く着艦した。

そしてそれを見た艦乗務員や航空要員達が一斉に賞賛の声を挙げた。

芳佳「ふうー。」

整備士「凄いですよ宮藤少尉！、これほどの短期間でここまで慣れてしまおうとは！」

芳佳「私にはよくわからないけど、まぐれかな？」

すると機体から降りた芳佳の元に彼女が所属する第一航空戦隊、一航戦の通称で呼ばれるこの部隊の戦闘航空一個大隊長である坂本美緒少佐がやって来た。

美緒「空母への着艦はまぐれで成功するような代物ではない、お前の日頃の努力の成果だ。」

芳佳「坂本少佐！、お疲れ様です！」

美緒「いよいよ出撃が近い、これからが肝心だ！、しっかりと頼むぞ！」

芳佳「はい！」

この宮藤芳佳はこの代で戦闘機パイロットとして最強と言っても過言では無い。

日頃から厳しい訓練を受け、また座学にも励みトップの成績を収めて来たが、芳佳曰く「戦闘機は乗れば乗るほど身体と馴染んで行く様である」と言えるほどに操縦に慣れるのが早かった。

しかし、芳佳を始め空軍はまだ発足されてから非常に日が浅くどの部隊も実戦こそま

だであるが、その腕は確かであり今後の新たな主力戦力として期待されている。

美緒「戦闘機隊皆聞いてくれ！、我ら海洋航空軍の初陣の日が大間かではあるが決まった！」

その第一報として美緒自身が率いる戦闘機一個飛行大隊のパイロット48名を召集し、待ちに待った初陣の日を伝える。

すると集まったパイロットは勿論、艦乗務員や整備士達も緊張しながらも活気に溢れていた。

美緒「正確な日付までは分らんが、早くて1939年の夏！、皆より一層訓練に励む様に！」

そして美緒が言葉をいい終えると辺りから「おおー！！」という叫び声が挙がった。士気は大いに大である。

芳佳「2年後か、もともっと頑張らないと！」

1937年冬、空軍はまだ実戦配備されていないが陸軍は旅順から満州にかけて作戦行動に入り、海軍は大湊に主力の1つを配備、いずれも準備を終わらせ作戦行動に入っていた。

どう足掻いても、もはや戦争を避けることは出来ない。

遼陽の戦いです!

1937年冬、中国共産党軍との間で本格的な戦争が勃発した。

それと同時に満州へ向かえと命令を受けた西住みほ少佐は1938年2月、部隊を率い旅順より満洲を北へ進む。

始めは先に上陸した歩兵師団や砲兵隊が次々と敵の拠点を叩き満洲最大の都市であるハルピンを攻略するため遼陽攻撃の準備をしつつ平原に集結、その数15万は下らない。

みほが率いる戦車大隊もそれに加わり待機中あったが、遼陽手前の平原にて遼陽守備を担っている中国共産党軍の大軍と相対する形となった。

伝令「大隊長!、敵の大軍が接近中!、既に歩兵一個師団および砲兵二個連隊が抗戦を開始しましたが如何せん数が足りません!」

その事を伝令がいち早くみほに伝える。

みほ「敵の数は如何程ですか?」

伝令「歩兵だけでも2個軍団!、更に砲兵隊や軽戦車部隊を多数確認!」

みほが敵の戦力について尋ね、伝令がおおよその規模を答えると大隊の殆どが顔面蒼

白となる様な大軍勢であった。

みほ「歩兵二個軍団に砲兵、軽戦車か……」

優花里「40万と言ったところででしょうか。」

しかし、みほと副隊長である優花里は平然としていた。

そんな二人を見て最も不安げな表情をしている沙織がみほに問う。

沙織「如何しましょう隊長！、満身に準備の整っていない状態で戦うのは無理です！、

ここは引くのが賢明ではないですか！」

沙織は敵が大軍故数で劣る、しかも準備が整っていない状態で戦うのは不利であると

述べ、みほに撤退を進言した。

みほ「いいえ、部隊総員乗り込み！、これより前線へ赴きます！」

沙織「隊長！、正気ですか！」

みほ「私はいつだって正気です。」

対してみほはまたも平然とした表情で返す。

みほのこの発言に戸惑う者は少なく無かったが戦車への乗り込みを完了させ前線を

目指し駆け出した。

前線では日中両軍の歩兵がライフルや機関銃による凄まじい銃声が響き合い、数で劣

る日本軍はスコールにでも会ったかの様な状態であった。

みほ「兵が足りません・・・」

みほは最前線の一步後方に位置する背の高い草村に戦車ごと身を隠しながらその様子を観察していた。

優花里「隊長、全部隊の配置が完了しました。」

みほ「了解。」

この時みほは前線に赴くにあたって部隊を三つに分けていた。

秋山中隊、五十鈴中隊を正面に置き、これらの援護のため武部中隊を右翼、冷泉中隊は後方に配置、大隊長車は秋山中隊の後方にて待機中である。

華「隊長、これは、兵の数が足りないどころの話ではありません。」

自身の乗用戦車を離れ偵察に出ていたみほに険しい表情の華が問う。

敵戦力は歩兵三個師団に加え砲兵四個連隊、更に軽戦車二個連隊はいる。

優花里「しかも敵の軽戦車はソ連のT-26、ソ連が旧式の軽戦車を中国に売ったという話は聞いていましたが、まさかここまでの数を揃えているとは!」

前衛で二個連隊、即ち全軍合わせて最低でも一個師団、1000輜はいると想像できる。

みほ「軽戦車だからと言って正面から掛かると痛い目を見ます・・・」

戦局は到底変わりそうに無く、とうとう最前線の味方の歩兵部隊が撤退を開始し始めた。

それを見たみほは部隊に発する。

みほ「味方の撤退を援護します！、全部隊秋山中隊の位置まで移動してください！」

麻子「了解！」

華「殿軍、という訳ですか。」

沙織「退却戦、かなりきつそうだね・・・」

みほの戦車大隊の各中隊が一か所に集結し攻撃準備が整ったところで味方の兵隊が次々と戦車大隊の後方に走り込み軍団司令部まで引き上げて行く。

しかし、途中で戦車大隊と共に殿軍を務めるべく歩兵二個大隊と砲兵一個大隊が名乗りを挙げ現場に留まった。

みほ「(まず歩兵を逃がさなければいけませんね・・・)」

そして彼らのまた攻撃準備が整う頃、みほが号令を発する。

みほ「撃てー！！」

その瞬間、当時日本軍最新型の四式中戦車が一齐に火を噴き76mm砲弾が敵目掛けて突撃していく。

大隊長車砲手「敵軽戦車に命中!、大破炎上!」

敵方はT-26軽戦車二個大隊を最前列に出し歩兵一個師団がそれを盾にどんどん迫って来た。

しかし日本軍には76mm以上を搭載できる中戦車はいないと判断していた敵戦車部隊は予想外の攻撃を受け少しずつではあるが混乱状態に陥り始めた。

みほ「可能な限り隊長車を狙ってください!」

しかし敵は数に物を言わせ再び突撃を開始。

麻子「隊長、後方に新手の敵軽戦車部隊、潮時です。」

四式中戦車が砲弾を放つ毎に3〜5輦の敵戦車が宙を舞うか黒煙を噴き上げるかして戦闘不能になって行くが後方に待機していた増援部隊が進行を開始するのを確認した麻子はみほに撤退のタイミングであると伝える。

みほ「どうやらその様ですね。」

華「前方の敵との距離、約1200mです!」

みほ「戦車反転!、全速力で撤退を開始してください!」

更に華からの通信を聴いたみほはついに撤退を宣言、戦車を反転させ全速力で引き上げて行った。

みほ「(初陣で負け戦ですか・・・、我ながら情けないです・・・)」

この遼陽平原の戦いにおいて味方の死傷者は5000人に上ったが戦車の被害は皆無、対し敵方の死傷者は15000人に上り60輜もの軽戦車を失ったが遼陽平原から日本軍を撤退させた事により中国共産党軍の勝利と言える。

この事から日本陸軍初となる中戦車による戦車部隊の初陣は酷い負け戦となり、その戦車大隊を率いたみほは一見平然としている様であるが心中では悔しくて溜らなかつた。

全軍突撃開始です！

1938年2月、中国共産党軍と遼陽平原にて激突した。

明らかに先手を取られた日本軍は防戦一方の状態となり、みほの戦車大隊は初戦で被害こそ皆無であるが全体的には敗北していた。

遼陽攻略軍は一度司令部にほど近い村まで引き、防衛陣地を築きつつ旅順より援軍の到着を待った満洲軍。

軍団長「おのれー！！」

第七歩兵師団長「見事に奇襲されてしまいましたな。」

参謀長「思いのほか、敵兵力が大きかった・・・、しかし奴らはなぜあーもタイミン
グ良く襲撃できたのでしょうか・・・」

みほ「軍団長！、報告です！」

つい先日の遼陽平原での戦いを思い返す軍団司令部にみほが足を運んで来た。

みほ「うちの諜報員によると敵軍の防衛陣地は遼陽平原全域では無く、司令部防衛のため北部に集中しているとの事です！」

参謀長「北部か・・・」

遼陽平原はとても広く、いくら大軍を要する中国共産党軍と言えど全域を制圧できる程の力は無かった。

第四歩兵師団長「陣地が完成する前に攻撃すれば容易いでしよう。」

軍団長「陣地奪い取る事は容易いだが、背後の増援に直ちに奪い返されるだろう。」

参謀長「ですがこのままではそこを拠点にここ満州軍本部攻略を狙ってきます！」

軍団長「わかつとる！、だが兵力で劣る以上、此方から攻めるのは難しい！」

軍団長や参謀長、各師団長達が対策に追われる中、みほが口を開いた。

みほ「軍団長、参謀長、師団長の方々、確かに敵は大軍でこちらの倍以上の兵力を要しています。」

ですが、装備に関して言えばお世辞にも最新式とは言えませんし、あれほどの大軍ですから、大軍故の弱点があるかと私は思います。」

参謀長「大軍故の弱点とは？、話を聞こうか。」

みほのこの発言に参謀長が興味を示した。

みほ「敵がここを狙い進行してくる時は帯状の陣形を取って進行してくる可能性が高いです。」

参謀長「だろうな、帯状に広がる事でより大軍に見せる事が出来、相手に大きな威圧を与える事ができる。」

みほ「はい、ですが帯状に広がると言うことは正面から見ると横にこそ長大ですが、縦幅は意外と無いのです。」

これらのみほと参謀長のやり取りを聞いていた軍団長始め他の司令官達も次第に内容を理解し始めた。

軍団長「もし帯状に広がったとして、敵はそれを部隊ごとに行うだろう。

歩兵師団長、地図上にそうなった場合の敵の陣形を模作してみてください。」

第四歩兵師団長「はっ！」

軍団長は第四歩兵師団長に碁石を使い帯状陣形を地図上に模作し始める。

参謀長「見てください軍団長。」

みほ「敵は大軍、ですが隙は沢山あります。」

そして完成模作図を見たみほ、参謀長は不適な笑みを浮かべた。

軍団長「なるほど、戦国時代で言うところの桶狭間戦法と言ったところか。」

みほ「はい、ですが遼陽は見ての通り平原、隠れて接近することはできません。」

参謀長「西住少佐、まさかとは思いますが……」

参謀長の予感は見事に現実の物となったのは翌日の事であった。

伝令「敵襲！、敵襲！」

軍団長「来たか。」

伝令「防衛陣地の後方よりここ満州軍本部襲撃のために編成されたと思われる大隊が接近！、その数15万人以上です！」

報告を受けた満州軍本部から軍の先鋒として編成された歩兵二個師団、砲兵三個連隊、そしてみほ率いる戦車大隊、兵員の数はおよそ5万人が出撃した。

対する中国共産党軍は攻略軍としておよそ15万人、更に防衛陣地には歩兵三個師団、砲兵一個師団、およそ8万人を配置している。

参謀長「敵はどの様な陣形をしている。」

伝令「はっ！、一個連隊規模で帯状に横一列に広がりそれが何層にも重なっています！」

参謀長「数こそ多いが一つ一つはもろいな。」

軍団長「お主と西住少佐の作戦通りにせい！」

参謀長「はっ！」

遼陽平原中腹

共産党軍中將「小日本はこの数を見てガタガタ震えてるに違いない、余裕を持って攻め込むぞ！」

中国共産党軍は歩兵を前面に出し迫った。

伝令「西住少佐！、武部大尉より入電！、敵軍の先方が平原中腹に侵入、しかしいずれも進行速度は遅いとの事です！」

みほ「了解、さてと・・・」

共産党軍中將「(我らの勝利だな。)」

共産党軍大佐「中將！、正面から敵軍が高速で突っ込で来ます！」

共産党軍中將「ほう、あまりの恐怖に自棄になった様だな！、攻撃せよ！」

中国共産党軍はかなりの速度で接近して来る日本軍に対し一斉射撃を浴びせた。

凄まじい銃声の嵐が吹き荒れ弾丸が降り注ぐ。

麻子「敵歩兵、射撃を開始しました。」

みほ「問題ありません。」

みほは平然としていた。

共産党軍中將「ふははは！、どうだ！」

歩兵同士の射撃線ではやはり数の多い方に分があり、この時の中国共産党軍は日本軍の3倍もの兵力よ要してをりこのまま押し切れると踏んでいた。

共産党軍少佐「最前列部隊より伝令！、敵軍は中戦車大隊を最前列に出し、戦車を盾にしながら接近しているとの事です！」

しかし、日本軍はみほの戦車大隊60輜を横一列に並べ、歩兵は戦車を盾に接近、そ

のため敵の銃撃による被害は軽微であった。

沙織「総員砲撃準備完了！」

華「いつでも行けます。」

優花里「敵との距離、およそ500mです！」

みほ「よし、戦車大隊総員！、撃ち方始め！」

みほの号令と共に四式中戦車の75mm主砲が一斉に火を噴いた。

そしてそれが敵部隊に次々と着弾、敵軍の歩兵は成す技べ無く吹き飛ばされ、更に敵の砲兵隊の砲は射程範囲外であり、歩兵を援護できないでいた。

共産党軍中將「おのれ！、砲兵は何をやつとる！」

共産党軍大佐「まだ射程範囲内に入っていないません！、仮に入っていたとしてもこちらの砲では敵戦車の装甲を抜けない可能性が高いです！」

共産党軍中將「何！、日本戦車などボール紙装甲ではないのか！」

共産党軍大佐「以前の物とは桁違いの新型が配備されている様子です！」

共産党軍中將「うぐぐつ！、こちらの被害は！」

共産党軍大佐「最前列の歩兵一個大隊が全滅、他の部隊も一個から二個中隊がやられた模様です！」

第四歩兵師団長「敵が止まったな、西住！」

みほ「了解！、砲撃止め！、突撃用意！」

みほの号令で砲撃が止み、戦車大隊を先頭に突撃準備を開始する。

麻子「大隊長、敵方の右翼が最も手薄です。」

みほ「了解！、パンツアーフォー！」

第四師団長「全軍突撃！、西住大隊に続け！」

みほの戦車大隊が突撃を開始、それから間もなく第四歩兵師団総勢2万人が雄たけびを上げ突撃を開始した。

撤退も大切です！

1938年2月、日本陸軍は一挙に反撃に出た。

みほ「パンツアーフォー！」

まだ雪が残る遼陽平原を戦車大隊が横一列に隊列を組み突撃、その後方から歩兵が続く。

第四步兵師団長「全軍突撃！、西住大隊に続け！」

第四步兵師団総勢2万人が雄たけびを上げ突撃を開始、敵方はあまりにも早すぎる反撃とその勢いに押され、始め突撃した2万あまりの軍勢が2倍にも3倍にも見えたという。

みほ「全車両！、撃ち方始め！」

そして横一列に並ぶ60輦の四式中戦車が一齐に火を噴いた。

みほ「敵は横にこそ広いですが縦幅はそれほどありません！、まずは一気に押し通ります！」

第四步兵師団長「行けー！、なぎ倒せー！！」

砲弾は見事に敵軍の頭上に降り注ぎ無残に吹き飛ばされて行く。

更にろくに戦車対策をしていなかった敵はパニックを起こし銃を戦車に乱射するが銃では戦車の装甲を抜けるはずも無く、また後続の歩兵に次々となぎ倒され、戦闘開始から2時間程で敵方の先鋒、およそ一個師団が総崩れとなった。

みほ「戦は数では無く勢い、敵は先の戦で勝利に湧いていたでしょうから当然油断を生じます、こちらの方が数で劣るとあらばそれは尚更です。」

沙織「大隊長!、敵が陣形を立て直し始めました!」

みほ「了解!、全車両に通達!、敵に対し楔形陣形を取って下さい!」

敵は大軍である事を生かし元の陣形から味方を囲み込む作戦に出た。

それに対しみほは戦車大隊の陣形を楔形にし、歩兵はその楔形の陣形の奥に進んで行く。

共産党軍中將「ええい!、何をやっている!、敵は高々2万ではないか!」

みほ「歩兵の皆さんはなるべく固まって下さい!」

歩兵連隊長「了解だ!」

戦車の後方に着いた歩兵は戦車と戦車の間から射撃を開始、順調に敵を倒して行く。

共産党軍少佐「こちら先鋒軍!、敵後方の歩兵はその身で密な陣形を整え反撃!、まるで人間要塞です!」

共産党軍大尉「敵の抵抗は激しく、とても取り付けません!」

そして後衛は槍衾の様に一か所に固まり射撃を開始した。

この時のみほが考案した陣形はとても守りが固く、しかも攻撃力がとても高いため小部隊で大軍と戦うのに最適であり、僅か2万で敵の先鋒、中堅部隊計10万の兵を相手に囲まれながらも互角の戦いぶりを見せた。

共産党軍大佐「くそ！、戦車が邪魔だ！」

共産党軍中佐「師団長！、敵戦車大隊！、我が方の中腹部まで侵入！」

共産党軍中将「わざわざそんな深いところまで攻め込んで来るとはな、だがチャンスだ！、敵は明らかに数が少ない！、近いうちに弾薬も底を突くであろう、軍団長、ここは攻めるべきです！」

敵師団長は不敵に微笑み、内容を理解した攻略軍軍団長が次の指示を出す。

共産党軍大將「後方の5万と中堅の後方2万を敵戦車撃破に向かわせ残りの軍勢はそのまま突撃せよ！」

麻子「大隊長！、敵の後衛が動きました！」

みほ「了解！、前進止め！、師団長！」

第四歩兵師団長「おうよ！、全軍後進！」

敵の動きを視力が非常に高い麻子が肉眼で捉え、それを知らされたみほは前進を停止、それと同時に歩兵師団が射撃を続けながら後進、退路を開きながら徒歩程度の速度

で進んだ。

敵はそれを撤退を開始したと勘違いをして一斉に襲い掛かるが、頑強な守りと正確な攻撃に阻まれ次々と返り討ちにされた。

とはいえ味方の消耗が目立ち始めたため、みほ率いる戦車大隊は次の準備を始める。

みほ「皆さん準備はいいですか！」

沙織「武部中隊!、完了です!」

麻子「冷泉中隊、いつでもいいぞ。」

華「五十鈴中隊、完了致しました。」

優花里「秋山中隊!、完了であります!」

みほ「それでは!、これよりパラリラ作戦を開始します!、全車突撃!」

そして戦車大隊はみほの号令と共に副武装の7.7mm重機関銃を撃ちながら全速力で敵陣に突撃を開始、そして暴走族の様に戦車が敵陣中で大暴れを開始した。

第四歩兵師団長「たく、一体いつの間にくれたんだ西住は。」

陸軍中佐「師団長!、こちらも!」

第四歩兵師団長「おう!、全軍走れ!」

戦車が暴れバしたのを確認した歩兵師団もまた全速力で味方の本部がある方向へ走り出す。

みほ「皆さん！、もっともつと敵を見下しあげ笑う様をお願いします！」

共産党軍中將「なんだあいつらは！」

共産党軍中佐「味方の兵が次々と跳ね飛ばされ、またあの様な意味不明な敵の行動に惑わされ再びパニックを起こし始めています！」

共産党軍中將「何だと！」

沙織「大隊長！、味方が目的地に達しました！」

みほ「了解！、パラリラ作戦終了！、これよりおちよくり作戦に切り替えます！、煙幕発射！」

暴れ馬の如き戦車はその動きを保ったまま機銃を撃つのを止め、代わりに煙幕を辺りに撒き散らした。

しかしその量は少なくとも味方の姿を隠す、また敵を攪乱する事は不可能であった。

共産党軍中將「バカめ！、それで隠れたつもりか！、敵が逃げるぞ追え！」

そしてみほのこの中途半端なやり口を好機と見た敵は一斉に襲い掛かる。

華「隊長、少々よろしいでしょうか。」

みほ「はい、どうされましたか。」

華「はい、とても湿った匂いが流れ込んで来ます、恐らく雨が降るか。」

みほ「好都合です!、皆さん急ぎ会合地点へ!」

非常に嗅覚が優れている華は雨の湿った空気を嗅ぎ取った。

そしてその通り、全部隊が撤退を開始してから1時間後にはどんよとした雨雲が平原上空を覆い尽くし辺りは一気に暗くなった。

雨によってぬかるんだ地形を四式中戦車は苦手とするため、みほも少々急いでいるところがある。

みほ「全車右へ!、この暗さに紛れ撤退します!」

共産党軍中将「追え!、逃がすな!」

みほ「会合地点までもうすぐです!」

みほ達が会合地点の左翼に到達、それから間もなく雨が降り始め、敵はこの雨によってぬかるみ始めた平原をひたすら走ったため体力の限界が近づいていた。

そして味方にとっては戦車が激しく動き回れなくなった以外はとて好都合であった。

第四歩兵師団長「第七!、準備はできたか!」

第七歩兵師団長「第四共!、準備できたぞ!」

冬の雨に打たれ段々と体力を奪われたところで僅かながら斜面を登り始めた中国共産党軍は驚いた。

共産党軍大佐「な！、何だあれは！」

眼の前に広がっていたのはわずかな斜面を登り切った地点、丁度敵の最前列から100m程離れた地点に無数の重機関銃、軽機関銃が横一列に並べられ、その後方には57mm迫撃砲、左翼にはみほの戦車大隊の75mm戦車砲が配置されていた。

共産党軍少佐「連隊長！」

共産党軍大佐「重機関銃だけでも500丁はあるぞ！」

第七歩兵師団長「これを4時間以内とか、大変だったんだからな！」

第四歩兵師団長「わーってるよ！」

第七歩兵師団長「そんじゃあ、この前の礼をたっぷりとくれてやる！、撃ち方始め！」
第七歩兵師団長の号令と共に重機関銃600丁、軽機関銃400丁、迫撃砲300門が一斉に火を噴く、この時の重火器は第四歩兵師団の物も含まれているため、その火力は戦車大隊も合わせ3個師団以上の物であった。

共産党軍大佐「急げ！、撤退しろ！」

共産党軍少佐「ダメです！、後方から次々と兵が雪崩れ込んで来て撤退できません！」
ここから先は一方的であった。

雨による地面のぬかるみと冬の寒さ体力を奪われた中国共産党軍は後方から溢れて来る味方によって撤退は叶わず、そうなった場合はもう前進するほか無い。

しかしそうなれば機関銃や迫撃砲の嵐に会い次々となぎ倒されて行つた。

みほ「撃ち方始め!」

そして戦車大隊も戦車砲、重機関銃を放つ。

機関銃で迫ってくる敵をなぎ倒し、戦車砲で撤退を開始する敵陣の後方を撃ち敵の撤退を妨害、更に困難な物にした。

共産党軍大佐「師団長!、ぬかるみに足を取られ満足に撤退できません!」

共産党軍中将「おのれ!、おのれ!、おのれ!、極東の小日本が!!」

敵将が怒りをあらわにする。

だがその直後、四式中戦車の75mm砲弾が真近に着弾し敵軍の師団長たる共産党軍中将を始め高級士官数名が吹き飛ばされた。

みほ「いくら憎い敵とは言え、こうも一方的では少々の同情も禁じ得ます。」

普段から戦場でも平然としているみほの顔がやや引きつっていた。

みほはこの時初めて戦争の恐ろしさと言う物を真近で体験した。

優花里「やりましたね隊長!、敵は総崩れです!」

みほ「うん、勝つた。」

この戦いで味方に3000人以上の犠牲が出たが敵方の戦死者は3万人を超え、負傷者も5万人に上つたと言う。

戦の勝利は確実であつたがみほはどこかスッキリしない様子であつた。
みほ「（これが戦争・・・）」

ソ連に挑発されてピンチ!

1938年2月、日本陸軍は遼陽平原を進軍して来た中国共産党軍に対し猛烈な反撃を加え平原北方陣地まで撤退させる事に成功、この勝利に戦車大隊を巧みに操り敵を翻弄した西住みほ少佐が大きく貢献した。

そして日本陸軍軍令部は次の一手として遼陽市街へと続く道を封鎖している遼陽平原北方に設置された敵の防衛陣地撃破と市街地進撃を命令した。

参謀長「この時期の遼陽はまだ吹雪く可能性がありますので、これらの作戦実行はもう少し待った方がよろしいかと。」

軍団長「確かにまだ雪が残つとる、本部の連中も今回の一件のため作戦開始は4月まで待てとの事だ。」

参謀長「私もそれが賢明と考えますし、加えて元々西住少佐が所属していた第51師団および四式中戦車二個大隊が援軍として新たに派遣されます。」

軍団長「ソ連との開戦が危ぶまれている以上心強い、大隊長は誰かね?」

参謀長「西住まほ少佐、島田愛里寿少佐であります!」

軍団長「ほう、では丁度三個大隊となるから、新たに三個大隊編成で一個連隊を作る

とするか。」

参謀長「それは妙案です！、して、連隊長は如何されますか！」

軍団長「そうだな・・・」

1938年3月、まだ薄暗く霧の掛かった午前5時過ぎ頃、北樺太沖に訓練中の戦艦長門の姿があった。

真冬「今回も何事も無く訓練終了か・・・」

そしてその艦橋から艦長の真冬がまだ冬のオホーツク海を眺めながら鋭い眼差しで見つめる。

今回も何もなかった。

左舷見張り員「ん？、こちら左舷見張り台、オホーツク海方面距離20000mに艦影2、直進して来ます。」

大きさからして巡洋艦クラスです。」

が、不測の事態とは突然やって来るものである。

真冬「巡洋艦？、どこのだ？、型は分かるか？」

左舷見張り員「艦首に軍旗・・・、ソ連艦です！」

真冬「なに！」

見張り員のこの一方で訓練を終えお疲れムードに包まれていた艦内に再び緊張感が走る。

真冬「艦橋見張り員!、間違い無いか!」

真冬はより海域を全貌出来る艦橋の見張り員に確認を取る。

艦橋見張り員「はい!、間違いありません!、ソ連海軍巡洋艦チエパエフ級です!」

艦橋見張り員は日が登り始めると共に消え始めた霧の中から出でて来るソ連艦を肉眼で捕捉した。

真冬「ちっ!、総員配置に着け!」

ソ連海軍の巡洋艦である事が明らかになると艦乗員が素早く戦闘態勢を取った。

明乃「航海員、配置完了!」

ましろ「砲雷員、配置完了!」

もえか「船務員、配置完了!」

各部署を率いる明乃、ましろ、もえかが配置完了の知らせを受け、真冬に伝える。

真冬「船務長!、通信士にこの事を大湊始め各鎮守府および軍本部に到達しろ!」

もえか「了解!」

今現在、長門が置かれている状況はもえかの部下である通信士の一人によつてまず大湊鎮守府へと伝わった。

真冬「航海長！、最大船速！、面舵90°！、引き離せ！」

明乃「了解！、面舵90°！、速力25ノット！」

真冬「船務長！、敵艦の主力兵装と速力は！」

もえか「チエパエフ級ですと主砲は6インチ三連装砲4基12門、速力は最大で30ノットと言ったところですよ！」

真冬「主砲は大したこと無さそうだが、速力かなりあるな・・・」

長門は接近して来るソ連艦に対し背を向け大湊へ直進、しかし速力はソ連艦の方が勝るためその距離が徐々に縮まっていく。

ましろ「ソ連艦は直進を止めません！、いかがいたしますか！」

真冬「こちらから仕掛ける訳にはいかん・・・」

真冬は奥歯を噛みしめ、そして悩んでいた。

もしここで敵艦を攻撃、最悪撃沈でもすれば日ソ開戦は確実の物となり、そうなれば準備の整っていない満州の陸軍が壊滅の危機陥るのは目に見えている。

更に言えば政府の外相がアメリカ政府と進めている日米開戦回避の妨げにさえなる可能性さえあった。

真冬「こちらからの攻撃は、奴らが領海に侵入してからだ・・・」

ましろ「了解・・・」

真冬はソ連艦が領海に侵入するまで攻撃を厳禁した。

しかしその命令を発信した矢先の事、チエバエフ級巡洋艦の片方の前部が赤く光るのを後方見張り員が確認した。

後方見張り「!!、ソ連艦発砲!」

真冬「なに!」

まして「方位は!」

後方見張り「後方左舷10。、着弾!、今!」

後方見張りが知らせた次の瞬間、艦尾後方200m程の位置に砲弾が着弾した。

4番主砲射撃手「はははっ!、下手くそ!」

まして「奴等、当てる気は無いらしい、挑発のつもりでしょうか・・・」

もえか「艦長、大湊へ急ぎましょう!」

真冬「ああ、わかってる・・・」

後方見張り「第2射!、来ます!」

今度はもう一方のソ連艦が発砲、砲弾は艦尾後方1500m程の位置に砲弾が着弾した。

ソ連艦の有効射程は精々12000mと14000m程であるため、先ほどよりかなり遠い位置だった。

だが仮に有効射程距離で砲撃されても6インチ砲弾では41cm砲弾に耐えられる長門の装甲を貫く事は出来ない、またチエパエフ級には雷装が無いため接近してもむしろ長門からの集中砲火を受け蜂の巣にされるのか落ちである。

まして「ソ連艦との距離、16000m程に縮まっています!」

真冬「いいか撃つな!、絶対に撃つな!」

ソ連艦は更に直進を続け、長門との距離がおよそ15000mまで接近していた。しかしその後のソ連艦による発砲は一切無く、大きく舵を切り引き上げて行った。

真冬「何とか事なきを得たな。」

長門はそのまま領海内に入り、事態を受け編成された警戒部隊と合流した。

明乃「速力15ノットまで落としました。」

右舷見張り員「右舷を我が方の艦艇5隻が通過します!」

まして「警戒部隊か?」

右舷見張り員「はい!、第一水雷戦隊旗艦の軽巡川内と吹雪型駆逐艦4隻です!」

真冬「向こうは夜戦訓練後だったな・・・、ご苦労なこつて・・・」

警戒部隊を見送った長門は無事大湊に帰港、時刻は午前11時を回っており、早朝から訓練をしていた乗員達の疲れはピークに達していた。

そんな中、艦の幹部である真冬、明乃、まして、もえかは大湊鎮守府によく着任

した鎮守府司令長官に挨拶へ向かった。

真冬「失礼します!、宗谷真冬大佐以下長門乗員、無事帰還しました!」

真冬がまず挨拶をしに入り、挨拶を終え改めて今日初めて会う大湊鎮守府司令長官の顔を見て驚いた。

真冬「!!、うそマジで!」

それは真冬の身内でもあるましろも同様にであった。

ましろ「あなたは!、お懐かしい・・・、伊地知雪少将!」

雪「ええ、お久しぶりですね、それから今の私は中將になったので、改めてよろしくお願ひします。」

明乃「艦長と砲雷長のお知り合いですか?」

雪「確かにお知り合い、正確には二人のお姉さんの同期で、たまに家に招待された時に何度か顔を合わせているわ。」

この大湊鎮守府の総司令官に新たに任命されたのは海軍中將となった伊地知雪である。

雪は宗谷家の長女で現在は呉鎮守府総司令官をしている宗谷真霜中將の同期で真霜が信頼を置く人物であった。

雪「何はともあれ、数多くの新人を乗せながらの訓練およびソ連艦との遭遇、お疲れ

様です。」

真冬始め4人は敬礼をし、長官室を後にしたが内心“全くだ!”と言いたい気持ちが無い訳でも無かった。

ましろ「ビックリでしたね、まさか伊地知さんが我々の長官とは。」

真冬「ああ、私も驚いたよ。」

もえか「まだお若いのに、とても優秀な方なのです。」

真冬「そりゃあ、士官学校時代は真霜姉の最大のライバルで事あるごとに張り合ってたらしいからな。」

もえか「そんな事が・・・、想像できませんね・・・」

明乃「逆に私は、前の長官がおじいさんだったからそのギャップに驚いたというか・・・」

大湊鎮守府の前任の司令長官は年を召された男性であった。

その前司令長官はかつての日露戦争で連合艦隊の装甲巡洋艦の砲雷長として帝政ロシア海軍バルチック艦隊との激闘に参戦、戦艦オスリヤービヤ（オスラビア）撃沈に貢献したが年には逆らえず1ヶ月程前に軍を引退した。

明乃「まあ、これも時代の流れなのかな・・・」

明乃は時が経つという意味でこの言葉を発した。

恐らくその意味は、日露戦争はもうとつくの昔の話であると言いたかつたのかも知れない。

それからおよそ一ヶ月間は何事も無かつたが1938年4月上旬、事態は急変した。

明乃「嘘……、なにが……」

その知らせを受けた大湊鎮守府の面々は波止場へ急行した。

奥から警戒部隊として編成された艦艇が今朝方未明、大湊に帰港し深雪、初雪、白雪、吹雪、川内の順に波止場に停泊していた。

その中で1隻の軍艦、警戒部隊の旗艦である川内が事態の深刻さを物語っていた。

雪「川内艦長!、何があつたのですか!」

川内艦長「ソ連軍のチエパエフ級巡洋艦2に加えグネフヌイ級駆逐艦4隻が領海に侵入!、我が艦に攻撃を仕掛けてきました!」

川内艦長の男性は雪に事態を報告、ソ連艦との間で小規模な海戦が勃発した事を知らされた。

川内艦長「他の艦は先に撤退させ事無きを得ましたが、本艦はこの通り、ソ連艦の砲撃を受け10名もの死者を出してしまいました!」

川内は艦橋左舷に6インチ砲弾2発を受け中破寸前、対してソ連の巡洋艦も川内の

放った魚雷を受け中破したため撤退したと言う。

真冬「長官、これは明らかな挑発行為！、いいえ！、もう挑発と言うレベルではありません！」

雪「わかっているわ．．．、明らかにソ連は我々との戦争を望んでいます．．．」

真冬「だとしたら！」

雪「通信参謀！」

通信参謀「はい！」

雪「現状を全て軍令部へ！、戦はも眼の前です！」

通信参謀「はっ！」

明乃「(戦争．．．、始まるんだ．．．)」

明乃は被弾した川内を見て戦争の実態を思い知らされた。

そして陸軍、空軍は元よりこの日から海軍でも本格的な日ソ開戦へ向けた準備が加速した。

平原から市街地へ　こそこそ作戦開始です！

1938年3月末、大湊鎮守府からの情報を受けた満洲方面軍はとても慌ただしく成っていた。

これまでの日中対策の他に濃厚となった日ソ開戦への準備を加速させたからである。通信参謀「軍団長、本部から通信、日ソ開戦は濃厚であるとの事です！」

軍団長「元より避けられんだろうな・・・、聞いての通りだ西住みほ少佐、西住まほ少佐、島田愛里寿少佐、諸君らの戦車部隊には相当骨を折ってもらう事となるが、頼んだぞ！」

まほ「そのつもりです！」

愛里寿「最後まで戦い抜きます！」

その第一段階が高火力を要し、機動性にも優れた中戦車部隊の拡大であった。

現在この満洲方面軍に配備されている戦車部隊はみほの戦車大隊以外に57mm主砲を搭載した89式戦車が既に一個旅団（三個連隊）規模で配備されている。

しかしソ連の中戦車は四式中戦車の75mm砲でも撃破できないかもしれないほど強固な装甲を持ったため、これへの対策として軍令部は新たに西住まほ少佐、島田愛里寿少

佐が率いる中戦車二個大隊を援軍として派遣された。

軍団長「そしてもう一つ、急な事ではあるが西住みほ少佐には4月1日より中佐に昇進、三個戦車大隊を一個連隊として扱うため、その連隊長を命ずる。」

みほ「!!、私ですか!」

自身は三個大隊の中で最年長、実の姉でもあるまほが連隊長になるものと思つていたためかなり驚いた。

まほ「私達はまだ実践経験がないからな、二度も激しい戦闘で冷静に指揮を執れたみほに頼る他ない。」

愛里寿「私も、みほさんに指揮をお願いしたい。」

軍団長「このワシも含め皆そう思つているのだが、どうかね?」

みほ「分かりました!、やります!」

皆からの期待に半ば押された感はあるが、それでも期待してくれるならとみほは連隊長を引き受けた。

軍団長「では頼むぞ、西住みほ中佐!」

みほ「はい!」

その日の夜、早速みほは部隊の顔合わせともうすぐ行われる遼陽市街攻略戦における

各部隊の動きについての会議を開いた。

召集されたのは各部隊の自身を含め大隊長、中隊長クラスである。

みほ「始めましての方もいると思うので、改めまして、この戦車連隊の連隊長に任命されました西住みほ中佐です。」

まずは各員の挨拶から始まった。

続いては役割を話す。

みほ「私が連隊長になった事で元の私の戦車大隊の大隊長は基本的には私が連隊長と兼任して行いますが、部隊を離れる事があった場合、代理は秋山大尉にお願いします。」

優花里「了解であります！」

みほ「それから三個大隊の位置付けですが、西住まほ少佐の大隊長を第一大隊、私の大隊を第二大隊、島田愛里寿少佐の大隊を第三大隊としますが、何か異論はありますか？」

特に異論を唱える者は居なかった。

そんな中、まほの第一大隊副隊長を務める逸見エリカ大尉が他の者も思ったであろう簡単な質問をした。

エリカ「貴女の部隊が第一ではなくて良いのですか？」

単純に考えればこの場合、連隊長直属大隊を第一大隊にするのが普通だがみほはあえ

て第二にした事への質問であつた。

みほ「直属大隊長が第一とか、その辺ははつきり言つてどうでもいい、これだけ大きな部隊ですので、一番重要なのは各部隊が得意とする位置に適切に配置する事にあります。」

エリカ「納得いたしました。」

エリカはこれ以上何も聞かなかつた。

みほが言つた事は最もな事であり、自身の部隊の特性を知るのは副隊長ならばなおさらである。とエリカは思つたのであろう。

愛里寿「では、私の第三大隊は後方支援と敵の攪乱と言つたところですね。」

みほ「はい、お願いします。」

そして月が明け4月上旬の明け方、西住みほ中佐が率いる戦車一個連隊が遼陽市街へ向け北上する。

しかし遼陽市街直前に位置する平原から市街へと続く道中に8万の敵兵が守る防衛陣地があつた。

みほ「作戦通り、まず第一大隊が敵陣地の中央部に一斉砲撃をお願いします！」

まほ「了解した！、第一大隊全車両停車！、砲撃用意！」

まほの号令と共に60輻の中戦車が横一列に並ぶ。

まほ「撃てば必中！、撃てー！ー！！」

そして凄まじい轟音と共に戦車が一齐に火を噴き、75mm砲弾が敵防衛陣地に降り注ぐ。

共産党軍中将「な！、何事だ！」

共産党軍中佐「敵襲です！、戦車部隊を前衛に急速接近中！」

共産党軍中将「くっ！、応戦しろ！」

しかし敵方も激しい応戦を開始、機関銃や野砲が一齐に火を噴きまるで弾丸の雨が降って来た様であったが野砲の砲弾は57mm程度の物でとても四式中戦車の装甲を貫ける物では無い。

みほ「敵の目は完全にこちらに向きました！、第一大隊は突撃！、第二、第三大隊は援護射撃を開始してください！」

まほ「了解した！、全車両急速発進！」

まほ「(守りは固く！、進む隊列に乱れ無し！)」

まほの第一大隊は横一列から楔形に陣形をかけ、敵陣の中央突破を図る。

その後方からはみほの第二大隊、愛里寿の第三大隊が戦車砲、重機関銃で援護する。

沙織「第一大隊、敵陣地に突入！、なお敵方には57mm以上の砲は無く数こそ多けれ

ど陣形の幅もさほど分厚くないとの事です！」

みほ「了解です！、しかし防衛陣地のすぐ背後は市街地ですので奇襲に注意してください！」

まほ「了解した！、少なくとも先頭は中腹に到達！」

みほ「では第二大隊は第一大隊に続き突撃、第三大隊は左側面に回って下さい！」

愛里寿「了解。」

みほ「第二大隊はこれよりこそこそ作戦を開始します！」

優花里「了解であります！」

華「四方へ散開します。」

麻子「少々急ぎ足で頼む。」

少なくともこの時点で味方は敵陣地中腹まで侵入、しかしその後は市街地に配備されていたT-26軽戦車が多数加わり頑強な抵抗に合った。

みほ「なお、今作戦は敵兵力をなるべく一か所に集める必要があります！」

それに対抗するため一つの塊となって突撃した第一大隊の後方より、四個中隊に分離した第二大隊が逆楔形、鶴翼の陣形で突撃、左右から時間差攻撃を浴びせ敵を左右に揺さぶる。

共産党軍中將「いくら性能が良くともその数では遼陽軍の戦車二個師団には勝てまい

！

現在、中国共産党軍の遼陽軍に配備されているT―26軽戦車は二個師団でおよそ1600輛、対する日本陸軍の満洲方面軍には89式戦車一個旅団および600輛とみほの四式中戦車一個連隊180輛と数では圧倒的に劣るため、敵将は押され気味ながらもまだ余裕があつた。

まほ「敵戦車か・・・、赤星！、側面の敵を頼む！」

小梅「了解！」

市街地より右側面から突撃して来る敵軽戦車部隊を視認したまほは赤星小梅大尉が率いる一個中隊に迎撃を要請した。

みほは敵陣地直前で再び停車し戦車砲および重機関銃で応戦、その際に愛里寿の第三大隊は左側面に移動を開始した。

そして各部隊が戦車を撃破しようと群がって来る。

みほ「平原でこそこそ作戦は難しいんじゃないかと思ってたけど、何とかなりそうだね・・・」

みほ「大分敵がこちらに集中してきました！、歩兵部隊！、準備をお願いします！」

第四歩兵師団長「おう！」

第七歩兵師団長「いつでも良いぞ！」

愛里寿「こちら第三大隊、移動完了。」

みほ「では、お願いします！」

第三大隊が左側面への移動を完了させた事を合図に戦車連隊の反対側を進んでいた歩兵二個師団が第三大隊と共に一斉に襲い掛かる。

愛里寿「全車両急速発進！」

第四歩兵師団長「全軍突撃！」

第七歩兵師団長「掛かれ——！！」

戦車連隊に釘付けにされていた敵軍は反対方向から突然現れた大部隊を見て浮足立った。

共産党軍中佐「右翼より新たな敵！、歩兵部隊およそ4万！、その後方には砲兵部隊の姿も！」

共産党軍中將「何だと！」

共産党軍中佐「それから、敵戦車部隊の一部が本司令部を素通りし！、市街地へ侵入しました！」

共産党軍中將「おのれ！、舐め腐りおって！、軍団長に報告しろ！」

まほは敢えて防衛陣地の司令部を無視、素通りした。

それにより素通りするに足らずといった思考回路から敵將は逆上した。

みほ「これより市街戦に持ち込みます！」

しかし、各部の兵力が分散し司令部付近ががら空きになっていたため、第一大隊に続き第二大隊も司令部を無視して市街地に突入、遼陽軍司令本部を目指し突撃した。

もつとこそこそ作戦です！

同日、遼陽市街地。

共産党軍戦車小隊長「日本軍の戦車共はどこに行った！」

中国共産党軍本部は市街地に日本軍戦車2個大隊が突入した事を受け、持てる戦車戦力を市街地に集中させていた。

だが、行けども行けども敵戦車を発見できず、警戒のため速度を落として進んでいた。

観測兵「敵戦車、目標地点まで後100m！」

みほ「了解、これよりもつとこそこそ作戦を開始します！」

共産党軍戦車中隊長「くそつ、あの進行速度ならとつとくに出くわしてもいいはずだが……」

警戒しながら静まり返った市街を進行していたが、突如砲声が鳴り響き前方から砲弾が降り注いだ。

共産党軍戦車中隊長「!!、なに事だ！」

通信士「敵です!、前方から砲撃!、既に15両が撃破されました。」

共産党軍戦車中隊長「待ち伏せか!、だが数はたかが知れている!」

通信士「中隊長!、連隊長から通信です!」

共産党軍戦車連隊長「敵の数は120輛程だ、突撃して撃破せよ!」

この命令を受けた中国共産党軍の軽戦車1個連隊は速度を上げ市街入り口まで直進した。

観測員「目標地点通過!、今です!」

みほ「全車、砲撃開始してください!」

それに対しみほは観測員からの情報を元に命令を下すとその直後、あらゆる方向から砲弾が飛び交い敵戦車に命中。

この攻撃で中国共産党軍に突如衝撃が走った。

共産党軍戦車中隊長「!!、敵はどこだ!」

通信士「わかりません・・・、観測員から通信!、敵戦車は建物と建物の間に身を潜め砲撃、その後はすぐさま移動し別のから再び攻撃している模様です!」

みほがこの時指示した作戦内容は、集団となつて進行して来る敵に対し建物と建物の隙間に身を潜め、通りかかったと同時に先頭から2輛目の戦車を撃破、敵の動きが鈍つたところで反対側に身を潜める見方が先頭の1輛(隊長車)を撃破し、また反対側の味

方が2発目で3輛目を撃破したところで移動、次の配置に着くと同じ方法を繰り返す敵の後方へと進んで行く。

みほ「先頭の隊長車を撃破してしまえば先鋒の指揮系統が乱れます！、その隙を突き我々は敵軍の後方にて指揮を執っているとされる連隊長、旅団長、師団長クラスが乗車している車輛および司令部を奇襲します！」

この作戦によってみほ、まほが率いる戦車部隊は敵を撃破しつつ順調に敵の懐に飛び込んで行くことに成功した。

通信士「西住連隊長！、島田少佐から通信です！」

愛里寿「連隊長、市街入り口付近の敵は戦半ばで敗走しました。」

みほ「了解。」

その間、第3大隊を率いる島田愛里寿が市街地入り口付近の敵防衛陣地を攻撃、攪乱した後、歩兵2個師団が突撃した結果、敵は数で優っているにも関わらず敗走した。

みほ「予想通りです。」

通信士「予想通りとは？」

みほ「後で話しますが、敵が中国人であるからこそこの作戦が有効です。」

市街戦もまた数で勝っていた中国共産党軍であるが、みほの作戦にやり込められ既に

T-26 軽戦車100輛以上が撃破または戦闘不能となっていた。

まほ「こちら第一大隊、敵の背後回り込む事に成功、たつた今、敵連隊車を撃破しました。」

みほ「了解、第一大隊はそのまま前進、第三大隊は市街地に側面から突入、手薄になった敵の最左翼を強襲してください。」

愛里寿「了解。」

敵遼陽軍は防衛陣地を守る8万の兵力が敗走した事で正面が、から空きになった事は言うまでも無く、元々手薄であり重要性が低いと評価されていた敵最左翼に戦車1個大隊および歩兵2個連隊、砲兵1個大隊を送り込み揺さぶりをかけた。

愛里寿「最左翼防衛陣地の敵兵力はおおよそ1個連隊、2000人程度です。」

みほ「了解、あわよくば撃破して構いません。」

愛里寿「了解。」

その頃、中国共産党遼陽軍司令部はさながらハチの巣を突いた状態であった。

共産党軍通信参謀「正面防衛陣地守備隊敗走！、戦死者は1万に上るとの事です！」

共産党軍大将「なに！」

共産党軍通信参謀「更に歩兵1個連隊が守る最左翼の防衛陣地が1個旅団規模の敵に強襲され壊滅との事です！」

通信参謀より伝えられる情報に焦りを感じた遼陽軍軍団長および参謀長は浮足立っていた。

共産党軍少将「最左翼だと！、軍団長！、これでは正面、側面ともに動きを封じられ、包囲されております！」

共産党軍大将「有り得んよ参謀長！、兵力では我が方が明らかに上のはずだ！」

共産党軍通信参謀「軍団長！、戦車3個連隊の各連隊長および1個旅団長が戦死！、敵戦車2個大隊がここを目指し進行中との事です！」

陸軍戦略において小軍が大軍を包囲するなどありえない。

しかし、日本軍はあえてそれを遣って退けた。

共産党軍大将「どういう事だ！、何故押されている！、外の連中は何故包囲戦にでたのだ！、少ない兵力でしたところで薄っぺらい防衛線を各個破られれば総崩れではないか！」

その事で思考回路を更に乱された敵軍団長は混乱、そして更に悪い報告が入る。

共産党軍通信参謀「軍団長！、最右翼に敵！、その数2万！」

共産党軍大将「まずい！、最右翼の兵力もたかだか4000人！」

共産党軍少将「奴らは手薄になっている箇所を周到に狙い打って来ています！、このままでは我が軍は足並みを完全に乱され3方向から強襲されます！」

共産党軍通信参謀「ひよっとしたら敵は、よほど大きな援軍を隠し持っているのでは！」

共産党軍大将「!!、た、直ちに司令部を放棄!、退却だ!」

みほ「敵軍司令部は眼の前です!、パンツァーフォー!」

戦車部隊および歩兵、砲兵の主力は頑強な正面を突破、援軍を加えた10万人の兵力を持つて敵軍司令部に進撃した。

更に最左翼を破ったおよそ6000人、最右翼を破った隊各2万人が側面から襲い掛かった。

軍団長「・・・」

通信参謀「軍団長!、戦車部隊を始め我が軍の主力が敵軍司令部まで到達!、敵の守備軍は尽く敗走!、司令部を包囲しました!」

軍団長「そうか。」

通信参謀「しかし、司令部は既にもぬけの殻だったそうです。」

参謀長「指揮官が真つ先に逃げたか・・・」

軍団長「しかし、西住の策が当たったな。」

参謀長「はい!」

みほ「・・・」

通信士「連隊長、そろそろお聞かせ願えませんか？」

みほ「わかっています。」

作戦終了後、みほは仮設の司令部に部下を集めこの作戦の真意を話した。

みほ「まずは敵の性格、これに関してはかつての日清戦争時、旅順城攻略戦の時とほとんど変わりません。」

優花里「旅順城でありますか？」

みほ「はい、あの時、旅順城が1日で陥落した原因について調べました。」

エリカ「もう50年くらい前の話ですね・・・」

みほ「日清戦争において乃木希典当時少将が率いる1個旅団の攻撃で陥落させましたがやはり兵力に関しては清軍の方が有利でした。」

華「まあ、当時のフランス軍が10万人の兵を持って1カ月は掛かると言われていましたから。」

みほ「はい、ですが現実には清軍のあまりの士気の低さがこの結果を招きました。」

麻子「清国の者には国のために死ぬという考えが無いですからね。」

まほ「現在の中国も元は清国、根本は変わっていないと踏んだわけだ。」

沙織「それじゃあ、敵は手を抜いていたと!」

みほ「そこはわかりませんが、あえて小軍で大軍を包囲する事によって、私達がよほど大きな援軍を隠し持っているという錯覚を植え付ける事に成功し結果、敵将は怯えて一目散に逃げて行きました。」

愛里寿「内心ひやひやしましたが、成功してよかったです・・・」

みほ「ですが本当の戦はこれからです!、本部の命令があり次第、次は沙河を超え奉天に進行します!」

御前会議でピンチ！ 前編

陸軍が遼陽市街にて中国共産党軍を打ち破ってからおよそ3カ月が経った。

満洲方面軍の陣営に新たに陸軍第88師団および第109師団、砲兵1個旅団、遼陽での戦闘で得られた情報を元に改修された新型の四式中戦車改で武装した戦車1個連隊、軽戦車2個連隊が1938年6月に旅順より北上、7月上旬には満洲方面軍と合流した。

しかし1938年7月下旬、遼陽市街に陣を構えた満洲方面軍に本土からの一方が入る。

みほ「奉天進行は中止、ですか・・・」

軍団長「ああ、海軍の連中からの情報なのだが、ウラジオストクにて動きがあったらしい。」

参謀長「どうも奴ら、ウラジオストク周辺で陸軍や空軍の軍備強化を急速に進めているとの事、更に我ら陸軍の諜報員もハバロフスクに続々と兵力を集中させているとの事だ。」

副司令官「もしこの情報が本当だとすれば、ソ連軍の兵力はおよそ60万〜80万、奉

天の中国共産党軍も20万はいる：：、対して我が方は援軍を加えても精々30万、まともにぶつかれば負ける。」

みほ「それなら確かに奉天進行取り止めも納得がいきます。

奉天を陥落させたとしても、こちらが戦力を立て直す前にウラジオストク、ハバロフスクの二方面から強襲されては我が軍は壊滅し兼ねません。」

本来であればこれらの援軍と合流が済み次第、すぐさま沙河を超え奉天へ攻め込む予定であったがソ連の不穏な動きを察知した日本陸軍軍令部は奉天進行を中止、満洲方面軍に遼陽での待機を命じた。

軍団長「それからもう一つ、本土では天皇陛下や東条英機総理らを交えた御前会議を行うとの事だ。

それで全てがきまるはずだが、まあ日ソ開戦はもはや避けられないところまで来ているがな。」

その報告を受けた軍団長は日ソ開戦止む無しとの言葉に複雑な表情であった。

1938年8月、この蒸し暑い季節に日ソ開戦への一度目の御前会議が皇居にて行われた。

民主化を急いだ日本の政治はこの時すでに天皇主導から総理大臣主導で行う事に

なっていたが、急な事ゆえその名残が未だ尾を引き、天皇と総理大臣双方の意見の一致で物事を決める事になっていた。

昭和天皇「ではこれより会議を始める。」

東条「皆、席に着いてくれ。」

この場には昭和天皇と陸軍大臣を兼任する東条英機総理を始め陸軍、海軍、空軍の首脳陣が集まった。

東条「ではまず陸軍、西住軍令部総長および島田参謀総長。」

そしてまず東条は陸軍軍令部総長たる西住しほ大将、参謀本部総長たる島田千代大将に問いかけた。

しほ「はい、我ら陸軍は既に中国大陸、満洲にて敵との戦闘を継続中であり、もし日ソ開戦とあらば、最低でも現在の3倍以上の戦力、そして戦車王国ドイツにも引けを取らない強力な機械化装甲軍団を作る必要があります。」

更に敵は雪原での戦に慣れているため兵力、火力以外にも環境の面で我が軍は不利に立たされるでしょう。」

千代「こちらはストックホルムを拠点に活動させていたスパイからの情報を元にした情報ですが、ソ連軍の主力の殆どは現在西に集中していて、東の方はウラジオストク、ハバロフスクに極東方面軍を置いている程度だそうです。」

昭和天皇「戦力が西に集中しているのはドイツを警戒しての事か？」

千代「ええ、恐らくは。」

東条「しかしヒトラー政権やムツソリーニ政権が打倒された事で余力が出たため、その戦力を東にも送り込んで来る可能性は大いに大であるな。」

島田参謀総長、奴らが極東方面に、我が日本国を侵すのに必要な戦力を移動させた場合、どれ程の時間を要すると思われるか。」

千代「ソ連は中国共産党の首脳に接触し、間もなく同盟が結ばれる事を考えますと、ソ連がもし100万の兵力をモスクワやペテルブルクから移動させるのに最低でも1カ月、不慮の事態を想定すれば2か月ほどでしょう。」

東条「早くて1カ月か・・・」

もし西から100万人もの兵力が東にやって来たとすれば中国共産党軍と合わせおよそ300万人の大軍となつて襲い掛かつて来る。

もしそうなればまず満洲方面軍が全滅、次いで中国国民党軍、シナ方面軍も全滅は免れない、そして海軍、空軍も参加した上でその勢いを持ち日本本土まで攻め込んで来る事は皆、容易に想像できた。

東条「全方位から海上封鎖などされたら溜つた物では無い、だが今のソ連にそれほど海軍力があるとは思えぬが・・・」

昭和天皇「宗谷海軍大臣、米内軍令部総長、山本軍令部次官、あなた方はソ連の海軍力どの様に評価するか。」

しかし敵にそこまでの海軍力が存在する可能性は低いと考えた昭和天皇に東条は海軍最高司令長官の座にある宗谷真雪元帥を始め海軍軍令部総長の米内光政大将および海軍軍令部次官たる山本五十六中将に問う。

そして最初に口を開いたのは山本五十六であった。

山本「ソ連海軍の主力となるのはソ連がロシア革命以降に手に入れた旧式のガングー卜級戦艦が3隻、主砲の口径は30・5cmです。」

東条「ははは、それでは三笠と変わらんではないか！」

山本「しかし我々海軍が送り込んだスパイの情報ではバルト海やバレンツ海の海軍基地に新たな大型艦建造用のドックを建造中との情報が入って来ております。」

米内「ドックの規模から考えますと、こちらの長門型を上回り、10号戦艦に匹敵する超大型戦艦を建造中なのではないかと。」

東条「数は・・・」

山本「最低でも4つあります。」

米内「まあ現在のソ連海軍が相手であれば金剛型戦艦のみで十分壊滅に追い込めるでしょう。」

東条「宗谷元帥、あなたはこれらの情報から日ソ開戦へ向け何が重要と考える。」

しかし、もし近いうちに長門型以上の超大型戦艦が完成すれば厄介なことになると予感した東条は少々黙り込んだが、まだ完成どころか建造すら始まっていない可能性があるかと踏んだ東条は対策を真雪に問う。

その問いに対して真雪はこう答えた。

真雪「大湊に集結させた艦隊を持つてウラジオストクを攻撃、基地占領は我が海軍にて新たに発足した海兵隊を使います。」

ところがその発言を聞いたしほが真雪に食って掛かった。

しほ「宗谷元帥、確かに艦砲射撃にて基地を破壊するのは非常に効果的と思われるのですが、その後の上陸、基地占領の役目を何故海軍が行うのかお伺いします！」

真雪「陸軍は現在、そして日ソ開戦後の中国大陸にて敵軍と戦わなければなりませんので、ウラジオストクに兵力を割いている暇は無いと思われますし、陸軍1個師団を海から上陸させるとなれば最低3日は掛かります。」

そしてそれらの作業を完了させる前にウラジオストク付近の敵軍に襲われでもしたら一溜りもありません。」

山本「西住閣下、我が海軍の戦略構想は空軍と手を結び、まず艦砲射撃および航空攻撃にて基地防衛施設や海岸の防衛陣地、港湾施設、付近の陸軍駐屯地を破壊した後、防

御力の最も低下した海岸線より海兵隊を強襲上陸させその日のうちに迅速にウラジオストクを奪い取る事にあります。」

真雪は現在の陸軍の状況と海に近い基地の攻め難さを述べ、山本は真雪があらかじめ用意していたそれに対する解決策を述べた。

しほ「なるほど、空軍の方々もこの事はご存知で、かつ納得されているのですか？」
対してしほは海軍が提案した作戦の要の1つとなる空軍に参加の是非の問う。

それに対してまだ創設されて日が浅い空軍の実質的なトップの座にある南雲忠一中将が口を開く。

南雲「我々は海軍の案に賛成です。」

陸から攻めるより海と空から攻めた方が犠牲も少なく短時間でウラジオストクを陥落させられると考えます。」

千代「確かにそれも一理ありますが、あなたは元々海軍の出です。」

あらかじめこうなる様に打ち合わせをしていた可能性は捨てきれませんね。」

しかし南雲は海軍出身の空軍将校であるため、作戦を否定こそしなかったが裏で繋がっている可能性がある」と千代が言い放つ。

真雪「・・・」

当然疑われても仕方が無いと真雪は内心想っていたが、ここで空軍次官の山口多聞少

将が千代に食って掛かる。

山口「島田閣下の仰られる事もわかりませんが、それはあなたの方が、陸軍が手柄を独り占めしたいだけではございませぬか!」

千代「何を訳の分からない事を、あなたも海軍出身ならお分かりのはずです。

手柄を独り占めしたいのは、むしろ海軍の方では無くて?」

そんな山口に対し千代はやや挑発するように薄ら笑みを浮かべながら山口に返す。
すると山口は激怒し、今にも掴み掛りそうな勢いであつた。

山口「何を!!」

南雲「止さぬか山口!」

東条「島田さん、その辺にして下され。」

南雲「もう我らは海軍にあらず、空軍であるぞ!」

山口「くっ……」

だが辛うじて東条や南雲が止めに掛かり大事には至らなかつた。

昭和天皇「皆の者、話を戻そう。」

そして昭和天皇が落ち着いた表情で静かに言い放つ。

しかしそれでもしほは真雪に再び食って掛かつた。

しほ「……、宗谷元帥、先ほど基地制圧に使うと仰られた海兵隊とやらの戦力は如

何程ですか？」

真雪「およそ6000人、陸軍で言えば歩兵1個旅団程です。」

しほ「たった6000！、それでは返り討ちに合いかねません！」

真雪「しかし1個旅団であれば上陸艇群を3往復させる程度、半日程で上陸が完了しますし、艦砲射撃や航空攻撃で防御力を失った基地相手なら迅速に落とせます。」

しほ「では、百歩譲って艦砲射撃、航空攻撃は納得致しましょう・・・、ですが基地制圧はやはり我ら陸軍が行うべきです！」

真雪「ウラジオストクを叩くために陸路行けばその間に敵軍の反撃を受け少なく無い犠牲が出ます！」

更に真雪も応戦するようにしほに食って掛かり、両者の言い争いが今にも始まりそうになった。

辻「天皇陛下！、東条総理！、緊急事態であります！」

だが突如として会議室に飛び込んで来た陸軍参謀の辻政信少佐の行動で両者の言い争いは一時休戦を迎えた。

東条「辻参謀！、御前会議の真っ只中であるぞ！」

昭和天皇「構わん、辻、申してみよ。」

辻「はっ！、シナ派遣軍本部からの報告で昨日未明、ソ連空軍の重爆撃機が突如とし

て襲来!、基地周辺を爆撃して去って行ったとの事です!」

そして辻は昭和天皇に促され口を開き事態を報告した。

東条「何!、して被害は!」

辻「数自体は少なく、高高度からの爆撃ゆえ被害微小であります!」

東条「そうか・・・」

辻「しかし、まだ気になる点が・・・」

被害の規模を聞いて大事ないと知った東条は内心ほつとしていたが再び辻が口を開く。

しほ「まだ何か?」

辻「はい、ソ連空軍は我が軍、中国国民党軍のみならず、中国にある米、英、独、仏、伊、蘭、西の各軍駐屯地にも手当たり次第に爆撃をしたとの報告があります!」

昭和天皇「何だと!」

しほ「奴ら、世界を敵に回すつもりでしょうか!」

真雪「・・・ですが、これでも少なくとも米国、英国などの交渉が進め易くなつたとも考えられます。」

東条「一理あるな・・・」

辻の報告で少々場が混乱していたが真雪の一言で皆正気を取り戻し、一度話題を日ソ

開戦へでは無く日米交渉へと向けた。

御前会議でピンチ！ 後編

1938年8月より開始された御前会議の途中、ソ連空軍が中国に存在する欧米諸国軍駐屯地を手当たり次第に爆撃した。

これらの騒動に対し誤爆の可能性有と判断した東条はソ連に外相を送り9月より会談、この爆撃が意図的に行われの可否かを確かめる。

そしてこれらの会談および日米交渉についての結果が1938年11月半ば頃には出揃った。

日本外相「ソ連側の爆撃に関する返答ですが、各国共通の返事を貰ったと米、英、独政府との会談ではつきりしました。」

昭和天皇「して、その内容はどの様な物か。」

日本外相「誤爆であると。」

しほ「誤爆、ねえ・・・」

千代「なら、何故こちらの賠償請求を無視し続けるのですか？」

日本外相「はい、奴らはただ誤爆であるの一言の一点張りで、他国に対してもそのように返答し、賠償請求には応じないとの事です。」

山本「なんと無責任な！」

日本外相「それだけではありません！、ソ連側は既に東シベリア方面軍の一部を既に南下させております！」

山口「完全にやる気ですな！」

ここに来てソ連は世界各国を挑発、戦の火種を作ろうとしている事は確実であると、日本外相は述べた。

東条「外相、話は変わるが米国との会談は如何であつたか。」

日本外相「はい、そちらの方は宗谷閣下の仰られていた様に以前よりもすんなりと事が運びました。」

真雪「敵の敵は味方、とはよく言った物ね。」

日本外相「加えて2日前、在日米大使より米国政府はこれ以上交渉を引き延ばすのであれば今年12月にはソ連、中国共産党との国交断絶、相手の出方次第では米ソ開戦止む無し、との事です。」

東条「少なくとも米国が敵になる事は無くなったと捉えて良いのだな。」

日本外相「はい！」

真雪「しかしソ連が引き下がるとは思えない、このまま行くと米ソ開戦は早ければ来年の10月頃になりますね。」

昭和天皇「他はどうだ、特に独、伊などは如何か。」

日本外相「独、伊は国家情勢が不安定であるため、今は国防が精一杯と言う感じですよ。英、仏、蘭、西はいずれも米国が仕掛けるよりも早く開戦するつもりであると思われ
ます。」

東条「だろうな、恐らく来年の今頃は世界を巻き込む大戦となるう。」

欧米各国は既にソ連との開戦へ向け準備を開始、日本側の見解では欧米諸国がソ連と本格的に開戦するのは1939年10月頃であろうと予想した。

しほ「陸での日ソ開戦は恐らく9月頃だと予想されますが、既に極東方面軍のみならず東シベリア方面軍が動いたとなれば！」

そして日ソ開戦はもつと早く始まると予感したしほは東条に直ちに満洲方面軍に援軍を送る様進言、東条はそれを受け入れ、中国共産党軍と既に開戦している日本軍は主力となる戦車部隊の育成を更に加速、12月にはソ連と国交断絶、満洲方面軍に新たに陸軍2個軍団、空軍陸上航空1個飛行団、爆撃機2個飛行大隊を派遣した。

真雪「天皇陛下、総理、我ら海軍は兼ねてより呉、大湊の主力艦隊および呉の空軍海洋航空第1航空戦隊、佐世保の第3航空戦隊を派遣します。」

その一方で海軍もまた呉、大湊の主力艦隊および空軍海洋航空2個戦隊を能登半島を中間地点として日本海に配置、その予備部隊として佐世保の艦隊を朝鮮半島の南端に位

置する鎮海灣に待機させた。

東条「天皇陛下、決まりですな。」

昭和天皇「ああ、ではこれよりソ連との交渉は手切れと致す。」

1938年11月末、御前會議は昭和天皇の日ソ開戦承諾を持って終了した。

時は少し戻り1938年10月の大湊鎮守府、その大会議室に明乃、もえか、ましろを始め50人程の士官が集まっていた。

そんな中、ましろが一通の手紙を険しい表情で呼んでおり、それに他の者が気になり寄って来た次第だ。

ましろ「……」

真冬「どうしたシロ。」

後からやって来た真冬もまた気になりましろに話しかけて来た。

ましろ「姉さん……、これを……」

その真冬にましろは手紙を渡す。

真冬「真霜姉からか……、御前會議は陸軍と海軍が揉めるせえであんま進んでねーっ
てか。」

手紙の差出人はましろ、真冬の実の姉に当たる呉鎮守府司令長官の宗谷真霜からで

あつた。

ましろ「こんな事態に陸軍と海軍の足並みが揃わないのは非常にまずい……」

もえか「予想していた事とは言え流石にまずいですね……」

明乃「……」

手紙の内容は用意に想像できる物であつたが、それでも日本人同士がこの窮地に手柄を競い合い対立してしまう事の醜さを改めて痛感した。

そして沈黙が生まれる中、この大会議室に士官達を呼び出した大湊鎮守府司令長官の伊地知雪が談話室に入つて来た。

雪「皆さんにいくつか報告と通達があります。」

真冬「(いよいよよか……)」

雪「空軍の設立に当たり、元第1機動部隊および第3艦隊の主力空母が正式に空軍所属になった事によつて我が連合艦隊から主要な人物が少なからず空軍に移籍、そのためその穴を埋めるための策として、誠に遺憾ながら皆の現在の役職が大きく変わつてしまします。」

もえか「一体どういうことですか？」

雪「結論から言いますと……、戦時特例によつて……」

ここから先、雪の述べた事は特例の枠さえ超えているかもしれない程の特例であつ

た。

雪「お次は宗谷真冬大佐！、来月付けで海軍少将に昇格、新設された海兵1個旅団の旅団長を命じます！」

真冬「了解！」

雪「続いて宗谷ましろ少佐！、本日付けで海軍大佐に昇格、戦艦金剛の艦長を命じます！」

ましろ「はい！」

雪「知名もえか少佐！、本日付けで海軍大佐に昇格、戦艦陸奥の艦長を命じます！」
もえか「了解しました！」

雪「最後に岬明乃少佐！、本日付けで海軍大佐に昇格、戦艦長門の艦長を命じます！」
明乃「!!、りよ、了解！」

雪「以上がこれからの皆さんの役職になります。」

それからこの艦隊副指令として伊藤誠一少将が着任しましたので挨拶を。」

伊藤「はっ、艦隊副指令および参謀長を務めさせてもらう伊藤誠一、これからよろしく頼む。」

伊藤誠一と名乗る男性士官が雪の副官として着任、この伊藤は元々第二艦隊旗艦の重巡愛宕の艦長であったが本部の命によりここ大湊鎮守府へとやって来た。

雪「では役者がそろったところで明後日明朝より我が艦隊は作戦行動に移りたいと思います！」

そして最後に雪は作戦開始の号令を発した。

年明けて1939年1月、大湊鎮守府に集結した戦艦長門を旗艦とする第一艦隊は能登半島とウラジオストクを結ぶラインの東、呉鎮守府に集結した重巡愛宕を旗艦とする第二艦隊は西側に配備され。

また能登半島を補給基地として空軍所属となった空母天城を旗艦とする第一航空機動艦隊は呉と大湊を行き来する形で配備された。

その頃、援軍を得て遼陽にて進軍を停止していた陸軍は遼陽市街を中心に街を囲み込む様に強大な防壁、沙河の水を利用した対戦車堀、無数の防衛陣地を構築し、また街の後方に新たに作られた航空基地には空軍兵力が惜しみなく配備された。

そして世界各国が息を飲み開戦準備を終わらせた辺り、1939年8月に差し掛かった頃、ストックホルムより第一報がもたらされた。

辻「東条総理！、西住閣下！、島田閣下！、欧州方面にてソ連が動き出しました！」

東条「動いたか！」

しほ「思いの他早かったわね・・・」

千代「欧州はまずポーランド辺りまで飲み込み、ポーランドを拠点としてドイツやイタリアに攻めかかる算段かしら？」

ソ連軍は千代の想像通り、近隣の同盟国を飲み込みフィンランド、ドイツ、イタリアへ進軍を開始した。

対してヨーロッパ諸国はドイツ、イタリアにフランス、スペイン、オランダが、フィンランドにはイギリスがそれぞれ援軍を送りソ連と相対する形となつて戦火が広がって行った。

ソ連侵攻 黒溝台会戦です！

1939年9月下旬、ソ連陸軍は同盟を結んだ中国共産党軍が拠点を構える奉天まで兵を進めて来た。

参謀長「敵方の陣形はこの通り、沙河に展開する我が軍に対して相対する形で布陣しており、その兵力は60万を超えます！、敵の前線も最低5個師団はおります！」

軍団長「最前線の兵力と布陣はどうなっておる。」

次席参謀「現在、沙河の全線約40kmに渡り黒溝台を中心に歩兵1個師団、砲兵2個大隊、軽戦車2個大隊が守っております。」

軍団長「・・・」

敵軍の戦力と味方の前線部隊の戦力の差を聞き、わかつていた事とは言え軍団長は口を閉じた。

しかしその直後、作戦参謀として満洲方面軍司令部に着任した角谷杏中佐が口を開く。

好物の干し芋をヒラヒラと揺らしながら。

杏「前線の味方兵力はおよそ3万、援軍さえしつかり行き届けば問題ありませんよ。」

参謀長「簡単に言うな角谷！、今は良いがやがて冬が来る！、そうなれば寒さで地面が凍り猛吹雪で視界を奪われる！、援軍どころか普段の補給ですらままならんかもしれないのだぞ！」

軍団副指令「落ち着け参謀長！」

参謀長「はい・・・」

軍団長「角谷、お前何か心配事でもあるのか？」

先ほどま黙り込んだ軍団長が杏に問う。

杏「軍事特例にて西住みほを大佐にする以外にも沢山本部から直にお持ちした作戦書に書いてありませんでしたか？」

参謀長「沙河前線部隊の編成は確か本部が考案した物だったが・・・」

軍団長「ああ、確か牟田口廉也中將を指揮官とした本土からの援軍だったはずだ。」

杏「私はその牟田口中將、何か嫌な予感がするんです・・・、軽戦車大隊長の河嶋少佐や西少佐も・・・」

すると杏は不安げな表情で返す。

杏「軍団長！」

軍団長「何かね？」

杏「部隊がやばくなったら西住大佐の中戦車1個連隊を回していただけませんか！」

そして杏は士官学校時代から、表にこそあまり出さないが尊敬してやまないみほの戦車連隊をすぐ迎えるようにして欲しいと軍団長に申し出た。

軍団長「それはその時次第だが、お主がそこまで言うのなら西住連隊は中堅部隊の先鋒に配置しよう。」

軍団長もまた、開戦から何度も窮地を乗り越えたみほを信頼している。

そんなこんなで会議が一段落した頃、その時がすぐにやって来た。

通信参謀「軍団長！、前線部隊司令部から通信！、黒林台の防衛陣地が襲撃され壊滅しました！」

軍団長「なに！」

通信参謀「更に敵はそのまま黒溝台に接近！、その数12万！」

軍団長「まだ西住連隊の移動も済んでない！、援軍が到着するまで何としても持ち堪えろと伝えよ！」

通信参謀「了解！」

同日昼、沙河沿い40kmに展開する前線部隊3万人に対してソ連の援軍を得た中国共産党軍は歩兵3個師団、軽戦車1旅団、砲兵2個連隊を、ソ連陸軍は歩兵1個師団、中戦車2個連隊、軽戦車1個旅団を送り込んで来た。

そしてそれを間近で見るとは黒溝台の入り口に構える軽戦車1個大隊長の河嶋桃少佐と副長兼中隊長の小山柚子少佐であった。

桃「ああ・・・、ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！、柚子ちゃんどうしよう！」

柚子「ちよつと桃ちゃん落ち着いて！」

桃「桃ちゃん言うな！」

そして先ほど杏が心配していた事の1つが見事的中していた。

柚子「迎撃命令は出てるから早く部隊に命令を！」

桃「あ、ああ！、観測員！、敵との距離は！」

観測員「はい！、前方敵戦車、T-26、およそ800mです！」

柚子「800m、それだと命中率も撃破率も低い、撃つなら500m以内まで引き付けて・・・」

桃「総員撃てー！！」

柚子「！！」

観測員からの報告を聞き、効率の良い手を考えている柚子をしり目に桃は直ぐに攻撃命令を出してしまった。

桃の号令共に97式軽戦車（テケ）およそ100輛の37mm主砲が一齐に火を噴いた。

桃「撃て！、撃て！、撃てー！！」

柚子「ちよつと落ち着いて！」

しかしその砲弾の半数以上が敵部隊の100m以上前方に着弾、命中弾が無かった訳では無いが敵軍の被害は少なかつた。

柚子「これじゃあこつちの居場所を敵に教えてあげてるような物だよ・・・」

観測員「敵との距離、およそ600m！、敵戦車発砲！」

桃「うー！、うわあああー！！、退避！、退避！」

敵の放った砲弾は味方戦車に命中、6両が撃破された。

中隊長「前方の6両が撃破されました！、大隊長！、ご指示を！」

桃「えー、えーと・・・」

このとき桃は誰がどう見てもパニック状態であつた。

観測員「第二波来ます！」

中隊長「ギヤアアアー！！」

桃「！！」

通信士「前方の1個中隊！、およそ半数が撃破されました！」

桃「えーつと、と、とにかく撃て！」

砲手「使えねーこの愚隊長！、何でこんなのが隊長なんだよ！、完全に無駄弾じゃね

えか!」

通信士「(通信機の電源入れっぱで大声出すな!)」

操縦士「(こいつと心中なんて死んでもごめん!、つか死んだ方がましだ!)」

装填手「(足バタバタさせるせいで砲弾が取り難い!、もし生き残れたら西住連隊に編入を願おう!)」

パニック状態で真面目な指示が出せない事もほとんどの者が分かっていた。

そんな中で自身の部隊の直後に構えていた絹代から通信が入る。

通信士「大隊長!、西少佐から通信です!」

桃「こちら河嶋!、ただいま敵の猛攻に押されて!、前方の1個中隊が壊滅した!」

絹代「ここは守っててもしょうがない!、先ほど牟田口中将から突撃の許可を貰った!、どうだ加わらないか!」

桃「本当か!」

柚子「!!、それはいけません!」

桃「いいや、ここは突撃してこっちの勇ましきを見せつけビビらせて押し返そう!」

絹代「河嶋殿!、良い事言うな!、我らの大和魂を奴らに見せつけてやろう!」

柚子「・・・」

桃「総員掛かれー!!」

絹代「全軍突撃!!」

牟田口の許可を得た絹代の部隊は桃の部隊と敵軍に真正面からの突撃を開始、それに続き士気果敢な歩兵部隊が次々と続いた。

柚子「(本部に報告しなきゃ!)」

黒溝台での一連の出来事に関する報告が揃ったのは翌日の事であった。

杏「……、何やってんだ河嶋は……」

参謀長「軽戦車80輜が撃破され、歩兵の戦死者はおよそ1000人、負傷者5000人以上……」

軍団長「なぜこんな事に!、牟田口は何をやつとるか!、参謀連中は!、今すぐ呼び出せ!」

そして報告を聞いた満洲方面軍首脳陣は怒り心頭であった。

通信参謀「それが……、機器の調子が悪く繋がりません……」

軍団長「こんな時に!、伝令!、西住みほ大佐に伝えよ!、自身の戦車連隊を持って防戦に当たれと!」

伝令「かしこまりました!」

軍団長「他の歩兵、砲兵も引き抜けるだけ引き抜いて構わん!、黒溝台防衛に回せ!」

参謀長「了解！」

軍団長は事態を飲み込むとかなり焦った表情で援軍の編成を急いだ。

黒溝台防衛戦です！

黒溝台襲撃の知らせを聞いた満洲方面軍司令部は中堅部隊の先頭に配置したみほが率いる中戦車1個連隊に出撃、防戦命令を出した。

みほ「西さんも河嶋さんもまさか正面突撃を行うなんて・・・」

しかし報告を聞いたみほを始め西住連隊の面々はあまりの酷さに半ば呆れていた。

まほ「隊長、命令には従いますがあの二人には一切の同情なんてありません。」

愛里寿「指揮官としてなつてない・・・、隊長、出撃前にこちらから西大隊、河嶋大隊双方に撤退命令を出しましょう。」

まほ「同感だ、敵味方が入り乱れている状況では援護のしようも無いからな。」

まほと愛里寿は同情こそしないがそれでも撤退を支援する策をみほに提案する。

みほ「はい、今回の私達の目的は敵に沙河を渡らせない事、黒溝台を防衛する事にありますので、目的地に到着、西、河嶋両大隊の撤退が済んだのを見計らって攻撃します。ですが追撃は極力避け、黒溝台前方の防衛陣地より前には進まない様にしてください！」

今回もまた遼陽戦前半の様に防衛戦となるため、みほの意見に部下達は賛成した。

みほ「では行きます！、パンツァーフオー！」

そしてみほの号令と共に奉天進行中止命令を受けた際に現場派遣技術将兵によって改装された四式中戦車改1個連隊（計180輛）が一斉にエンジンを鳴らし前進を開始した。

戦車部隊以外には直属の歩兵1個大隊、砲兵2個中隊、工兵1個中隊などが共に出撃した。

優花里「砲身が伸び、砲弾も少し大きくなったとは言え、まだまだソ連に後れを取っています・・・」

戦車に関しては優花里の言う通り、四式中戦車改言っても装甲の特に薄い部分に外側から追加の防御板を張り付けたら砲身を1割ほど延長、砲弾も75mmから76.2mmとなり威力と射程、防御力が少しは増加したがそれでも気休め程度にしかないレベルであった。

観測員「こちら黒溝台後方観測所！、前方の平原にて敵味方の戦車や歩兵が入り乱れ乱戦になっております！」

西住連隊所属の観測員は部隊より一足先に黒溝台後方の観測所に着き、状況を連隊の通信長となった沙織に伝えた。

沙織「それじゃあ撤退命令を無視したって言うの！」

観測員「い、いえ！、これほど混乱してしまうとむしろ撤退する事さえ困難なのは無いかと思われませう！」

沙織「そう・・・、連隊長、どうしますか！」

みほ「黒溝台は敵のいる平原に比べやや高い位置にありますのでそこからまず敵部隊の後方を攻撃、敵の進撃が止んだところで再び撤退命令を出します。」

沙織からの報告を受けたみほは慌てる事無く冷静に戦況を分析、そして味方に指示を送った。

優花里「その後はいかが致しますか！、敵とてそう簡単には諦めないと思われませう！」

みほ「わかっています・・・、なので最低限、援軍が到着するまで黒溝台防衛陣地を生かして敵を迎え撃ちます！」

桃「ああ・・・、もう半分もない・・・、撤退急げ！」

柚子「現在、生き残っている車両は48輜です！、急いでください！」

桃「わかつている！」

援軍の先鋒として西住連隊が到着した頃には河嶋大隊、西大隊共に50%もの戦力を消失していた。

絹代「くっ！、突貫して死するのは武士の誉れだが・・・、上官命令は絶対！、総員急いで撤退しろ！」

福田「撤退でありますか！、敵に背を向けるのでありますか！」

玉田「不名誉であります！、突貫して名誉の戦死をさせて欲しいであります！」

絹代「軍において上官の命令は絶対だ！、気持ちにはわかるが今は堪え直ちに撤退しろ！」

緑色の草が生い茂っていた平原は僅か1日程度で辺り一面に機械部品の破片や戦死者、血痕が広がっていた。

牟田口「撤退も止む無しか・・・」

その光景を見てようやく司令官牟田口は撤退命令までは行かずとも陣地までの後退命令を出した。

みほ「牟田口中将！、お待ちせしました！」

牟田口「西住大佐か！、頼むぞ！」

みほ「了解！、観測員！、位置を知らせてください！」

観測員「第1目標T—26部隊、距離400m！、第2目標T—34／76、距離600m！」

みほ「全車、撃ち方始め！」

それと同時に配置を終えた西住連隊の四式中戦車改が一斉に凄まじい爆音と共に砲身が火を噴き76・2mm砲弾を飛ばした。

ソ連戦車長「ん？、・・・、ギヤアアアアー！！」

そしてそれが敵軍の頭上から雨の様に降り注ぎ、突撃した味方と激しい戦闘を行っていたT-26軽戦車とその後方にいるT-34/76中戦車に命中、T-26は一撃で戦闘不能になる物もあつた。

華「砲手、代わつて下さい！」

砲手「はい！」

最中、華は自身が乗車する戦車の砲手を代わつてもらい自ら射撃を行った。

その初弾はT-34/76を捉えた。

華「・・・、そこっ！」

装填手「如何ですか！」

華「前のよりは良いですが・・・、正面からこの距離では砲弾を弾かれてしまいました・・・」

しかしT-34/76の装甲はT-26より遥かに頑丈で、開いた距離での正面攻撃では砲弾を弾かれてしまうほどであつた。

麻子「やはり、堅いな・・・」

優花里「正面しか狙えないこの位置からでの撃破は難しいですね・・・」

麻子「ああ・・・、連隊長、T-34相手では履帯や砲身を狙った方が良いかと、撃破こそ出来ませんが戦闘不能にはできません。」

みほ「そうですね、部隊総員、T-34相手では履帯および砲身を狙ってください！」
戦車に詳しい優花里と一連の攻防を冷静に分析していた麻子は履帯、砲身を破壊し戦闘不能にさせる戦術をみほに進言した。

エリカ「撃破できないのは悔しいけど、仕方ないわね！」

砲手「では履帯、続いて砲身を狙います！」

エリカ「よろしく！」

この攻撃で履帯を破壊されたT-34/76はその場で走行不能となり、どんなに頑強な装甲を持っていようと動けなくなった戦車は良いのであった。

更に砲身を破壊され戦闘能力を削がれ戦車乗組員達はすぐさま戦車から降り歩兵として戦うか逃げるかした。

観測員「河嶋大隊、西大隊、防衛陣地最前列まで後退完了しました！、歩兵の大多数も同様に後退しましたがいずれも防衛陣地にて戦闘続行しております！」

まほ「何だと！」

愛里寿「どういうつもりだ！」

柚子「こちら河嶋大隊副隊長の小山です！、我が司令官の命令は後退こそするがあくまでも黒溝台にて徹底抗戦を行うとの事です！」

みほ「!!、牟田口中将！」

牟田口「黒溝台を奪われる訳にはいかんのだ！」

みほ「それでしたらせめてもう一步後退を！」

牟田口「ならん！、粉骨碎身の精神にて防戦に当たれ！」

みほ「しかしそれでは防衛線が広すぎて必ず穴が出ますし弾幕が疎らになっています！、戦線を縮小するべきと存じます！」

黒溝台を奪われる訳にはいかないという牟田口の言う事はもつともであるが、大軍に對して小軍で防衛に当たるのであればもつと陣地の内側にて防衛線を縮小し組織的に行うべきとみほは意見した。

しかし牟田口は一切の聞く耳を持たず、西住連隊は絶対不利と言う状況下で援軍が到着するまで現状維持に努めた。

みほ「・・・、我々も可能な限り援護します・・・」

みほは半ば無理やり自身を押し殺し援護に当たった。

しかしこの時、味方の兵士がまた1人、また1人と倒れて行くのをはつきりと目にしていたみほは流石に初めの頃の様な冷静な表情ではいられなくなっていた。

みほ「正確なる射撃に努め一人でも多くの敵を倒してください！、でなければ前線部隊が全滅してしまいます！」

みほがそう言い放ち、自らも死を覚悟しなければならぬと思った瞬間、部隊の後方から砲声がなり砲弾が降り注いだ。

観測員「黒溝台左舷後方陣地に味方の砲兵隊！、援軍です！」

天は決して彼らを見捨てなかつた。

沙織「連隊長！、援軍の第5師団が間もなく到着します！」

優花里「松井中将が率いるマレー方面軍となる予定だった部隊の1つですね！」

沙織「兵力は歩兵4個連隊、砲兵1個連隊、更に97式中戦車（ハチ）1個旅団も間もなく到着します！」

麻子「何とか防衛線は保てそうだな・・・」

援軍として到着したのは満洲方面軍との合流に手間取っていた山下奉文中将指揮下にある松井太久朗中将が率いる第5師団および97式中戦車1個旅団であった。

みほ「皆さん！、これなら負け戦では無くなりました！、ここが正念場です！」

みほのこの一言で部隊の人員の殆どが士気を取り戻し奮い立った。

また余談ではあるが、この第5師団と中戦車1個旅団を含む山下指揮のマレー方面軍

（第25軍）は日米開戦回避成功によって急遽満洲方面軍に組み込まれた。

因みに現在戦闘中の牟田口率いる第18師団もまた山下の指揮下にある第25軍所属部隊の1つで、もう1つ第56師団がいるがこれは第5師団の後方に配置されている。

山下「我が第25軍の総兵力は7万、こちらには防衛陣地もある、ソ連に中国共産党共よ、突破できる物ならしてみるのが良い。」

後に奉天の虎と恐れられる山下指揮のこの第25軍の参戦によって絶対不利に立たされていた戦局は段々と味方に傾き始めた。

絶対に退けない戦いです！

黒溝台会戦は終始敵味方の砲弾が飛び交い雨の様に降り注いでいた。

みほ「歩兵の皆さんは防塁や物陰から乗り出さないでください！、我々中戦車1個連隊が防塁の直後に回るため後方の歩兵の皆さんは戦車を盾にしてください！」

日本歩兵「了解！」

みほ「間もなくT-34/85の姿が見えてきました！、山下中將に通信！」

通信士「通信繋がりました！」

みほ「観測士の伝える座標に向け155mmカノン砲を撃ち込み敵戦車の撃破をお願いします！」

山下「良いだろう！、辻！」

辻「はい！」

山下「重砲1個大隊を持って敵戦車を撃破せよと伝えろ！」

辻「はい！」

みほの要請を受けた司令官の山下はその内容を作戦参謀の辻を経由して砲兵隊に伝えた。

その中でも日本軍の砲兵大隊の1つに配備されている最新型の155mmカノン砲は射程、威力共に絶大な力を発揮した。

重砲大隊長「了解!、撃ち方始め!」

ソ連戦車兵「グアアアアアー!!」

ソ連戦車大隊長「敵重砲に気を付けろ!」

通信士「155mm、観測士の指定した位置に次々着弾!、T-34/85を始め敵戦車を吹き飛ばしております!」

みほ「・・・」

しかしみほはその報告に満足など一切ない表情で冷静に戦局分析を行い、ある事に気が付く。

みほ「この敵の攻勢・・・、長くは持ちませんね・・・」

山下「どういう事だ!」

みほ「いま我々の正面にいる敵の総勢は12万、しかしこちらも防衛陣地ありで7万の兵力がいます!、防衛陣地が無ければこちらがすぐさま敗北しますが、そこから放たれる重機関銃や野砲、戦車砲、そして後方の155mmカノン砲などを受け損害が広がっています!、もし本気でここを落とすつもりなら奉天の主力を割いて来るはずですから!」

山下「なるほどな……、しかし奉天には中国はいてもソ連はいないだろう。」

みほ「はい、満洲におけるソ連の兵力はまだ不十分であるため大攻勢に出るにはまだ時間が掛かるはずです！」

現在、奉天に配備されている中国共産党軍の主力は60万であるが、ソ連極東方面軍の兵力はウラジオストク、ハバロフスクなどを含めても30万に届かない程であったため、いくら陸軍力に優れたソ連軍と言えど今の段階で仕掛ければ返り討ちに会い兼ねないとなっていた。

そして黒溝台での攻防戦が始まってから1週間、初めの敵の総攻撃の後は少々の睨み合いが続いたが引き上げて行った。

みほ「ふうー……」

観測員「敵が！、敵が引いていきます！」

桃「た、助かった……」

西「長い間突撃を我慢するのはきついでありますな！」

柚子「(死ぬかと思った……)」

戦闘終了の2日後、辻が満洲方面軍司令部にて報告を行っていた。

軍団長「戦死者5000名だと……」

辻「はい、歩兵1個連隊が壊滅、その他に大隊規模で壊滅した部隊もおります!、更に河嶋、西の各戦車大隊の損害は半数との事であります!」

参謀長「何をやっている・・・」

杏「・・・」

そして報告内容のあまりの酷さに頭を抱え、中には呆れている者もいた。

杏「味方の戦死者5000に加えて軽戦車60輛、中戦車30輛、野砲や機関銃など計100門以上をたつた7日で、呆れて物も言えませぬ・・・」

参謀長「特に牟田口中将指揮の第18師団の損害が特に激しく、一度後退させましよう!」

軍団長「ああ、そうだな・・・」

副指令「して沙河の守りはどの部隊にしましょうか。」

軍団長「うむ・・・」

杏「第5師団に加え歩兵第4、7師団を右翼、左翼に回すのがよろしいかと存じます。」
参謀長「ああ、それが良い。」

話を沙河戦線防衛に戻し、だいたいの概要が出来上がった直後、伝令が飛び込んで来た。

伝令「申し上げます!、奉天に潜入中の諜報部隊より!、奉天の敵軍がごぞつて移動

を開始！」

辻「総攻撃に出るのか！」

参謀長「いいえ！、敵軍は北進しているため目的地はハルビンかと思われます！」

その場にいた満洲方面軍司令部は将や参謀たち一瞬耳を疑ったが次第に喜びの表情が現れ始めた。

副指令「と言う事は、奴らは奉天を捨てたという事か！」

伝令「恐らく！」

軍団長「人員を増やし真偽を確かめよと伝えよ！」

伝令「はっ！」

軍団長は更なる調査を依頼した。

そして諜報員の活動によって奉天はもぬけの殻となり、また大軍がハルビンに入るのを確認した満洲方面軍は河が凍る冬、11月下旬ごろ前進、沙河を超え奉天に入った。

その際みほは自身の戦車連隊を奉天の北に置き敵襲に備えた。

みほ「この前の敵は黒溝台に何しに来たんだろう・・・」

優花里「1つにこちらの戦力を確かめに来た・・・、とか・・・」

みほ「それって10000人を超える戦死者を出してもする事ですかね・・・」

優花里「一丸にそうとは言えませんが、向こうは兵力にかなり余力がありますか

ら・・・、現にシベリア方面軍の一部が南下して来ているわけですし・・・」

現在、シベリア方面から南下、中国とソ連の国境に60万の兵を配置している。

みほ「こちらでも戦力が増えた事に違いありませんが・・・」

優花里「西住まほ殿、島田愛里寿殿が大佐に昇格され戦車連隊長に!、本土から追加配備された四式中戦車改が我々の連隊と合わせ1個旅団規模になりましたからね!」

陸軍軍令部の方針では既に戦車3個師団が完成している計算であったが不慮の事態に会い本来の30%程しか満州に渡せていない。

みほ「ですが敵は必ず機甲軍3個軍団以上で攻めて来ます!、こちらでも機甲軍を最低でも1個軍団なければ太刀打ちできません!」

みほの言う機甲軍1個軍団を創るとなればそれに適した兵員10万~20万、戦車1500輛~2000輛、大砲800門~1000門など戦車の発達に遅れをとる日本ではかなり難しい要求であった。

みほ「では私は軍議に参加しますので後をお願いします。」

優花里「はい!」

奉天に拠点を移した満洲方面軍司令部はほとんど警戒を解けない状況にあった。

軍団長「奉天を取ったとは言え、これは勝利とは程遠いな・・・」

参謀長「敵の狙いは満洲方面軍全軍を一か所に集め、圧倒的な兵力で攻勢を仕掛ける

つもりでしょう！」

山下「我が満洲方面軍は陸軍、空軍を総ざらいしても60万弱、対し敵は正面の中国共産党軍100万とソ連極東方面軍およびシベリア方面軍総勢120万以上、これでは勝負になりません！」

杏「恐らく敵がここを取らせた理由として、兵力で勝る敵に有利な野戦を仕掛けやすくするためでしょう。」

みほ「あの、1つ提案があるのですがよろしいでしょうか！」

軍団長「いかがした。」

みほ「ハバロフスクを空爆してはどうでしょうか！」

辻「それは無理です西住大佐！、遼陽の空軍基地から爆撃機をハバロフスクまで飛ばしたとしても往復3000km以上あります！、たどり着く事は可能かもしれませんがその道中にて敵戦闘機に襲われ多数の犠牲を伴うでしょう！」

現在満洲方面軍の後方、遼陽にある空軍基地からハバロフスクまで往復およそ3000kmに対し空軍の二発爆撃機一式陸攻の航続距離は4000kmあるので航続距離に問題は無い。

しかしハバロフスクに到達するまでにくつかの敵空軍基地の防空県内を突破しなければならぬため護衛戦闘機が必要不可欠となるが、現在の空軍陸上航空団の護衛戦

闘機は一式戦闘機(隼)であり航続距離は1600km程であるため十分な護衛が出来ない。

みほ「はい、そこで私に考えがあります!」

みほの考えが明らかとなったのは1939年12月上旬頃であった。

しかしその1月ほど前の1939年11月、ソ連は100万の大軍を持ってフィンランドに侵攻を開始、フィンランド国防軍は総ざらいしても25万でしか無い圧倒的不利な状況での開戦となった。

数名の日本空軍海洋航空第一航空戦隊の航空機パイロットが奉天に置かれた満洲方面軍総司令部を訪れた。

その面々は一航戦司令官の坂本美緒中佐を始め空軍大尉となり戦闘機1個飛行中隊を指揮する宮藤芳佳や芳佳の部下として着任した空軍少尉、服部静夏などがいた。

美緒「では西住大佐はハバロフスク爆撃を石狩の爆撃機隊、その護衛を我々の戦闘機隊に頼りたいと。」

みほ「はい、航続距離の問題で遼陽の基地からでは爆撃隊に護衛戦闘機隊を付ける事ができませんが爆撃機隊を石狩基地から、戦闘機隊をハバロフスクから800km以内の地点から空母より発進させれば往復する事が出来ると私は考えます。」

空軍をここに呼び出したのは当然みほであり、遼陽の部隊では無理だと判断するや否

や別部隊に依頼する事を念頭に置き、白羽の矢を立てたのが美緒らの部隊であった。

美緒「なるほど、内容は理解しましたがハバロフスクを攻撃するともなれば一式陸攻が120機は欲しい所ですが・・・」

みほ「いえ、壊滅させる必要はありません。」

美緒「どういう事ですか？」

軍団長「実はもう坂本中佐、我々の目的はハバロフスクを攻撃することでウラジオストクとそれ以外の敵を分断する事にある。」

参謀長「最悪脅しをかける程度で構わないし、もし120機もの爆撃機を飛ばせば大いに目立ち敵空軍と一大空戦に成り兼ねない。」

これだけは何としても避けたいのだ。」

みほ「そこで私の案なのですが、今回この作戦は奇襲でお願いしたいので航空機の編成は爆撃機3個飛行中隊（27〜30機）および戦闘機1個飛行中隊（12機）程度が良いかと思われまます。」

静夏「そ、それだけでありますか！」

みほ「奇襲の際に大部隊を送り込んだらすぐにバレて奇襲の意味が無くなりますからね。」

杏「敵方して見れば無謀極まりないし少数で爆撃したところでこっちに大した利益が

ありませんが・・・、そう言った攻撃でなければ奇襲とは呼べません。」

杏の言葉を聞いた直後、芳佳が何かを閃いた。

芳佳「西住大佐!、この作戦についてですが!」

みほ「何でしょうか?」

芳佳「一度奇襲を受ければ再び攻撃されるのでは無いかと恐怖心を抱く様になるという人間の心理を突くのが狙いではありませんか!」

みほ「・・・」

まだ空軍には知らされていない作戦の趣旨を見抜いた芳佳にみほは不意を突かれた様な表情をした。

みほ「これは驚きました・・・、よくわかりましたね・・・」

杏「ハバロフスクは敵方の一大反攻拠点に成り兼ねない・・・、だからこっちはお前らをいつでも攻撃できるぞと脅しをかけて置く必要があるんだよね。」

静夏「なんと!、納得いたしました!」

美緒「作戦の事を南雲閣下にお話ししよう、成功すればしばらく敵は動けなくなるはずだ!」

みほ「(正直成功率は五分五分何ですがね・・・)」

美緒らは参謀長から正式な作戦書を受け取り翌日には基地を去つり空母天城に戻つ

てい行つた。

美緒「宮藤。」

芳佳「はい？」

美緒「この作戦、間違ひなく敵空軍とぶつかる、日本空軍にとって初の実戦だ、部下の指導をより一層頼む。」

芳佳「はい！、2対2の時は服部少尉が私の2番機に付いてね。」

静夏「了解です！」

この時の芳佳は戦闘機1個飛行中隊長の他に若手育成のための模擬戦闘訓練（宮藤機が敵役）を担当していた。

当然、芳佳は一切手を抜かず、しかも笑顔で照準を合わせてくるためそれを見たパイロットはしばしの間トラウマになったと言う。

同年12月下旬、美緒らが空母天城に戻り空軍大将で第一機動部隊司令官小沢治三郎に作戦書を提出した。

小沢「奇襲か・・・、よかろう、通信参謀！」

通信参謀「はっ！」

小沢「石狩基地に通信、爆撃機の用意をさせよ！」

通信参謀「了解であります!」

小沢「この作戦は後に行われる海軍との合同作戦の予行練習と行こうか!」

小沢を始め航空要員らの会議で作戦開始は1940年の7月と決定された。

それには2つの理由があつた。

1つ目は零戦の正式な実践配備がこの時期であつたこと。

2つ目は吹雪などによって飛行がままならぬ事態や雪で爆撃目標が見えなくなるのを防ぐために念には念を入れこの時期となつた。

1940年～1942年

各種設定集1（主人公）改

メインキャラ（1940年～1942年）

西住みほ

年齢・26歳～28歳

身長・162cm

出身・熊本県

所属・日本陸軍満洲方面軍

搭乗戦車・四式中戦車改～五式中戦車

役職・戦車1個連隊長～戦車1個師団長

階級・大佐～中将

人物

戦闘その物はあまり好きでは無いが頭脳戦、特に知略、謀略に優れた軍師的存在。

士官学校時代の成績は常にトップで指揮官としてはとても有能だが、昔から引っ込み

思案なところがある。

実戦時にはほとんど先頭に立って戦う事は無かったが、大きな部隊の隊長になった時から、指揮官が逃げていてはダメだと自分に強く言い聞かせ先頭にて指揮を執る様になった事で兵の士気が上がり、更に己の知略や謀略が加わり初戦で戦果を挙げるほどである。

しかし引つ込み思案な性格が幸いし、大きな会議の場ではあまり発言出来ないでいる。

岬明乃

年齢・26歳〜28歳

身長・158cm

出身・長野県

所属・日本海軍連合艦隊

所属艦艇・大和

役職・大和艦長〜1個艦隊提督

階級・大佐〜中将

人物

並外れた行動力と戦闘において驚異的勝負強さ、天性の直観力、指揮能力、更には幸運を併せ持った絵に書いた様な指揮官。

幼い頃に海難事故で両親を亡くした過去があり、戦闘や防衛は勿論、人命救助が目的で再び海に舞い戻った。

士官学校での成績は良くも悪くも普通であるが行動力や勝負強さを買われ、本来志望していた部署とは全く違う主力部隊にすぐさま配属され、その才能は直ぐに開花した。

ただし、頭より体が先に動いてしまう体質で、時には周りを悩ませる無茶な行動を起こす事がある。

宮藤芳佳

年齢・21歳〜23歳

身長・159 cm

出身・神奈川県

所属・第一航空戦隊

搭乗機体・零戦21型〜零戦43型

役職・戦闘機1個飛行中隊長〜戦闘機1個大隊長

階級・大尉〜少佐

人物

明乃と同様に並外れた行動力を持ち、こちらはパイロットとして天性の才能を持つ日本空軍期待の若手エース。

父は科学者、母は医者と言うあまり軍には関係無い家に生まれたが、昔から正義感が強く父に言われた言葉から軍人となる事を決意、戦闘機パイロットを志願し士官学校での成績はみほと同様にトップで戦闘機パイロットとしては勿論、その家柄から応急医としても才能を秘めている。

とても優秀ではあるが感情的になり易い一面があるため、軍規はある程度心得てはいないが無茶な行動を起こす事がある。

※民主化が進んだとはいえ、直ぐにはリアルでも進行しないため、軍内部では未だに陸軍と海軍の対立は続いておりそこに巻き込まれるみほと明乃、そこにリアルでは存在しなかった空軍を設置し事で空軍がどの様に陸軍と海軍の対立に関与するかも考えていきたいです。

ゼロ初陣す！

1939年9月1日のソ連がドイツ、イタリア、そして中国や日本、フィンランドなどに侵攻、ついに第二次世界大戦の戦火が世界中に広がった。

ヒトラーやムツソリーニが打倒され国家基盤の揺らぎが生じたドイツ、イタリアはソ連が誇る機械化装甲軍団を相手に大いに苦戦を強いられ、現在はドイツ軍のエーリッヒ・マンシュタイン元帥やハインツ・グデーリアン大将を司令官として国境にて防戦を強いられている。

しかし航空機開発にて先端を行くドイツ軍は不足した戦車の穴を埋める様に多数の航空機を投入しての交戦に移り、この時よりエーリカ・ハルトマンやゲルトルート・バルクホルンなどのエース達が多数誕生していった。

その一方で開戦と同時に国家の存続が絶望的とされていたフィンランドは名将カール・マンネルヘイム元帥指揮の下で行われた焦土戦術、ゲリラ戦、スキー兵の機動力を生かした対戦車戦術が功を奏しソ連軍に大打撃を与える奇跡を成し得た。

特に陸軍戦車部隊のミカや狙撃部隊のシモ・ヘイへ、空軍のエイラ・ユージェイライネンなどの活躍が敵に衝撃を与えた。

1939年12月末にはイギリス軍がフィンランドに、フランス軍やスペイン軍、オランダ軍がドイツ、イタリアの援軍として到着、同時にアメリカがソ連に宣戦布告を行い西部戦線に参戦した。

そして年が明けて1940年6月現在、東部戦線にはチエスター・ニミッツ大将率いる米太平洋艦隊とダグラス・マッカーサー大将率いる陸軍や独立部隊の米海兵隊がアリューシャン列島に到着、80万の兵を持つてカムチャツカ半島から上陸する計画を立てていた。

またセイロン島を拠点にしている英東洋方面軍はトーマス・フィリップス大将率いる東洋艦隊はシンガポール経由でシナ海に進出、陸軍はルイス・マウントバテン大将指揮の下シナ海より上陸する部隊とインド経由で陸地を進む部隊に分け中ソ軍に攻撃を開始していた。

そんな中、依然として奉天を拠点とする満洲方面軍とハルビンを拠点とする中国共産党軍、ソ連軍は睨み合いを続けていた。

同年7月下旬早朝、空母天城がハバロフスクから約800kmの洋上に到着、日本軍はハバロフスク爆撃作戦を実行に移した。

美緒「間もなく石狩基地より第一次攻撃隊30機が後1時間後に本艦の上空を通過す

る予定だ！、第2中隊は直ちに発艦開始！、第1中隊はもうしばらく待機だ！」

「航戦戦闘機パイロット「了解！」

一航戦司令官坂本中佐の号令と共に胴体と翼に日の丸印を描かれた明灰色の戦闘機、零戦21型の1個中隊12機が天城から発艦を開始、上空を通過する一式陸攻と合流して任務遂行のためハバロフスクを目指し飛行する。

芳佳「第1中隊、出撃準備をしつつ待機してください！」

今回の作戦に参加した第一次攻撃隊の護衛戦闘機パイロットには後のエース格となる坂井三郎や岩本徹三、笹井醇一が所属、次手の第二次攻撃隊の護衛戦闘機パイロットにも西沢広義、太田敏夫が所属している。

この日は零戦の初陣であると共にエース達の初陣ともなった。

まだ薄暗い空の下、高度6000m程を笹井の中隊と爆撃機3個中隊が飛行している。

笹井「こちら第2中隊長の笹井大尉だ！、これより我が隊は大陸上空に突入する！」

岩本「今日はよく晴れてるな・・・」

坂井「爆撃機隊は良く目立つ！、もうすぐ敵機のお出ましの可能性有だな！」

笹井中隊所属の各小隊長である坂井少尉と岩本少尉は爆撃機隊の左右に展開し警戒

を続ける。

笹井「遠目に川が見えて来た・・・、ハバロフスクの敵基地視認！」

出撃からおよそ3時間、日が登り始めたと同時にハバロフスク上空に到達、それを知ったソ連軍は半ばハチの巢を突いた様な有様であった。

そして基地や市街のあちこちでサイレンが鳴り響く。

坂井「敵機は・・・、まだ来ないか・・・」

岩本「おいおい！、これ下手したら俺ら手ぶらじゃねえか！」

敵は慌てて戦闘機を飛ばそうとはしているがいずれもすぐには飛び立てないため手ぶらで帰るのが不満な岩本がぼやく。

そして爆撃機隊が爆撃を開始、投下された爆弾は敵基地に次々と命中していった。

笹井「こちら第2中隊、味方爆撃隊は尽く爆撃に成功、投下終了し次第すぐに引き返します！」

美緒「こちら空母天城、了解した。」

飛行場にはいくつもの穴が開き格納庫が吹き飛ばされ戦車、戦闘機は木っ端微塵となり基地のあちこちから煙が立ち上っていた。

坂井「ん？、あれは・・・」

笹井「どうした？」

坂井「10時の方向より敵機!、数は20以上!」

笹井「機種は分かるか?」

坂井「複葉機、恐らくI-16でしょう!」

岩本「I-16!、舐めくさりおつて!」

そんな中、比較的被害を受けなかった航空基地からI-16戦闘機24機が飛び立ち爆撃機隊へと襲い掛かって来た。

笹井「まあ手ぶらが御免なのは皆同じかも知れん!、爆撃機隊が戦線離脱するまで我が隊で引き受ける!、戦闘開始だ!」

岩本「うっしやー!!」

笹井から戦闘開始の許可が出たと同時に岩本が自身の小隊を引き連れ敵編隊に突っ込んで行く。

岩本「食らいやがれえー!!」

そして正面から7・7mm、次いで20mm機銃を発射、その直後に先頭の1機、続けざまに2番機が黒煙を噴き落下して行った。

岩本「うし!、次行くぞ!」

岩本の僚機もそれぞれ1機ずつ撃墜、会敵して僅か数分で敵機1個小隊が全滅した。

坂井「一人で突つ走るな!」

爆撃機隊を挟んで反対側にいた坂井の小隊は少々遅れて敵戦闘機隊と交戦を開始。

坂井「そら行くぞ!」

坂井もまた正面からすれ違いざまに1機、流す様にしてもう1機を撃墜した。

坂井「!!、後ろに付かれた!」

ところが数では敵が有利であるため坂井が交戦した部隊とは違う部隊の機体に背後を取られ、敵機は機銃を発射してきた。

坂井「しかし複葉機では!」

ソ連パイロット「!!、消えた!」

坂井「この零戦の運動性能にはついて行けんよ!」

だが坂井はそれを巧みに交わし、零戦の最大の特徴の一つである速力と運動性能を生かし一瞬で敵の背後に回り込み引き金を引いた。

ソ連パイロット「あ!、有り得ない!」

そして敵戦闘機は黒煙を上げる事無く空中分解した。

岩本「ほう、ひねり込みか!」

笹井「さて、爆撃機隊の戦線離脱完了、こつちも引き上げるぞ。」

坂井および岩本の飛行小隊が敵戦闘機部隊のおよそ半数、14機を撃墜した辺りで味方爆撃機隊が戦線を離脱、第一次攻撃は無事成功に終わった。

坂井「了解。」

岩本「できれば全部撃墜したかったぜ。」

笹井「まあそう言うな。」

それからすぐに護衛戦闘機隊も戦線を離脱、被害は皆無であった。

笹井「こちら笹井、作戦終了、第二次攻撃隊の作戦成功を祈る。」

芳佳「こちら第二次攻撃隊、後1時間ほどですれ違うと思います。」

笹井「了解。」

第一次攻撃隊が出撃してからおよそ2時間後、第二次攻撃隊が石狩基地を発進し、天城上空で芳佳が率いる護衛戦闘機と合流、ハバロフスクを目指し飛行を開始していた。

そして芳佳の発言通り、戦線を離脱からおよそ1時間後、第一、第二次攻撃隊が空中ですれ違った。

芳佳「お疲れ様です、後はお任せを。」

笹井「敵戦闘機来襲の危険性あり、お気をつけて。」

その最中で芳佳と笹井は偶然にも互いの姿が見える距離を飛行して来たので互いに敬礼を交わした。

芳佳「さて、次は我々の番です！、先ほど笹井大尉より敵機来襲の危険性ありとの報告を受けました！、皆さん気を引き締めて任務に当たって下さい！」

第二次攻撃隊「了解！」

更に40分後、第二次攻撃隊がハバロフスク上空に到達した。

芳佳「行きます！」

そしてこの出撃がきっかけで芳佳はトップエースとしての道を駆け上がる事になる。

大空の若鷲達！

日が登り辺りの視界が良好となった時刻に一式陸攻第二次攻撃隊および芳佳指揮の護衛戦闘機隊がハバロフスク上空に差し掛かろうとしていた。

良く晴れ視界が良好になると言うのは爆撃機にとって目標を捉えやすいと言う利点があるが、それとは逆に足の遅い爆撃機は敵戦闘機の攻撃を受けやすいと言う欠点もあった。

そして今回の攻撃は2回目、しかもある程度の時間が経過しているため敵戦闘機がハバロフスク上空で待ち伏せをしていた。

静夏「前方敵機！、機種はI-16！、3個中隊！、およそ35機から40機です！」
芳佳「I-16のみ・・・、MiGはいない？」

静夏「今のところは見受けられません！」

芳佳は敵にソ連の新型戦闘機で速度600 km/h以上、実用上昇高度12000 mにもなるMiGを恐れていたが敵は全て旧式のI-16のみであった。

芳佳「ソ連はドイツやフィンランドに気を取られて東部にはまだ十分な配備が行われていないと言う事か・・・」

敵の編成を見た芳佳の推理は当たっていた。

陸軍こそまともな戦車部隊や重砲部隊がいるものの、海軍と空軍の軍備はお世辞にも最新式とは言えない物が多かった。

西沢「どうしますか中隊長!、このまま突っ込みますか?」

芳佳「笹井大尉の部隊は2個中隊相手にほぼ無傷・・・、戦闘機の性能差なのか敵のパイロットが素人なのか・・・」

太田「敵との距離、およそ1000mとどこですかね、どうしますか中隊長?」

宮藤中隊に所属する西沢少尉と太田少尉は考えている芳佳をせかす。

この2人はただ単に戦闘がしたいだけであつた。

芳佳「・・・、全機戦闘態勢!、1機たりとも近づかせないでください!」

太田「了解!、太田小隊行くぞ!」

西沢「西沢小隊続け!」

敵は3個の中隊を正面と右方、左方の3方向に分け爆撃機隊に接近、それに対し太田、西沢の小隊は右方、静夏の小隊は左方、そして芳佳の直属小隊は正面にそれぞれ攻撃を開始した。

日本軍の零戦が12機、対するソ連軍のI-16は36機いるため、端から見れば圧倒的に不利であつた。

芳佳「3対12か・・・、中々きつそうだね！」

芳佳はまず初めにやや遠めから射撃を開始、先頭の1機を早々と撃墜、その後、機体を徐々に左へ水平に動かしながら第2射を放ち2機目を撃墜した。

ソ連パイロット「なんだあの先頭の奴は！、照準が合わない！」

そしてすれ違いざまにもう1機、芳佳はこの見敵からすれ違いまでに計3機の敵を撃墜した。

また同僚の2機も敵を計2機撃墜、敵は一瞬の出来事に半ば放心状態となり、次第に編隊行動が取れなくなつて行つた。

芳佳「敵が混乱してる！、それじゃあもう組織的な反攻はできないね！」

当然、芳佳は好機と見なし目に留まつた1機に狙いを定め引き金を引くと翼が吹き飛ばされ黒煙を噴き上げながら落下して行つた。

芳佳「次！」

その後もまるで自身の体の様に自由自在に期待を操り敵を撃墜、戦闘開始から数十分で敵1個飛行中隊が全滅、更に爆撃機隊が目標上空に到達し爆撃を開始、ハバロフスクの主要な基地から黒煙が立ち上つて行つた。

2番機パイロット「中隊長！、爆撃機隊任務完了！、帰投していきます！」

芳佳「了解！、戦闘止め！、直ちに現空域を離脱！、天城へ帰投します！」

戦闘機隊パイロット「了解！」

作戦成功を確認した芳佳は自部隊に帰投命令を出し、速やかに現空域から離脱して行った。

芳佳「さっきの戦闘で敵機26機を撃墜し4機撃破、対して味方の損害は皆無、こちらの完全勝利だね。」

戦果を確認した芳佳は初陣でその結果を受け大いに満足した。

なお、この時の芳佳個人の撃墜数は8機であり初陣でエースとなり、芳佳の他にも坂井や岩本、笹井などが個人で5機を撃墜している。

また、これらの優秀なパイロット達がいる事で撃墜0機の残念な結果となってしまう者もいた。

戦闘機パイロット「カンパーイ！」

岩本「いひひひ！、5機は落としてやったぞ！」

坂井「俺だって5機は落としたぜ！」

太田「だー畜生！、こっちは2個小隊でやったから3機しか落とせなかつたぜ！」

西田「お前も3機か！、勝ったと思つたんだがな！」

太田「なにおー！」

ともあれ天城に帰投した戦闘機隊のパイロット達は酒こそ無いがいつも以上に大騒

ぎした。

美緒「初陣でいきなり8機撃墜とはやるな宮藤！」

芳佳「いえ、まだまだこれからです！」

静夏「それでも、初陣でエース！、おめでとうございます！」

芳佳「ありがとう！、静夏ちゃんも初陣で3機撃墜、慣れない指揮を取りながら良く

やってくれたと思うよ！」

静夏「そんな！、私なんてまだお二方の足元にも及びません！」

美緒「まあそう謙遜するな！」

芳佳「これからも頼むね！」

静夏「はい！」

芳佳「次は恐らくウラジオストクですな・・・」

美緒「ああ、次が本番だ！、次はMiGを揃えて来るだろうな！」

1940年8月、セミがこれでもかと声を上げるこの蒸し暑い日に開戦後から2回目の御前会議が開かれた。

南雲「以上がハバロフスク奇襲作戦の最終的な結果です。」

今回の会議はまず初めに空軍大将となった南雲忠一による戦果報告であった。

昭和天皇「爆撃機隊は主要基地に壊滅的打撃を与え戦闘機隊は敵戦闘機隊50機余りを撃墜または撃破、初陣で中々の戦果だな。」

南雲「御褒めに預かり光栄です。」

戦果報告のあとすぐに本題となるこの戦争における今後の方針を定める議論が始まった。

東条「さて、本題に入るとするかのう、山本長官、例のウラジオストク攻略の件は如何か。」

山本「はい、では申し上げます。」

まず東条は連合艦隊司令長官となった海軍大将、山本五十六に問う。

山本「我ら海軍の方針は変わりません、我が連合艦隊の水上打撃艦隊による艦砲射撃、空軍の空母打撃艦隊による航空攻撃を加え敵の航空戦力および基地防衛施設を破壊した後、海兵隊6000名を持って強襲上陸、これを奪取します。」

東条「予想される現在のウラジオストク防衛隊の兵力はどれほどか。」

山本「軍港施設だけであれば精々1個師団、2万と言ったところでしよう。」

東条「艦砲射撃と航空攻撃でかなり数が減ると思うが、内陸部の敵兵が打って出てきた場合はどうか。」

山本「現在我が国に海兵隊は総勢18000人程存在しますので先鋒の6000人が

上陸し橋頭保を築いた後、速やかに上陸させ防衛陣地にて待機させればそう簡単には手を出せないでしょう。」

真雪「そこで陸軍に一つ協力を要請致します。」

山本が一通り話し終えたところで真雪が東条ら陸軍に協力を願ひ出た。

しほ「何でしょう、予備兵力を回してウラジオストクを攻め落とせとでも仰いますか？」

真雪「いいえ、落として頂きたいのはハバロフスクの方です。」

しほ「ハバロフスクですか・・・」

真雪「ハバロフスクはシベリアとウラジオストクの中継基地としての役割を果たします。」

そこで陸軍にこのハバロフスクを落としてもらえればウラジオストクへの補給路を遮断でき兵糧攻めにできます。」

千代「ウラジオストクもハバロフスクもいずれは攻略しなくてはなりませんから、この機にやってしまった方が良いかも知れませんか。」

しほ「まあ確かに、このままハバロフスクを放っておいてハルピンを攻略する際に横腹を突かれるよりはマシですね。」

今回ばかりは陸軍にも利があると判断したしほ、千代は意外にあっさりと言真雪の申し

出を承諾した。

しほ「となると新たにハバロフスク攻略のための部隊を編制する必要がありますね。」

東条「実行はいつにしますか？」

真雪「海軍は来年の冬に作戦を実行します。」

千代「それに合わせるとしたら我ら陸軍は来年の秋までには部隊を用意しましょう。」

東条「スパイの情報によればアリュージャン列島伝いに上陸して来る米軍対策のため半数をカムチャツカ半島に移し、また爆撃の被害によって現兵力は4万程だそうだ。」

千代「歩兵2個師団に中戦車1個旅団、それから砲兵2個連隊、重砲2個大隊は欲しいですね。」

しほ「歩兵と砲兵は問題ありませんが戦車の方はきついですね、少なくとも4式改は回せません。」

東条「それ以外で手の空いている者はおるかのおう、それから司令官もいるか？」

千代「司令官としては牟田口、戦車部隊は西、河嶋の各戦車大隊くらいです。」

全員「……」

以前の愚行を思い出した一同は黙り込んだ。

明治天皇「他にはおらんのか？」

しほ「はい……」

東条「なら作戦の日まで山下にでも再教育してもらおうか？」

しほ「それしかありませんね・・・」

ハルビン攻略のための布石としてウラジオストク、ハバロフスク攻略の案が出揃ったところで、いくつかの不安を残したまま御前会議は終了した。

御前会議が行われている頃、奉天ではハルビン侵攻の準備に追われていた。

みほ「今回我が連隊は山下中将指揮の下、最前線で戦います！、いつも以上に気を引き締めてください！」

現在、ハルビンの南、奉天侵攻の為に集結したソ連、中国共産党軍の兵力は80万、対する奉天の北、ハルビン攻略の為に集結した日本軍の兵力は50万でしかない。

敵味方総動員130万と言う日本軍にとって日露戦争時の奉天会戦をも凌ぐ未曾有の大会戦が今まさに始まろうとしていた。

奉天会戦です!

1940年8月下旬、大本営はこの大会戦に備え司令官として多大な技量を持つ西住しほを陸軍元帥とし、陸軍軍令部総長と兼任で満州方面軍総司令官の座に置いた。

しほ「ここが奉天の満州方面軍司令部ですか？」

杏「はい!、お待ちしておりました!、西住しほ元帥閣下!」敬礼

しほ「ご苦勞、戦況は？」

杏「現在、戦車部隊を主軸とする山下大将率いる第25軍を先頭に敵方から見て逆楔形をなす陣形を敷いて、敵の方が数が多いため初めは防戦のみに徹し、敵の勢いが弱り始めた頃合いを見て別動隊が敵軍の本陣に奇襲をかけます!」

しほ「なるほど、奇襲部隊はやはり西住連隊かしら？」

杏「はい、加えて澤梓少佐、磯部典子少佐、鈴木(カエサル)少佐がそれぞれ率いる各97式中戦車大隊(3個大隊)と直営の歩兵1個大隊、工兵1個大隊、また第14軍所属の中川州男中佐率いる歩兵1個連隊です。」

しほ「その規模では連隊ともう呼べませんね。」

杏「正式な旅団とするのですか？」

しほ「ええ先ほど、西住みほは陸軍少将としました、実践での実力をしかと見せて貰いましょうか。」

杏「私も楽しみです。」

この日、突如として西住みほは少将に、その他の隊員達も一階級昇進となった。

しほ「最前線正面の各防衛陣地に正面8万、右翼左翼それぞれ6万、第2陣に10万、後方支援の砲兵が4万、後方の第3陣が16万、それから奇襲部隊が5000程、こんな感じかしら？」

杏「はい……、ですが今回は本部からの指令として牟田口中将を指揮官とした新たな部隊を編成し、会戦が始まったと同時にハバロフスク攻略に動いてもらう事になっています。」

しほ「ええ、命令した本人だし知っているわ。」

杏「兵力は元々所属していた第25軍第18師団と河嶋、西、園がそれぞれ率いる中戦車大隊（3個大隊）、それから第14軍より預かった第15連隊、総兵力は25000程かと。」

しほ「確かハバロフスクの戦力はこの前の爆撃である程度崩壊、15000程と聞いたわ、これなら勝てそうね。」

杏「……、私も作戦参謀として同行しますので、必ず勝ちます。」

奉天からハルビンへと続く平野に突如として人波が現れた。

それを防衛陣地の高台から第25軍司令官である山下奉文大将と第25軍参謀長となった辻政信大佐がその絶景ともいえる景色を見下ろしていた。

山下「まるで森が動いている様だな。」

辻「先頭にソ連機甲部隊が最低でも2個師団、その後方に中国共産党軍の戦車隊や騎兵、歩兵、先鋒でも20万はおりますな・・・」

山下「ああ、しかもソ連戦車T-34だ、これは難戦になるぞ！」

辻「通信参謀！、司令部の通信！、敵軍団見ゆ！、戦力は先鋒のみで20万以上！、迎撃命令および空軍の支援を求む！」

山下も辻も最新鋭戦車で武装したソ連機甲軍を相手に第25軍のみで太刀打ちできるとは思っていない。

それ故、他所に構える部隊と奉天の南に設置した空軍陸上航空団の支援が不可欠であると司令部へ通信した。

しほ「来たか・・・、各部隊に通信、何としても引くな！、別に勝つ必要は無いが敗走だけは絶対にするなと伝えなさい！」

司令部通信参謀「はっ！」

第25軍からの通信の直後から司令部上空から機械音が響き始めた。

直属部隊参謀「西住閣下！、先ほど空軍爆撃機および護衛戦闘機が司令部上空を通過しました！」

しほ「規模は？」

直属部隊参謀「西住閣下のご指示の通り第一次、第二次攻撃隊共に一式陸攻40機と護衛の隼が16機であります！」

しほ「了解。」

現在、日本軍とソ連、中国共産党軍の互いの距離感は1500m以内まで近づいていた。

山下「まだだ！、十分に引き付けよ！」

そして現在接近中の機甲部隊3個師団からなる機甲軍を指揮するのはソ連陸軍中將で名將と名高いゲオルギー ジェーコフであった。

ジェーコフ「まだ撃つてこないか、今回の指揮官はそこまで馬鹿では無い様だな。」

ソ連観測士「敵との距離、およそ1200m！」

ジェーコフ「攻撃準備！」

T-34であれば十分に射程距離ではあるが、日本軍の7.5cm野戦砲はこの戦車を

倒せる威力が無いと判断したジェーコフは可能な限りの接近を試みた。

山下「(7. 5 cm野戦砲4個連隊、重砲が無い訳では無いがこれでは火力が足りんな・・・)」

日本観測士「距離1000m！」

山下「撃ち方用意！」

山下もまた75mm野戦砲では敵戦車の装甲を貫けないと判断、ある程度接近したところで攻撃用意の指示を出す。

山下「(全く！、20. 3 cmカノン砲や28 cm榴弾砲をもつとよこせてんだよ！)」

以前山下はこの様な会戦に備え司令部を通して強力な20. 3 cmカノン砲や28 cm榴弾砲をそれぞれ1個大隊ずつ派遣要請を出したが贅沢言うなど却下され、最終的に配備されたのは10. 5 cmカノン砲1個大隊と28 cm榴弾砲1個中隊のみであった。

日本観測士「距離900m！」

山下「よし！、撃ち方始め！」

山下の号令と共に7. 5 cm野戦砲、10. 5 cmカノン砲、28 cm榴弾砲、7. 62 cm戦車砲が一斉に火を噴いた。

ソ連観測士「敵軍発砲！」

ジェーコフ「総員！、撃ち方始め！」

その直後、ジェーコフもまた号令を発し、7. 6 cm 戦車砲、8. 5 cm 戦車砲、12. 2 cm 野戦砲が一齐に火を噴いた。

ソ連戦車兵隊「来るぞ！」「ぐあー！」「雨曝かよ！」「戦車大破！、走行不能！」
そして各々の発射した砲弾が次々と着弾、その衝撃で辺り一面に砂埃が舞い上がった。

日本兵「くそ！、前が見えん！」「おい！、しっかりしろ！、死ぬな！」「陣地の幾つかがやられた！」

山下「攻撃の手を緩めるな！、急ぎ次弾を発射せよ！」
ジェーコフ「怯むな！、奉天は直ぐそこだ！」

ジェーコフ軍は前進、それを山下軍が正面から迎え撃つ。
撃つては撃たれ、また、撃つては撃たれの繰り返しである。

山下「流星は名将ジェーコフ！、抜け目が無いな！」

日本観測士「後方より中国共産党軍！、騎兵が突っ込んで来ます！、その数4万以上！」

山下「機関銃陣地！、薙ぎ倒せ！」

山下軍の正面から戦車に続き中国共産党軍騎兵軍団が銃剣片手に猛進、日本軍の防衛陣地に突撃を開始した。

中国共産党軍騎兵団長「突っ込め！」

中国共産党軍騎兵「「うおおおー！！」」

日本機関銃部隊長「撃ち方用意！、薙ぎ倒せ！」

山下「続いて部隊長の命令と共に9mm重機関銃、7.7mm軽機関銃が敵機兵団に向け一斉に撃ち込まれた。

敵騎兵団の先鋒連隊はすぐさま沈黙、第2陣以降も甚大な被害を受けここまで3000を超える敵騎兵が薙ぎ倒された、にも関わらず敵は数に物を言わせて突撃を止めない。

日本機関砲部隊長「山下閣下！、敵機兵団！、本陣地を超え内側に侵入！、その数最低6000！」

山下「何をやっとなるか馬鹿者！、まあいい、戦車部隊をぶつけてやれ！」

山下は報告を受けるや否や直属の97式戦車2個連隊を敵機兵団に差し向け、敵騎兵団はすぐさま鎮圧された。

辻「軍団長！、最前線が間もなく突破されます！」

山下「全てを守り切るのは無理だ、だが、これで少なくとも敵総大将の位置はほぼ掴めた、だな観測士！」

日本観測士「はい！、しかとこの目で確認致しました！」

山下「その位置を直ちに西住旅団に伝えよ！」

第25軍通信参謀「はい！」

山下軍から敵軍の総大将の位置が西住みほの戦車旅団に伝えられた。

みほ「位置確認！、それでは行きます！、パンツァーフォー！」

西住旅団はこの時、平原での激突を尻目に小高い丘などを利用して密かに移動を開始した。

沙織「旅団長！、上空を陸空の爆撃機隊が通過しました！」

みほ「もうしばらくは皆さんにお任せしましょう。」

ソ連観測士「敵機来襲！、数30以上！、高度2000m〜3000m！」

ジェーコフ「くっ！、対空戦闘！、それからハルビンの空軍基地に支援要請！」

ソ連通信参謀「はっ！、既にその様に！、戦闘機隊は間もなく到着します！」

ソ連「更に敵の護衛戦闘機を確認！、ハバロフスクに来た奴らかもしれませぬ！」

ジェーコフ「あの時は空母からだ！、今回は違うだろう・・・」

ジェーコフは口ではそう述べたがもし零戦がここにもやって来たとすれば今ハルビンに配備されているI-16では到底適わない。

そう思うと空軍の支援が当てにならないと思わざるを得なかった。

ジェーコフ「(MiGは間もなく配備されるが、間に合わなかったか・・・)」

新型のMiG-IIIは東部戦線では日本軍より遥かに強大な米軍対策として東シベリアに優先的に配備されている。

山下「爆撃機隊の到着か、派手にやっているな。」

一式陸攻40機からバラバラと雨の様に250kg爆弾が降り注ぎ、敵戦車や砲が次々と吹き飛ばされていく。

しかし爆撃が終わったと思ったら今度は隼による機銃掃射によって更に被害が拡大して行った。

その間に日本軍は態勢を立て直し強大な敵軍に対し頑強な抵抗を続けた。

奉天の虎！、推参です！

同年9月1日、会戦からこの日までおよそ7日ほど続いた日本軍とソ連、中国共産党連合軍の間の激しい攻防は一端打ち止めとなり、日本軍は現存の防衛陣地、ソ連軍もまた新たに設置した仮設拠点へと引いて行った。

そしてこれまでの戦闘で日本軍15000人、ソ連軍20000人、中国共産党軍5000人も戦死者を出していた。

ソ連機甲軍仮設司令部、ここに軍団長のジェーコフ中將を始め後に西住機甲軍と激戦を繰り広げる事になるブルガーエフ少將にパドフ少將、カザコフ大佐らの姿があった。

パドフ「おのれ日本軍め！、小賢しい真似をしおつて！」

ジェーコフ「ふふ、どうやら敵には相当頭の切れる奴がいる様だ。」

ブルガーエフ「軍団長、それは考えすぎではありませんか・・・」

ジェーコフ「なに、慎重である事に越した事はない。」

カザコフ「ですがあまり愚凶愚凶している事を同士スターリンは良く思わないでしよう。」

ジェーコフ「以前の赤軍肅清の事か・・・、そのせいでフィンランドに手痛いカウン

ターパンチを食らったな。」

カザコフ「いかがいましてしょうか・・・」

ジェーコフ「ブルガーエフ!、機甲1個師団を率いて先行し敵防衛陣地に風穴を開けろ!、その後は前回と同じだ!」

ブルガーエフが率いる機甲1個師団が仮設基地から暗闇に紛れ出撃、基本戦力は兵員20000人に中戦車600輛、野戦砲200門、重砲100門であった。

そしてその翌日、ジェーコフ率いる本体およそ10万と中国共産党軍8万が出撃した。

日本軍観測士「き!、来た来た!、来たぞー!!」

ブルガーエフの先行部隊が夜明けと共に山下軍防衛陣地の前衛に襲い掛かって来た。

山下「戦闘用意!、急げ!」

日本軍防衛陣地の前衛には現在、97式中戦車2個大隊と歩兵2個連隊、砲兵1個大隊で兵員は6000人程であった。

日本軍観測士「距離600m!」

戦車部隊は敵が600m圏内に入り込んで来たところで一齐に火を噴かせた。

始めから戦車がそこに集中攻撃できる様設置されていたからである。

ブルガーエフ「撃つて来たか！、だが貴様らの75mmではこのT-34を撃破するのは難しいぞ！、こちらも撃て！」

ソ連軍も前進しながら砲撃を開始、その間に日本軍戦車部隊の集中砲火浴びて既に10輜程が撃破された。

だが頑強な敵戦車は“ガキン！”という鈍い金属音を挙げながら戦車砲弾を弾き進
行を止めず400m以内まで迫つて来た。

山下「なるほど6000しか居ない区画のみに戦力を集中させ防衛線に穴を空けるつもりだな。」

通信参謀「いかがでしたでしょうか！」

山下「援軍として最低2個師団を向かわせよ！、その間に敵戦力の集中している場所をしっかりと観測しその座標を重砲陣地に伝えよ！」

報告から敵の狙いに気づいた山下は援軍を向かわせたと同時に観測士に詳しい座標の提示を指示した。

通信士「座標が届きました！」

砲術士「修正完了です！」

重砲中隊長「よし！、撃てー！ー！！」

その指示の下、その座標に向けて28 cm榴弾砲12門が爆炎を噴き上げ巨大な砲弾を発射した。

T-34搭乗員「ぐあああー!!」「何だ今のは!」「榴弾砲だ!、気を付けろ!」間もなくして敵戦車に着弾、頑強なT-34もこの一撃で跡形もなく吹き飛ばされた。

ブルガーエフ「怯むな!、榴弾砲は装填に時間が掛かる!、次弾が来る前に敵陣地に飛び込め!」

28 cm榴弾砲は装填速度が遅いためその間は10.5 cmカノン砲で賄っているが敵の勢いは衰えず先頭の1両が陣地内に侵入、それに続いて2輛、3輛と続けて突撃してくる。

日本兵「しまっ!、突破された!」「機関銃じゃ無理だ!」「迫撃砲で何とかしろ!」ブルガーエフ「フハハハ!、押し潰せ!」

そして司令官ブルガーエフの搭乗する車両も陣地へ突入して来た。

山下「撃てー!!」

だが、その瞬間を狙って前線までやって来た山下が直接戦車、それも97式ではなく四式中戦車改で現れ、直後に主砲を発射、ブルガーエフ搭乗車輛の手前の車輛を撃破した。

山下「西住め！、こんな良い物に乗っておったのか！、我が部隊にも配備が間に合つてよかつた！」

本部は山下の重砲部隊増強を却下した代わりに60輛、およそ1個大隊分の四式中戦車改を配備した。

山下「突撃！、押し返せ！」

ブルガーエフ「あんなブリキ戦車ごときに負けるな！、ぶつ潰せ！」

そして防衛陣地の一角、さして広くも無い区画で四式中戦車改とT-34が激突した。

山下「右だ！、よし！、砲塔旋回！、撃て！」

操縦手「閣下！、敵に囲まれております！」

山下「ならば撃破するのみだ！、砲手！」

砲手「はっ！」

山下「貴様が覗く照準に映つた戦車は全部敵だ！、撃ちまくれ！」

砲手「はっ！、はい！」

山下の部隊は既に敵戦車部隊に囲まれているためそう命令を発した。

この四方を囲まれた状態で襲い掛かって来る敵を一心不乱に撃ちまくるが射撃そのものは冷静で、確実に敵戦車を撃破していた。

を待つのみと！」

みほ「了解！、全部隊に通達！、間もなく奇襲を掛けます！、総員直ちに準備してください！」

梓「いよいよ私達も出撃！、必ず手柄を立てて見せます！、西住旅団長！」

カエサル（貴子）「行くぞ！、我らここにありと！、歴史にその名を刻むのだ！」

部隊の集結を確認したみほは通信で全部隊に作戦開始を伝えた。

みほ「それでは行きます！、パンツアーフォー！！」

油断大敵です!

みほ「パンツアーフオー!」

みほの掛け声と共に戦車部隊を先頭に敵陣目掛け飛び出した。

ソ連参謀「閣下!、丘の向こうより敵部隊!」

ジェーコフ「数は!」

ソ連参謀「およそ戦車1個旅団!、本陣目掛けて突っ込んで来ます!」

ジェーコフ「うむ・・・」

日本戦車部隊の突然の出現にソ連兵の殆どが浮足立っていた。

ジェーコフ「予備の戦車1個連隊を回せ!」

西住旅団が現れた方向に置かれたソ連軍の兵力はおよそ2個連隊、4000人程度であり、うち戦車部隊は2個大隊と言ったところであった。

梓「全軍!、砲を撃ちながら突撃!、まずは防衛陣地を崩す!」

貴子(カエサル)「大した数では無い!、踏み潰せ!」

澤大隊、鈴木(カエサル)大隊は敵陣に7.5cm戦車砲、9mm重機関銃の雨を降らせ

どんと敵兵を排除して行く。

香利奈「あいー！、突撃！」

あゆみ「思ったより大した事ないね！」

優季「行け行け！、さっさと片付けろ！」

あゆみ「撃て撃て！、逃がすな！」

紗季「・・・」

更に澤大隊は前進、それに続く形で鈴木（カエサル）大隊も前進した。

里子（エルヴィン）「ふふふ、共産国など長続きせんよ！」

清美（左衛門佐）「まるで大阪夏の陣だな！」

武子（おりよう）「おい、縁起でもない事言うな！」

澤梓らもまたみほら同様に陸軍士官学校を優秀な成績で卒業しており部隊長となつた。

ところが彼女らはみほなどに比べ実戦経験が乏しく、今この場においてもただ攻撃、前進するのみであつた。

みほ「!!、澤に鈴木（カエサル）両大隊！、前進し過ぎです！、一度後退してください！、危険です！」

沙織「旅団長！、ここは勢いに任せて突撃しましょう！、幸い敵の抵抗もそこまで

はありません！」

麻子「私は反対だ！、何が起こるか分からん！」

華「私は旅団長に従います。」

優香里「私は突撃に賛成します！」

みほ「分かりました・・・、総員！、全力で突撃してください！」

みほの命令が飛ぶ、それと同時に雄たけびを上げ突撃を開始した。

始めは日本軍が優勢で敵の防衛陣地の70%以上を破壊、敵本陣まで後1000mと

言うところまで迫っていた。

だが、みほはこの命令を下すにあたって大きな不安があった。

みほ「(何故、敵本陣に動きが無い・・・)」

通常であれば奇襲を受け危機に曝された司令官は直属の部隊を引き付けその場を立ち去るのが常識であった。

だがジェーコフは逃げ出さなかった。

日本歩兵「敵本陣後方より新たな敵戦車部隊！、その数500以上！」

みほ「!!、嵌められた！」

そしてみほの不安が現実の物となる。

みほ「作戦中止！、直ちに反転！、引き返してください！」

それに気が付いたみほは直ちに突撃中止命令を出し、加えて撤退命令を出した。

だが時既に遅し、時速50km以上の高速で走行可能なT-34は素早く西住旅団を囲み込んだ。

ジェーコフ「ふふふ、流石は同士カチューシャ、良い手際だ。」

敵将ジェーコフはその様子を本陣から見ていた。

ジェーコフ「この戦況であれば奇襲は誰にでも想像できる、そして奇襲部隊は数が少ない故に多少の時間が有れば直ぐに対処できる。」

ジェーコフは奇襲を予期し、先行部隊の最後尾にいた戦車1個旅団を素早く呼び戻していた。

そしてその戦車旅団を指揮するのはソ連の若き名将、“小さな暴君”や“地吹雪”と異名をとるカチューシャ少将であった。

カチューシャ「残念だったわね！、このカチューシャの包囲網はそう簡単には破れないわよ！」

ノンナ「同士カチューシャ、指示通りの包囲網、完成いたしました。」

クララ「後は存分にいたぶって差し上げましょう。」

そしてカチューシャの下には参謀、クララ中佐と副長で“ブリザード”と異名を取

るノンナ大佐がいた。

カチューシャはマイクとスピーカーを使って日本語で話し出す。

この時、みほとカチューシャとの距離感はおよそ300mであった。

カチューシャ「さて、あんた達には今から1時間の猶予をあげるわ！、その間に意見をまとめて降伏しなさい！」

みほ「・・・」

カチューシャに降伏を進められたみほは一度戦車の中に入り、この囲まれた状況下で何とか脱出の策を練る。

以前の無差別爆撃事件によってソ連は余裕で国際法を侵す事を知っているみほに降伏すると言う選択種は無かった。

みほ「(包囲網を破るには守りの手薄な箇所を狙うのが定石です・・・、しかし敵は予想済みでしょう・・・)」

みほは必死に考えた。

だが1時間と言う時間は非常に短く、これと言った打開策を考えられないまま時間が過ぎた。

カチューシャ「降伏する気になったかしら？」

みほ「いいえ、最後まで戦います！」

カチューシャ「あっそう、それじゃあ、片付けてあげなさい！」

ソ連兵「「ウラアアアー！」」

みほ「総員急発進！、次いで単縦陣へ！、その後、私の指示した方向に突撃してください！」

カチューシャ「!!」

時間が経つたと同時に急発進、更に全速力で突撃を開始したためカチューシャは大いに驚いた。

そして更にカチューシャを驚かせたのは西住旅団が集中して突撃をした場所は最も守りの堅い部分であった。

カチューシャ「あいつらなんで！」

そこにいたソ連兵はこっちは来ないと高をくくっていたため思わぬ攻撃を食らい包囲網に綻びが生まれる。

当然、みほそれを見逃さなかった。

みほ「急いで脱出してください！、態勢を立て直される前に！」

しかし不利な状況に変わりはないためみほは撤退にのみ集中した。

それによつて西住旅団の殆どが脱出に成功、元来た道に戻って行った。

ジェーコフ「同士カチューシャ、一本取られた様だな。」

このみほの一連の動きを見ていたジェーコフも関心していた。

みほ「(今回ばかりは大失敗です……)」

この後、みほは幾多の戦場で何度もカチューシャと顔を合わせる事になる。

総出撃でピンチ！

1940年8月31日、海軍大将、山本五十六が連合艦隊司令長官に就任してから丁度1年が経ったこの日、対ソ戦略に基づく艦隊編成を終えた連合艦隊の主力が大湊鎮守府に集結した。

これまでも連合艦隊は活動していたがほとんどは空母打撃艦隊であり、戦闘艦による水上打撃艦隊の本格的な活動はまだであった。

そんな中、山本に一通の密封指示書が届いていた。

山本「時間だ、各艦員に連絡、各隊指揮官および艦長は直ちに旗艦へ集まれ。」

山本が発した命令が発行信号として全艦に伝えられる。

すると小型のモーターボートが下ろされ、それが長門に集中する。

その中には海軍だけでは無く新設の海兵隊の姿もあった。

連合艦隊司令長官旗が翻った戦艦長門甲板で台に登った山本が出迎える。

山本「思ったより多いな。」

明乃「はい、私を含め艦長、指揮官合わせて100人はいます。」

山本「諸君！、大命が下った！、今私が手にしているこの密封指示書はこの戦争にお

ける連合艦隊命令第一号である！」

山本が封を切り中身を取り出し、そして内容を伝える。

山本「我が連合艦隊はオホーツク海に進み極東に存在する全ての敵海軍戦力を駆逐すべし！、ただし時期はこちらに任せる！、以上！」

ベーリング海はアリューシャン列島に拠点を置くアメリカ太平洋艦隊が既に封鎖している。

しかし、マッカーサー大將率いる陸軍がカムチャツカ半島で大いに苦戦しているため、この行動は米軍の援護の意味合いも持つ。

この時の米海軍はまだ主力空母を3隻しか持つておらず、ソ連空軍との対決もあり陸軍の援護にまで手が回らなかった。

山本「米軍の尻拭いをしなければならぬのは少々遺憾ではあるが……」

明乃「盃、回りました。」

山本が命令書を読み終わると同時に長門の艦長である明乃は盃が全員分回った事を伝える。

山本「うむ、諸君、厳しい戦いになる事は確かであるが、戦争が終わった時、またこの場でこうして盃を交わそう。」

山本が言い終え盃を掲げると、それに合わせ皆も盃を掲げる。

明乃・ましろ・もえか「……」

山本「皆！、願わくば！、努力せよ！、いざ!!」

全員「……いざ!!」

掛け声と共に一気飲み、そして盃を甲板に叩き付け割った。

明乃「出港準備急げ！」

明乃が長門艦橋にて指揮を執っていると、明乃のよく知った人物が入って来た。

ましろ「ミケ……」

明乃「あれシロちゃん？、確か今は金剛の艦長だよ？、何で長門に？」

それはついさつきまで高速戦艦金剛の艦長であったましろであった。

突然の事に明乃は少々困惑した。

ましろ「先ほど移動命令が出て、本日より連合艦隊作戦参謀となる事になった。」

明乃「作戦参謀！、凄い！、大出世だね！」

ましろ「私としては少々複雑な気分だ。」

ましろは非常に優秀であり、海軍士官学校の入学席次は次席、卒業席次は首席であった。

しかし、母の真雪を始め長女の真霜、次女の真冬はかなりざつくりとした性格で列記

とした司令官体質であるのに対し、彼女は頭の回転は速いが父に似たのか融通が利かないところがあり、司令官よりも参謀向きであった。

明乃「でも突然だね。」

ましろ「全くだ、だが選ばれたからには全力を尽くす。」

ましろが参謀になった理由もう一つあるとすれば、それは恐らく彼女の不幸体質であろう。

もし、雌雄を決する命令を発しなけばいけない時、その発する者が不幸体質と言うのは良いイメージではない。

ましろ「私はモカが選ばれると思っていたがな。」

明乃「ああなるほど、でもそれは無いかな。」

ましろ「?」

現在、陸奥の艦長であるもえかも非常に優秀であり、海軍士官学校の入学席次は首席、卒業席次は次席であった。

もえかはリーダーシップが、常に冷静沈着、司令官としての技量は高い。

明乃「モカちゃん、あれで結構テンパリ易いんだよね。」

しかし、実戦シミュレーションの際に自身の作戦を崩され際に土壇場で幾度と無くテンプあってしまい機転が利かないところがあるため、参謀よりも司令官、それも総司令官

では無く現場司令官や副指令が向いている。

ましろ「ああ・・・、しかしまあ、モ力は納得しているらしいが、ごく平凡の成績であつたミケが何故、長門の艦長なのかと言う疑問はかなり多くの者が持っている。」

明乃「うっ・・・」

長門艦長のこの明乃は海軍士官学校の入学席次、卒業席次共に同期120名中中間であつた。

にも拘らず現連合艦隊旗艦の長門艦長に選ばれた。

その大きな理由としては並外れた行動力と実戦能力、戦闘指揮能力を宗谷真雪に見いだされての事だが、明乃はその事を知らないし外部に口外もしていないため、たまに同期に厄介見される事がある。

明乃「！、司令長官！」

そんな事を話していると艦橋に連合艦隊司令長官の山本五十六が入つて来た。

山本「やあ、遅れてすまないな。」

明乃「出撃準備！、整いました！」

山本「よし、では参るぞ！」

2日が経っただけが9月2日の0時、連合艦隊主力が抜錨した。

先頭を行くのは連合艦隊主力より2日程早く抜錨した木村昌福少将が率いる第三水雷戦隊である。

編成は修理と改装を終えたばかりの軽巡川内を旗艦とし、吹雪型4、綾波型4、白露型4の13隻である。

そしてこの第三水雷戦隊は軍令部および山本よりとある密命を帯びていた。

木村「まさか最新の駆逐艦を備えた二水戦や四水戦では無く、一代旧式の三水戦が先鋒を貫えるとはな、山本長官のご期待に応えねばならんな、頼んだぞ西崎少佐!、立石大尉!」

木村は川内の砲雷長である西崎芽衣少佐と砲術長である立石志摩大尉に期待していた。

芽衣「勿論です!、魚雷ぶつ放してソ連艦を木端微塵にしてやりますよ!」

志摩「Oui!」

芽衣と志摩は同郷で幼馴染、しかし芽衣の方が1年早く海軍士官学校に入学していたため階級は芽衣の方が上であった。

芽衣も志摩も士官学校の砲雷科でもえかやましろに匹敵するほど優秀であり両者とも入学、卒業席次10位前後であった。

それでも明乃などに後れを取っている理由として芽衣はとても血の気が多くトリ

ガーハッピーである事、志摩は人と接するのが苦手な事で両者とも指揮官向きではないと捉えられた事である。

それでも戦闘に関する知識や技術、センスは抜群に高い。

川内艦長「司令官間もなくオホーツク海が見えてまいります！」

木村「2年ほど前の借りを返す時が来たようだな！、これよりオホーツク海に突入する！、総員戦闘用意！」

軍令部からの密命、それはオホーツク海の西に位置するソ連海軍の軍港に停泊中の敵艦隊に夜間奇襲攻撃を仕掛け撃滅する事であった。

志摩「芽衣……」

芽衣「大丈夫！、あたしに任せな！」

志摩「うん……」

芽衣「左砲雷撃戦！、主砲！、副砲！、魚雷発射管！、全門開け！」

そして闇夜に紛れた第三水雷戦隊は目的地が微妙ではあるが肉眼で捉えられる位置にまで接近していた。

暗闇の水雷戦でピンチ!

連合艦隊の先発として出撃した第三水雷戦隊は一度、樺太南端の大泊にて簡単な整備と補給を受けた後、9月と言えど夜になれば肌寒さを覚えるオホーツク海へと突入した。

木村昌福少将指揮の下、マガダン港より出港しニコライフスクナアムーレ港に停泊中のソ連海軍オホーツク海艦隊への先制攻撃を目論む。

その間に軽巡神通を旗艦とする第二水雷戦隊は陽炎型駆逐艦12隻を導入し、ニコライフスクナアムーレ港とウラジオストクを結ぶ航路を封鎖するため、大陸と樺太の狭間に位置する間宮海峡の封鎖を開始した。

もしニコライフスクナアムーレ港の敵がウラジオストクを目指した場合は第二水雷戦隊が迎え撃つ算段である。

木村「そろそろ敵が現れてもおかしくない位置のはずだが、暗くて何も見えんな……芽衣「そんなところに我々が突如として現れたら敵さん驚くでしょうね。」

川内通信員「巡視船より打電!、敵艦見ゆ!、ニコライフスクナアムーレ港の沖合およそ200km!、本戦隊との距離は50km!」

芽衣「ほぼ予想通り！、総員撃ち方用意！」

巡視船からの情報を頼りに第三水雷戦隊は速度を上げ敵艦隊に接近、現在存在するオホーツク海の敵艦隊の数はそれほど多くないため、これを確実に叩く事が今後の作戦を優位に進められる鍵となる。

川内観測員「敵艦視認！、巡洋艦3および駆逐艦5！、真つ直ぐニコライフスクナアムーレ港を目指している模様です！」

木村「こちらにはまだ気が付いていないようだな！」

川内観測員「はい！」

木村「うむ！、最大船速！、同航戦に持ち込む！」

川内艦長「了解！、取舵一杯！」

川内航海長「とくりかくじ！、一杯！」

第三水雷戦隊は単縦陣のまま敵艦隊と同方向に進むため大きく左に舵を切った。

なお、敵はまだ第三水雷戦隊の存在に気が付いていないのか速度は依然として巡航速度のままであった。

川内観測員「本艦と敵艦隊との距離およそ40000m！、あ！、敵艦隊に動きあり！、速度を上げました！」

芽衣「そりゃあここまで近づけば普通気づくわなあ！」

木村「先頭のは重巡だな・・・、砲は15.5cmか・・・」

芽衣「後ろの2隻は軽巡ですね・・・、流石に重巡3隻だったらきついですがこれなら！」

川内観測員「本艦と敵艦隊との距離およそ2000m!、敵艦主砲回転！」

木村「こちらの準備は整っているな!、西崎！」

芽衣「もちろんです！」

木村「では各艦!、砲雷長指示の目標!、撃ち方始め！」

芽衣「了解!、探照灯照射!、第一目標!、敵艦隊旗艦の重巡!、主砲!、撃ち方始め！」

志摩「撃てー!!」

川内砲雷長の芽衣は第一目標を敵艦隊の戦闘を航行する重巡とした。

そして攻撃開始命令と共に砲術長の志摩が発砲を指示、川内に搭載された6門の14cm主砲が一斉に火を噴いた。

これを合図に後続の駆逐艦12隻もまた、一斉に12.7cm主砲を発射した。

芽衣「魚雷装填急げ!、こいつがこの勝負の要だ！」

川内水雷員「はい！」

なお、芽衣は砲雷長と共に水雷長を兼任しており、雷撃指示は芽衣が行う事となつて

いる。

志摩「主砲！、次弾装填！、目標変わらず！」

芽衣「魚雷発射管1番！、雷撃用意！」

川内観測員「弾着！、今あー！！」

砲撃から少し空いて、敵艦付近で水柱が立った。

志摩「命中ならず・・・、方位角度修正！、急げ！」

芽衣「距離、角度、相対速度よし！、撃てー！！」

そして水柱が立ったと同時に芽衣は魚雷発射管の微調整を行い、4発の93式酸素魚雷を放った。

志摩「撃てー！！」

続けて主砲が発射された。

川内観測員「あ！、敵艦発砲！」

芽衣「ようやく撃つて来たか・・・、魚雷発射管2番！、雷撃用意！」

川内観測員「着弾！」

芽衣の命令で魚雷発射管が回転、敵艦の方を向いて行く。

その時、川内の付近で複数の水柱が立つ、敵の砲撃が着弾した。

15.5cm砲弾は軽巡である川内に命中すれば決して小さくない損害を受ける事と

なり、最悪一撃で中破し兼ねない代物であった。

志摩「まだ敵のは初弾、精度は高くない・・・」

芽衣「うん、けど何発も撃たせたら精度が上がる!、それまでに仕留めるよ!」

志摩「Oui!」

敵砲弾が着弾した直後に川内の砲弾が敵重巡に命中した。

川内観測員「命中1発!、しかし副砲を1門破壊した程度で装甲を貫通できず!、また本艦の魚雷!、敵艦に接近!、着弾までおよそ45秒!」

川内艦長「やはり雷撃でないときついな・・・」

木村「重巡の砲撃をともに受ければ一溜りもない!、距離18000mを保ちつつ雷撃で仕留めよ!」

芽衣「お任せください!、魚雷発射管2番!、撃てー!」

魚雷の第一波が敵艦に到達する前に芽衣は第二波を放った。

川内観測員「魚雷接触!、今!」

芽衣「ちっ!、外れか!」

しかし、いくら航跡の残らない酸素魚雷と言えど発見されれば交わすのは難しくな
い、よって第一波は敵に回避行動によって全て交わされ、期待していた大きな水柱は立
たなかった。

川内観測員「なお、後続の駆逐艦が雷撃を開始！、夥しい数の魚雷が発射されました！、その数70ないし80！」

芽衣「次弾装填急げ！、駆逐隊に負けるな！」

第三水雷戦隊の全駆逐艦が大量の魚雷を放った、だがそれは敵艦隊も同じことで5隻の駆逐艦から魚雷が一斉に発射された。

川内副長「ちよ！、良いんです司令官！、こんなに魚雷を連発しても！」

木村「我々の任務は敵艦隊の撃滅だ、出し惜しみはせん！」

川内観測員「あああ！、本艦に魚雷接近！、数4！、全て方位は同じです！」

川内艦長「先頭の魚雷の方位は！」

川内観測員「右130！、距離3000m！、速度36ノット！」

川内艦長「面舵一杯！」

川内航海長「おもーかーじ！、一杯！」

川内は魚雷の進路に合わせ回避行動に移る。

芽衣「魚雷発射管1、2番！、微調整急げ！」

志摩「全主砲！、敵重巡の艦橋およびメインマストを狙え！、撃てー！！」

その間、主砲と魚雷発射管は回避行動で生じる誤差を修正、再び攻撃に移った。

川内観測員「魚雷回避！、更に味方魚雷！、敵艦隊接近！」

そして先ほど味方駆逐艦が放った魚雷が敵軽巡1隻に2発、駆逐艦2隻に1発ずつ命中、爆炎を噴き上げ航行不能となった。

だがそれと同時に味方駆逐艦の敷波と白露に魚雷が1発ずつ命中、こちらも爆炎を噴き上げ大破、沈没こそしなかったが戦線離脱を余儀なくされた。

ここまで戦闘開始から早4時間、敵味方共に砲雷撃精度はかなり上昇したが雷撃の威力と精度、さらに数で勝る日本軍が絶対優勢となった。

芽衣「敵重巡は艦橋をやられ指揮系統はマヒ、更に後続の駆逐艦も味方の攻撃でほとんどが中破以上。」

志摩「どうします、砲雷長？」

芽衣「主砲は目標を駆逐艦に変更!、重巡は雷撃で叩く!」

志摩「了解!、主砲は駆逐艦を狙え!、撃てー!」

芽衣「これで終わりだ!、魚雷8門一斉射!、撃てー!」

多数の砲撃と魚雷1発を艦尾に受けた敵重巡は既に18ノット以上の速度を出せなくなっており、雷撃の標的には持って来いの獲物であった。

そして、魚雷を3発受けたところで敵重巡は船体が真っ二つに折れ海底へと沈んで行った。

芽衣「敵旗艦撃沈……」

志摩「敵駆逐艦も沈黙……」

木村「敵艦はもうおらんか？」

川内観測員「はい、1隻たりとも……」

木村「うむ、撃ち方止め！、戦闘用具納め！」

芽衣「了解！、撃ち方止め！、戦闘用具納め！」

正式な日ソ開戦以来初の海戦は日本側に軍配が上がった。

敵艦隊8隻は全て沈没、敵軍の将兵1000人が戦死した。

しかし味方も駆逐艦4隻、深雪、叢雲、敷波、白露が大破し途中戦線離脱、それ以外にも中破程度の損害を受けた艦がほとんどであり、日本軍もまた400人に上る戦死者を出した。

芽衣「（いくら敵とは言え、人を殺めるのは簡単じゃあないね……）」

芽衣のこの時の心情は尋常でない物があり、いくらトリガーハッピーと言えど、実際に人を撃ち殺すのは流石に正気では無理だと語った。

スパイ大作戦です!

1940年10月、陸軍と海軍がとある作戦書を提出した。

そしてその内容は珍しく陸海軍双方の一致を見せた。

東条「潜入工作・・・、まさか同時期に海軍でも考えられていたとはな・・・」

真雪「我が海軍とて、いくら優勢でも敵の全容を知らずに戦うのは些か無謀では無いかと感じましてね。」

千代「こちらも同じ意見です。」

東条「これから先、更に戦は激化するでしょうから、攻撃目標であるハルビンの正確な戦力を知っておく必要があります。」

米内「では、陸軍さんはハルビンにスパイを派遣すると言う事ですか?」

東条「ええ、海軍さんはウラジオストクですか?」

この陸海軍首脳会議によって陸軍陣営はスパイをハルビンへ送り込むことを既に決定していた。

更に海軍がスパイを派遣するとなればそのスパイをウラジオストクに派遣するだろうと東条はじめ皆が考えていた。

真雪「いいえ、我ら海軍のスパイはマガダンの港に派遣します。」

千代「マガダンですか、しかしあそこの軍港の規模はそれほど大きくありません。」

しかし、東条のこの問いに対し真雪は海軍陣営は全く別の方針を伝えた。

真雪「ええ、ですがいまマガダンに地元住人の内通者がおりますので、我が海軍のスパイはその内通者と接触し情報を得る事を第一としています。」

東条「内通者とは？」

真雪「はい、今現在、ソ連国内にて僅かではありますが確実に反スターリン政権を掲げている者達がいるとの情報を得ており、少し前にもスパイを派遣したところまず間違いないかと思われませぬ。」

米内「その中に海軍に通じる者やフリーのジャーナリストなどもおります。」

真雪「さらに彼らの中にコラ半島のムスマンスクとマガダンを行き来している者がいるため、ひよつとした敵が建造中の超大型艦の情報が入るかも知れませぬ。」

ソ連が建造中と思われる超大型艦、もしそれが完成すれば厄介な事になると真雪は考えていた。

東条「例の建造ドックか・・・」

真雪「はい、そこで我が海軍は海兵隊に協力を依頼、その中から海軍特殊陸戦隊に所属していた者から選抜分隊を組み潜入させませぬ。」

東条「なるほど、我が陸軍は、秋山優花里中佐を指揮官とした特潜隊を用いるつもりだ、規模は歩兵1個分隊程度だ。」

この日の会議で陸海軍共同のスパイ作戦決行は同月下旬と決まった。

北海道では一段と冷え込みが激しくなってきた10月下旬の夜、北海道の宗谷海峡を小型艇で航行する一団があった。

海兵隊より選抜されたスパイ部隊である。

この部隊は大泊より樺太島を北上した後、ソ連領内に侵入、目的のマガダンを目指す。そしてそのスパイ部隊に選ばれた10人の中に2人の女性隊員、後にウラジオストク攻撃にも参加する内田まゆみ中尉と勝田聡子中尉は他の隊員と同様に制服を脱ぎ一般市民を装った格好でマガダンに潜入を開始した。

聡子「ソ連は無茶苦茶寒いぞな・・・」

まゆみ「まさかこんなところに何か月も居なきやいけないのか・・・」

聡子「まあ、敵情視察だから仕方ないぞな。」

まゆみ「うん、敵艦隊の情報を手に入れられたら一攫千金狙えるかもだし!」

一方で満州の現地民を装いハルビンに潜入を開始した一団がいた。

秋山優花里が率いる陸軍のスパイ部隊である。

人数は海軍の3倍、選抜1個小隊30人程が潜入、ハルビンには現地民の他に多くの中国人も暮らしているため、優花里らスパイ部隊は潜入、スパイ活動に苦勞はしなかった。

優花里「中国人に成りすますのも意外と大変、でもまあ、ソ連機甲軍団の最新鋭の戦車が勢ぞろい！、これを下すためにも私がしっかりしなくては！」

第1分隊長「隊長、南の戦力の大まかな数値です！」

第2分隊長「西側の戦力、集計終わりました！」

第3分隊長「東側も完了です！」

分かっていた事とは言え、各分隊の報告を受けた優花里はその内容に驚いた。

優花里「これはまた・・・、T-26軽戦車800輛、T-34/76中戦車1000輛、T-34/85中戦車400輛、KV-1重戦車800輛・・・、何という数と火力だ・・・、これに加え野戦砲や夜戦重砲が2000門、兵員は80万以上・・・」
小隊長「加えて中国共産党軍が40万！、対し我が軍は総ざらいしても60万程！、更に戦車や砲の数で火力の差もかなりあります！」

優花里「今回ばかりは攻めてこない事より、海軍がいち早くウラジオストクを落としてくれる事を祈ろう。」

陸軍としては海軍、空軍、海兵隊がウラジオストクを攻撃、この120万もの大軍勢の目がそちらに向いている間に奇襲をかけ奪い取ると考えていた。

それを含め暗号化され敵情報は陸軍軍令部および参謀本部に送られた。

作戦開始から1月と数日が経った12月初旬、マガダン港の外れの町に拠点を置く海軍のスパイ部隊にようやく待ち人であった内通者がやって来た。

内通者「山」

まゆみ「川」

聡子「どうぞ。」

山、と外で答えたら、川、と答える決まりの合言葉を使って内通者を確認、迎え入れた。

隊員1「よくぞご無事で・・・」

内通者「これでもワシは元軍人じゃ、今だって漁師をしておる、大したことない。」

内通者は60過ぎの中老と言った感じの男性であった。

内通者「ほれ、あんたらが警戒している軍港のドックじゃ、上手く写真が写っておれば良いが。」

聡子「いえ、良く映ってますよ!」

まゆみ「サンクトペテルブルクの軍港まであるのですか！」

内通者「ああ、向こうに同業者がおるからな、まあ、奴らの目を掻い潜つて来るのは些か疲れるがのう。」

内通者はそう言いながら笑い飛ばす。

隊員2「本当に、良く、ご無事で……」

内通者「あんな間抜け共に捕まるかよ！」

まゆみ「サンクトペテルブルクの港に停泊中は……、ガングート級かな？」

隊員3「後は駆逐に軽巡ぼっかだな……、多少は重巡もいるが……」

聡子「ねえこれ、この奥の怪しくない？」

まゆみ「壁が邪魔でよく見えない……、けど何か作つてるのは確かだね……」

内通者「そのドツクな、噂では貴国の長門型やドイツのビスマルク級を遙かに上回る戦艦を作る物らしいな。」

この内通者のもたらした情報はすぐさま暗号化され海軍軍令部へと送られた。

それから更に1カ月が経った頃、陸軍はスパイ部隊を撤退させた。

その理由としては情報の行き来がいくらかスムーズである事と、長時間報告を待つ必要が無いからである。

対しまだ決定的な情報を得ていない海軍は活動を続け、以前の報告から3カ月後の2月に有用な情報が舞い込んで来た。

内通者「自ら忍び込んで遂に捉えたぜ！」

そう自慢げに写真を渡す内通者。

その写真を見て驚くスパイ部隊。

まゆみ「でかい・・・」

聡子「260m、いや、270mはあるかな・・・」

まゆみ「主砲は16インチ、確かにこれなら長門型でもやばいね・・・」

内通者「こいつは来年には進水するらしいぜ、どうするよ日本海軍！」

この日から更に2カ月が経った4月、更なる有力な情報を得たスパイ部隊はこの内容をまとめ暗号化し軍令部に送る。

するとすぐさま撤退命令が下された。

まゆみ「(とんでもない事知ちゃった、今はあんたの逃げ足が欲しいね、鈴は元気してるかな?)」

海軍のスパイ部隊は痕跡を可能な限り消し、マガダンを去って行った。

ハバロフスク攻略戦です！

ソ連領にはまだ積雪が残る1941年3月半ば、陸軍がハバロフスク攻略に動き出し、奉天の満洲方面軍総司令部には総司令官の西住しほ元帥を始め山下奉文大将や栗林忠道中将など師団長クラス以上の指揮官が集められた。

しほ「現在ハバロフスクに配置されている敵守備軍は陸軍15000、空軍陸戦隊5000程度との事、奉天やウラジオストク、北樺太に戦力を回した事と、以前行った空軍の奇襲で大分戦力を分散させる事が出来たわ。」

杏「なお、敵はこのハバロフスクの直ぐ隣、アムール川によつて囲まれたキロフスキーと呼ばれる場所に兵力を集中させ、キロフスキー全域、総延長10kmにもなる塹壕と鉄条網を張り巡らせ、内陸部には複数のトーチカを構成して機関銃や野戦砲、野戦重砲を多数配置しているとの事です。」

攻略目標の解説は満洲方面軍作戦参謀の角谷杏大佐が行う。

山下「旧帝政ロシアの戦法とよく似ていますな。」

栗林「四方を川に囲まれているため、川を渡らねばなりません、その間に撃たれま
す。」

山下「仮にたどり着いたとしても長大な防衛陣地に阻まれるでしょう。」

杏「既に空軍の陸上航空団に支援を要請してありますので、上陸は航空攻撃の後がよろしいかと。」

山下「うむ、西住閣下、今作戦、どの部隊をぶつけますか。」

栗林「既に多くの者が奉天の南からハルビンへ移動を開始しているためほとんど有力な戦力がありません。」

辻「つい先日、南樺太の第88師団が北樺太の敵と交戦状態に入ったそうです。」

杏「チツ、あわよくば北海道の第5方面軍から1個師団引き抜こうと思っておりますが、そうもいかなくなりましたね。」

実はこの会議が行われる5日程前、北樺太のソ連軍が本格的な南樺太攻略に乗り出しました。

それに対し日本軍は陸軍第88師団を最前線に送り国境付近で交戦状態となった。

杏「幸い樺太には第88師団以外に空軍海洋航空団の1個航空戦隊および海軍の1個水雷戦隊、更に米海兵隊1個師団15000人と米太平洋艦隊が既に到着しており敵を何とか抑え込んでいるとの事です。」

辻「カムチャツカ半島のマツカーサー軍に多少の余裕が生まれ始めたとの報告を受けました。」

杏「それでも第5方面軍に師団規模の援軍を出せる余裕はないでしょう。」

米軍の増援がやって来た事で樺太は持ち堪えているが、それでも元々いたソ連陸軍50000に加え大陸からの増援として陸軍40000、1個機甲師団、空軍が樺太に上陸、これに対し日本陸軍20000、米海兵隊15000と日米軍の航空戦力および水上打撃艦隊で対抗しなければならなかったため、他の部隊に援軍を出せる余裕などなかった。

しほ「となると、司令官は牟田口中将ぐらいしかいないわね・・・」

山下「やれるか？」

牟田口「はっ、ご命令とあらばお引き受け致します。」

牟田口はハバロフスク攻略の司令官を引き受けた。

司令官一同「・・・」

しかし、他の司令官からの痛い視線が彼に降り注ぐ。

そんな中、以前は牟田口を直属の部下としていた山下が口を開く。

山下「確かにこやつは以前失態を侵したが、儂の知る限り名将とは呼べんが凡将ほどの力はある、問題は参謀および各隊指揮官ですな。」

山下は牟田口が決して愚将では無いと言い、むしろ問題は参謀や現場指揮官であると言う。

杏「今ハバロフスク攻略に割ける部隊はあまり前線での経験が無い部隊ばかりです。」
栗林「ただでさえ人手不足なのだ、仕方あるまい。」

牟田口「兵力はどのくらいで？」

杏「歩兵3個師団、野戦砲1個連隊、野戦重砲2個大隊、97式戦車2個大隊、3式戦車1個大隊、陸軍総兵力は60000と言ったところで、更にそれを空軍の陸上戦闘機1個戦隊および爆撃機1個飛行大隊が支援します。」

牟田口「4式や4式改は流石に無理か、これでもなけなしの戦力なのだな。」

杏「はい、ですが試作品ではありませんが28センチ榴弾砲改を2個小隊ほど付けました。」

牟田口「それはありがたい！」

要塞攻略において大口径の榴弾砲は必要不可欠であるため牟田口は大いに喜んだ。

そしてこの2日後、牟田口を指揮官としたハバロフスク攻略軍を編制、軍団は途中途中合流しながらハバロフスクを目指し、ハバロフスクのキロフスキー要塞に辿り着いたのは翌週の早朝。

この時の牟田口軍の兵力は60000、ソ連側は20000であった。
そしてキロフスキー要塞の北に司令部を置き作戦行動を開始した。

牟田口「キロフスキーはこちらから見て正三角型であるな．．．」

辻「はい．．．」

なお、牟田口の参謀として辻政信大佐と角谷杏大佐が付けられた。

杏は司令本部との連絡要員も兼ねているため、この牟田口軍の実質の参謀長は辻であつた。

杏「さて、問題は．．．」

それとは別に杏が牟田口軍に付いた理由があつた。

西「この度はよろしくお願い致します！」

河嶋「以前の失態を挽回したいと思います！」

それは以前の戦いで敵陣に無茶な突撃を行い大きな損害を出してしまった西絹代中佐と河嶋桃中佐であつた。

杏「（この）2人がまたやらかきさない様に見張りが居ないとね．．．」

杏「おう、よろしく。」

西、河嶋は97式中戦車1個大隊長であつたが、この戦いにおいては元の戦車大隊に加え歩兵1個中隊およそ200人が加わっている。

牟田口「さて、各隊指揮官が集まったところで、軍事を始める、辻、進行を頼む。」

辻「はっ！」

そして司令部に人員が揃ったのを確認した牟田口はハバロフスク・キロフスキー要塞
攻略における最初の軍議を開いた。

辻「作戦は以前と変わらず夜明け前に空軍による空爆と我が隊による砲撃を加え、人
員を小型艇で迅速に上陸させ一気に落とします！」

杏「辻参謀長、上陸後は正面攻撃を仕掛けるつもりですか？」

辻「無論だ、そもそもこの要塞は正面攻撃でなければ落とせん！、全力を持って突撃
する！」

杏「!!、それでは多大な犠牲が！」

西「やりましょう！、敵陣に突撃し死ぬのであればそれは日本軍人としての誉れであ
ります！」

指揮官「おう！、やろう！」「俺も賛成だ！」「突撃で行きましょう！」

この時、杏はここでこれから起こる悲劇を確信した。

翌日の午前4時、嵐の前の静けさが辺りを包み込んでいた。

作戦参謀「各隊の配置はこの様に。」

牟田口「うむ・・・」

辻「三角形の陣形に対し正面、西、東に各歩兵1個師団を配置、戦車部隊や砲兵は正

面に全体の半数を置き、残り半数を東西の部隊で二分し配置しております。」

杏「……、軍団長、時間です。」

牟田口「各隊へ伝えよ、砲撃および兵員上陸用意！」

牟田口の命令と同時に上空を空軍の一式陸攻30機が通り過ぎた。

杏「(始まる……、どうも嫌な予感がする……)」

日本爆撃機隊長「爆撃開始！」

真つ暗で静かな大地に突如として轟音が響き渡り爆炎が暗闇を照らした。

ソ連兵「ぐう!!、何だ!」「爆撃だ!」「敵が来るぞ!」

日本野戦砲隊長「砲撃用意!、撃て——!!」

日本野戦重砲隊長「撃て——!!、吹き飛ばせ!」

続く7.5 cm野戦砲と10.5 cmカノン砲、28 cm榴弾砲改による攻撃で敵陣地の塹

壕にいたソ連兵や前線のトーチカ、鉄条網などが吹き飛ばされていった。

しかしこの爆撃と砲撃の効果は薄く、敵は直ぐさま猛反撃に出た。

正面歩兵師団長「突撃!、掛かれ——!!」

日本兵「「うおおお——!!」「」

それを合図に日本軍歩兵が次々と20人乗りの小型艇に乗り込み川を渡り始めた。

ソ連砲兵隊長「撃て、撃てー！！、奴らを近づけるな！」

敵も果敢に反撃を開始、敵の砲は前線の物は小型艇を、後方の物は日本軍砲陣地をそれぞれ狙った。

日本兵「怯むな！」「ぐああー！！」「一隻やられた！」「生き残った者は泳いででも渡れ！」

砲撃を掻い潜りキロフスキー要塞に上陸した日本兵はそのまま前進するが敵は塹壕から激しい銃撃を浴びせ、第1陣の歩兵1個連隊は多大な損害を受けた。

日本歩兵連隊長「次の部隊が来る！、立ち止まるな！、進め！」

しかし、すぐさま連隊規模の第2陣が上陸してくるため、先に上陸した兵は前に進むしか無い上に進めば鉄条網に阻まれ、鉄条網を突破できても塹壕や機関銃陣地が、塹壕や機関銃陣地を突破しても高い壁とトーチカがあり、味方を見るも無残に倒れて行った。

牟田口軍司令部

通信士1「申し上げます！、上陸した第1陣！、被害甚大！、死傷者は1000人を超えるとの事であります！」

通信士2「申し上げます！、第2陣上陸するも敵の攻撃に阻まれ、上陸後僅か30分

でおよそ500人戦死！」

杏「くっ……」

報告を聞いた杏は奥歯を噛みしめた。

牟田口「ハバロフスクはハルビン侵攻の際に我が軍の横つ腹を突いて来る脅威がある！、またウラジオストク攻略の邪魔にも成り兼ねん！、何としても落とすのだ！」

西「戦車運搬用の輸送艇はまだですか！」

作戦参謀「先週要請したばかりです！、まだまだかかります！」

通信士「空軍の第2波は中央から南側を狙って爆撃を行うようであります！」

航空支援や援護砲撃があるだけましではあるかもしれないが、前線の歩兵はまさに地獄のど真ん中に立たされた様な状態であった。

杏は作戦開始前に予感した通り、後にハバロフスク・キロフスキー要塞の悲劇と呼ばれる惨劇が始まってしまったのである。

ハバロフスク・キロフスキーの悲劇です！

まだ寒さが残る中、時期は巡り4月を迎えた。

日本は雪溶けの時期を迎えているにも関わらず、各地の日本陸軍の戦線は凍結していた。

角谷杏が参謀を務める牟田口軍も例外では無く、作戦開始から3度の総攻撃が行われた。

しかし、いずれも失敗に終わり、その戦死者は既に10000人を超えていた。

案内人「間もなくです、岬大佐」

明乃「案内ご苦労様。」

そんな中、戦艦長門の艦長である岬明乃は単身、呉鎮守府を訪れていた。

その目的は、1940年8月に進水を迎え、間もなく実戦配備されるであろう世界最大の超弩級戦艦である大和を視察する様、海軍大臣の宗谷真雪元帥に命じられたためである。

明乃「(突然の視察命令・・・、一体何故私に?)」

いくつかの疑問を残しながらも案内人の運転する小型艇で瀬戸内海に繰り出す。

するとそこには想像を絶するほど巨大な、黒鉄の城とも呼べる戦艦大和が姿を現した。

明乃「これが、大和・・・」

明乃はその凄さに圧倒されながら小型艇から大和に乗り移り、艦橋を目指す。

芽衣「凄い！、凄いよ！、これに乗って早くあの主砲撃ちたいよ！」

するとそこには川内に乗艦しているはずの西崎芽衣の姿があった。

明乃「随分とはしやいでいるね、西崎中佐。」

芽衣「岬大佐！」

明乃「何をそんなに興奮しているの？」

芽衣「何ってそりゃあ！、世界最大最強の46cm3連装砲3基9門！、撃て撃てなアタシにはもう最高ですよ！、あー！、は・や・く・う・ち・た・い！」

芽衣はもはや收拾が付かない程に興奮していた。

案内人「岬大佐、西崎中佐は私が何とかしますので任務の方をお願いします。」

明乃「わかった、お願いね。」

案内人「はい！」

芽衣が興奮する理由を良く知っている明乃は冷静に艦橋を始め、艦内を歩き回り視察の任務を全うした。

しかし、途中で合流した芽衣が射撃指揮所に入るなり本当に主砲を撃とうとしたため全力で取り押さえると言うトラブルが発生したのはまた別のお話。

明乃「(この大和1隻を作るのに国家予算の3%を食い潰してしまった・・・、そのせいで国民は重税に苦しんでる・・・、大事に使って、必ず勝つ!)」

キロフスキー要塞正面・日本軍司令部

この日、参謀長である辻より次なる作戦が発表された。

辻「この様に2個小隊を5人1組の微力偵察部隊に分離、闇に紛れて川を渡り防壁をくり貫いて作られたと思われるトーチカ付近に爆薬を設置、合図と共に一齐に爆破した後、全力を持ってトーチカを通り内部へ攻め込む!、以下がですか閣下?」

牟田口「まあ、正面攻撃よりは幾分マシか・・・」

杏「突撃の援護は如何致しますか?」

牟田口「西、河嶋の戦車大隊にやって貰おう。」

今回のこの作戦はこれまでの正面総攻撃よりは作戦として成り立っていると判断した牟田口は承認し、杏はまだどこか不安感を抱いていたが賛成した。

そして翌日、夜明前に作戦が開始された。

爆破隊長「よいい!、点火!」

爆破隊長の合図で仕掛けられた爆薬が一斉に爆炎と化し暗闇を照らした。

ソ連兵「ぐああああ！」「何が起こった！」

歩兵旅団長「突撃！」

日本兵「「「「うおおおおー！！」「」」」

うおおおおー！！

絹代・桃「撃てー！！」

そして先発の歩兵1個旅団6000人が突撃、その援護として絹代、桃の各戦車大隊が砲撃を開始、地上の敵防衛陣地を攻撃した。

歩兵旅団長「あれだ！、あそこから突っ込め！」

向こう岸にたどり着いた歩兵隊は1個分隊規模でボートから破壊されたトーチカへ飛び込み前進した。

辻「これで兵たちが次々と上陸、戦車隊の攻撃で地上の防衛陣地もある程度破壊されておるから次の一手でもう1個旅団送り込めばそれで終わりだ！」

作戦の進行具合を司令部付近の見張り台から見ている辻を始めとする牟田口軍参謀達は皆がそう考えていた。

しかし、通信員から飛び込んで来た知らせは辻らの理想からあまりにもかけ離れた物であった。

通信員「突撃部隊より！、我ら敵要塞に侵入するも！、視界の悪い洞窟の中で敵は数多の隠し部屋より攻撃！、既に兵力の損失大なり！、との事です！」

辻「なに！」

通信員「新たに報告！、トーチカから洞窟を通り地上へ出る部隊も少なく無いが敵の強靱な防衛陣地に阻まれ被害甚大！、戦車隊の砲撃効果は薄いものとみられる！、との事です！」

余りにも誤算であつた、辻はトーチカから地上にでる事は用意であると兵に伝えていた。

そのため、油断した日本兵は洞窟に設置された数え切れぬほどの隠し部屋より奇襲を受け、洞窟内で全滅した部隊まで出始める始末であつた。

更に辛うじて洞窟での攻撃を交わし地上へと出る事の出来た部隊もいたが、その部隊を待つていたのはソ連軍主力戦車のT-34/76およびT-34/85であつた。

これらの戦車はある程度距離がある中で、93式戦車の57mm砲で破壊する事は不可能に等しかった。

辻「おのれ！」

次席参謀「追加の部隊は如何致しますか！」

辻「くっ！」

余りの惨状に辻は焦った。

そしてその焦りが辻から冷静さを奪った。

辻「第二波を出せ！」

杏「!!、ちよつと待て！」

更に部隊を送り込もうとする辻に杏は異議を申し立てようとした。

辻「なんだ？、今の参謀長はこのワシだ！、いくら総司令部の参謀とは言え口を挟んで貰えないか？」

杏「くっ！」

しかし、立場がそれを許さなかった。

いくら総司令部所属とはいっても、他の部隊の作戦指揮そのもの捻じ曲げる事は出来ない。

杏は奥歯を噛みしめた。

杏「（これは明らかな地獄だ！）」

そして突撃し、洞窟から抜け出し地上で敵陣に突撃する兵が現場で体験している物は紛れもない地獄であると感じた。

しかしそんな中で、敵防衛陣地を全て突破し本丸へとたどり着いた部隊が僅かに存在したが、それでも新たな防衛陣地に阻まれ内部に至る事は出来ず倒れた。

杏「このままこんな無茶な作戦を続けていたら!、牟田口軍は立ち直れなくなる!」

そんな中、補給のために一度、旅順港へ立ち寄った連合艦隊から山本を始め、艦隊首脳陣の数人が補給期間中に奉天の満洲方面軍総司令部を訪れていた。

山本「お久しぶりです、西住閣下。」

しほ「ええ、お久しぶりですね、山本閣下。」

そこでは西住しほ元帥を始め、陸軍首脳がすでに席に着いていた。

山本「聞いたところによりますと、奉天に置かれている本体は行動を起こさず、1個軍団でハバロフスク攻略を行っているとの事です?」

しほ「ええ、ハバロフスクの部隊は我が軍にとって大きな脅威と成り兼ねませんので。」

山本「しかし、陸軍もまた人で不足と聞いておりますが・・・」

しほ「なのでこちらは動かさず、敵を動かさない、攻めて来た場合には防戦に徹する様命じています。」

山本「では現在、ハバロフスク攻略はどの様な状況になっておられるのですか?」

陸軍陣営「・・・」

山本が言葉を達した途端、陸軍側に一度沈黙が生まれた。

まほ「苦戦しております、敵の防戦が想像を絶する程激しく、被害も少なく無いと、しかし確実に進行しております。」

そして初めに口を開いたのは西住まほ少将であった。

ましろ「確実に進行とは？、具体的にはどれ程進行しているのか、お教え願います。」
それに対し宗谷ましろ大佐が返す。

まほ「私を知っているのは確実に進行していると言う事のみだ。」

ましろ「それでは理解できません、本当に進行しているのですか？」

まほ「なに？」

ましろ「ハバロフスク攻略を支援した爆撃機隊の搭乗員によれば未だ上陸すら難しいと聞いております！、何が何でも落とさなくてはならないあの要塞が未だ無傷であると！」

まほ「貴様！」

この2人はそれぞれ陸軍軍令部総長と海軍大臣の娘であり、以前の御前会議でのやり取りの様に、2人のやり取りには緊迫感が現れ始めた。

しほ「よしなさい！」

まほ・ましろ「！」「！」

それを見かねたしほが2人を止める。

しほ「あなたは宗谷真雪元帥の息女の宗谷ましろであつてゐるかしら?」

ましろ「はい……」

しほ「海軍一の秀才だそうね、先ほどあなたが申した事の根拠は何かしら?」

ましろ「ハバロフスクは、シベリア方面からウラジオストクへの中継地点であると同時にオホーツク海に面した地域があります!、もしそこに多数の空軍基地を置かれれば北方の艦隊が常に空襲の危機に曝されます!」

しほ「なるほど、ベーリング海とオホーツク海を抑えれば陸路以外で極東への支援は不可能、我が陸軍としても決して悪い話ではありませんね。」

ましろ「でしたら!」

しほ「しかし、力任せに攻めればあまりにも多くの犠牲が出る事になるわ。」

ましろ「くっ!」

まほ「まあそういう事だ、慌てるな。」

ましろは苦虫を噛み潰した様な表情になり、一度両陣営に沈黙が生じた。

山本「まあ、今日はもう遅いので続きは明日にしませんか?」

しほ「……、ええ、そうさせて頂きましょう。」

そして山本の放った一言でこの場はお開きとなり、明乃にもえか、ましろは3人で1つの部屋に集まった。

その中でもえかがましろに切り出す。

もえか「シロちゃん、なんであそこまでハバロフスクにこだわるの？」

ましろ「先の日露戦争の時と同じだ。」

もえか「旅順のこと？」

ましろ「ああ、帝政ロシアは旅順陥落によつて奉天で敗走したと言つても過言では無い。」

明乃「それは結果論な気がするけど？」

ましろ「いいや今回もソ連はハバロフスクのために敗北する！、だがこちらが取れないければ日本軍はハバロフスクのために敗北する！」

ましろはあくまで陸軍にハバロフスク攻略を求めた。

その理由の一つは当然、オホーツク海で艦隊が空襲に晒されるのを防ぐためであった。

明乃「けどそのハバロフスク攻略で10000人の兵が戦死したって聞いたよ？、このまま陸軍が力押しで行けば確実にはじき返されると思うし、それ以前に陸軍は海軍の言う事に耳を傾けようとしなくても事実。」

もえか「作戦失敗が続いて、今更になつて海軍の意見を聞き入れたとなつては陸軍の面子が経たないと言う事ね。」

明乃「これだけの事が続いているからこそ、冷静に考えた方がいいよシロちゃん。」

ましろ「何を呑気な事を!、例え60000の兵が犠牲になろうとも!、ハバロフスクは絶対に落さねばならない!」

明乃「!!、可能な限り犠牲を最小限に留めるのがシロちゃんの!、宗谷流の作戦じゃないの!」

もえか「シロちゃん、いいえ、宗谷作戦参謀、一度冷静になる?」

ましろ「・・・、すまない、ちよつと夜風に当たって来る・・・」

表情にこそ出さなかったが、この時のましろは少々混乱している節があったと2人は感じた。

一方のハバロフスクでは新たな攻撃が開始されようとしていた。